

秋田県文化財調査報告書第205集

# 東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅶ

北田山田ヶ沢Ⅰ遺跡・北田山田ヶ沢Ⅱ遺跡  
大畑潜沢Ⅱ遺跡・大畑潜沢Ⅲ遺跡

1991・3

秋田県教育委員会

秋田県埋蔵文化財センター

# 東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅶ

きた だ やま だ さわ  
北田山田ヶ沢Ⅰ遺跡・北田山田ヶ沢Ⅱ遺跡  
—— おお はた くぐり さわ ———  
大畑潜沢Ⅱ遺跡・大畑潜沢Ⅲ遺跡

1991・3

秋田県教育委員会

## 序

東北横断自動車道秋田線は、秋田県の高速交通体系の根幹となるもので、すでに秋田市から横手市までの57.4kmについては、平成3年度の完成を目指して着々と工事が進められております。

本区間の路線には、多くの遺跡の存在が確認されており、秋田県教育委員会では、昭和60年度から工事に先立って遺跡の発掘調査を実施して、記録保存に努めております。

本報告書は、昭和62年度・昭和63年度に調査しました北田山田ケ沢Ⅰ遺跡・北田山田ケ沢Ⅱ遺跡・大畑潜沢Ⅱ遺跡・大畑潜沢Ⅲ遺跡の4遺跡の調査成果をまとめたものであります。本書が、埋蔵文化財の保護に広く活用され、郷土の歴史文化を研究する資料として、多くの方々に御利用いただければ幸いに存じます。

最後に、本調査の実施及び本書の刊行に際し、御協力を賜りました日本道路公団、南外村教育委員会をはじめ、関係各位に対し厚く御礼申し上げます。

平成3年2月15日

秋田県教育委員会

教育長 橋本 顕信



## 例 言

1. 本書は、東北横断自動車道秋田線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書の7冊目の報告書である。
2. 本書は、昭和62・63年度に調査された南外村に所在する北田山田ケ沢Ⅰ遺跡、北田山田ケ沢Ⅱ遺跡、大畑潜沢Ⅱ遺跡、大畑潜沢Ⅲ遺跡の調査結果を収めたものである。
3. 各遺跡の内容については、すでにその一部が調査略報などによって公表されているが、本報告書の内容がそれらに優先する。
4. 本書の執筆は、下記の通りである。

はじめに・遺跡周辺の地形・地質と歴史的環境 1・2	高橋忠彦
遺跡周辺の地形・地質と歴史的環境 3	栗澤光男
北田山田ケ沢Ⅰ遺跡	栗澤光男
北田山田ケ沢Ⅱ遺跡	高橋忠彦
大畑潜沢Ⅱ遺跡	高橋忠彦
大畑潜沢Ⅲ遺跡	榮 一郎

5. 本書に使用した地図は、国土地理院発行の5万分の1『大曲』『刈和野』地形図である。
6. 遺構土層図中の土色については、農林省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖』によった。
7. 挿図中の遺物番号は、遺構内外の出土を問わず、土器・石器ごとに通し番号を付してあり、その番号は、図版中の遺物番号と対応している。
8. 遺構番号は、その種類ごとに略号を付し、検出順に通し番号を付したが、後に検討の結果、遺構ではないと判断したものは欠番とした。また遺構・遺物には下記の略記号を使用した。

SK…………土坑 SKT…………陥し穴 RP…………土器 RQ…………石器

9. 発掘調査および本書作成に際し、以下の方々から御援助・御教示を賜った。記して感謝申し上げる。(敬称略)

秋元信夫 伊藤又四郎 長山幹丸



# 目 次

## 序

例	言
目	次
挿	図 目 次
表	目 次
図	版 目 次

## はじめに

1	調査に至るまで	3
2	調査の組織と構成	5

## 遺跡周辺の地形・地質と歴史的環境

1	遺跡周辺の地形	11
2	遺跡周辺の地質	13
3	遺跡周辺の歴史的環境	15

## 北田山田ケ沢Ⅰ遺跡

第1章	遺跡の概要	21
第1節	遺跡の立地	21
第2節	調査の方法と経過	21
1	調査の方法	21
2	調査の経過	21
第3節	遺跡の層序	23
第2章	検出遺構と遺物	25
第1節	遺構と出土遺物	25
1	土坑	25
第2節	遺構外出土遺物	32
1	縄文土器	32
2	石器	32
3	中世陶器	32
4	その他の遺物	32
第3章	まとめ	34

## 北田山田ケ沢Ⅱ遺跡

第1章	遺跡の概要	47
第1節	遺跡の立地	47
第2節	調査の方法と経過	48
1	調査の方法	48
2	調査の経過	48
第3節	遺跡の層序	49
第2章	出土遺物	50
第1節	土器	50
1	縄文土器	50
2	弥生土器	51
3	中世陶器	51
第2節	石器	51
第3章	まとめ	55

## 大畑潜沢Ⅱ遺跡

調査の概要	63
1 遺跡の立地	63
2 調査の方法	63
3 調査の結果	63

## 大畑潜沢Ⅲ遺跡

第1章 遺跡の概要	69
第1節 遺跡の立地	69
第2節 調査の方法と経過	69
1 調査の方法	69
2 調査の経過	69
第3節 遺跡の層序	71
第2章 検出遺構と遺物	75
第1節 遺構	75
1 陥し穴	75
第2節 出土遺物	78
1 土器	78
2 石器	80
第3章 まとめ	81

## あとがき

### 挿図目次

第1図 道路計画と調査範囲(1)	7	第5図 遺跡縦断面図	12
第2図 道路計画と調査範囲(2)	8	第6図 遺跡周辺の表層地質図	14
第3図 遺跡位置図	11	第7図 周辺遺跡位置図	17
第4図 遺跡周辺の地形図	12		

## 北田山田ケ沢Ⅰ遺跡

第1図 調査範囲図	22	第6図 遺構内出土遺物(土器・石器)	30
第2図 土層柱状図	23	第7図 遺構内出土遺物(土器)	31
第3図 遺構配置図	24	第8図 遺構外出土遺物(石器)	32
第4図 土坑SK01～SK06	27	第9図 遺構外出土遺物(土器)	33
第5図 土坑SK07～SK11	29		

## 北田山田ケ沢Ⅱ遺跡

第1図 調査範囲図	47	第4図 出土遺物(土器)	52
第2図 土層柱状図	49	第5図 出土遺物(土器)	53
第3図 グリッド配置図	50	第6図 出土遺物(石器)	54

## 大畑潜沢Ⅱ遺跡

第1図 調査範囲図	64
-----------	----

## 大畑潜沢Ⅲ遺跡

第1図 調査範囲図	70	第5図 陥し穴SKT02	77
第2図 調査区土層柱状図	72	第6図 陥し穴SKT03	78
第3図 調査区遺構配置図	73・74	第7図 出土遺物(土器・石器)	79
第4図 陥し穴SKT01	76	第8図 秋田県内陥し穴検出遺跡分布図	84

## 表 目 次

### 遺跡周辺の地形・地質と歴史的環境

第1表 周辺遺跡一覧表……………18

#### 大畑潜沢Ⅲ遺跡

第1表 秋田県内陥し穴検出遺跡一覧表……………85・86

## 図 版 目 次

### 北田山田ヶ沢Ⅰ遺跡

図版 1	1	調査前全景 (南東▷北西) ……	35	図版 6	1	SK06 (南▷北) ……	40
	2	調査前全景 (南西▷北東)			2	SK07 (北東▷南西)	
図版 2	1	調査後全景 (南東▷北西) ……	36	図版 7	1	SK08 (南東▷北西) ……	41
	2	調査後全景 (南西▷北東)			2	SK09 (北▷南)	
図版 3	1	調査風景 (南▷北) ……	37	図版 8	1	SK10 (南▷北) ……	42
	2	調査風景 (南東▷北西)			2	SK11 (南東▷北西)	
図版 4	1	SK01・SK02 (北西▷南東) ……	38	図版 9	1	遺構内出土遺物 (土器) ……	43
	2	SK03 (北西▷南東)			2	遺構内出土遺物 (土器)	
図版 5	1	SK04 (北▷南) ……	39	図版10	1	遺構内出土遺物 (土器・石器) ……	44
	2	SK05 (南東▷北西)			2	遺構外出土遺物 (土器・石器)	

### 北田山田ヶ沢Ⅱ遺跡

図版 1	1	調査風景 (南▷北) ……	57	図版 3	1	出土遺物 (土器) ……	59
	2	調査後全景 (北▷南)			2	出土遺物 (石器)	
図版 2	1	出土遺物 (土器) ……	58				
	2	出土遺物 (土器)					

#### 大畑潜沢Ⅱ遺跡

図版 1	1	調査前全景 (南▷北) ……	65
	2	調査風景 (南▷北)	

#### 大畑潜沢Ⅲ遺跡

図版 1	1	調査区全景 (東▷西) ……	93	図版 4	1	SKT03底面 (南▷北) ……	96
	2	丘陵南裾部調査風景 (北▷南)			2	SKT03完掘状況 (南▷北)	
図版 2	1	SKT01完掘状況 (西▷東) ……	94		3	SKT03土層断面 (南▷北)	
	2	SKT01土層断面 (西▷東)		図版 5	1	調査区 (B-C間)土層 (南▷北) ……	97
図版 3	1	SKT02確認状況 (西▷東) ……	95		2	土器検出状況 (南西▷北東)	
	2	SKT02完掘状況 (西▷東)			3	石器検出状況 (東▷西)	
	3	SKT02土層断面 (西▷東)		図版 6	1	出土遺物 (土器・石器) ……	98



はじめに

## 1 調査に至るまで

東北横断自動車道秋田線は、首都圏への時間短縮、陸上交通体系の改善など地域の生産活動や住民生活に必要な情報や資源の交流を促進することを目的として、東北縦貫自動車道を岩手県の北上市で分岐し横手市、大曲市を経て秋田市に至る延長約108kmの高速道路である。

このうち横手市－秋田市間57.4kmについては、昭和46年6月に基本計画が示され、昭和53年11月には整備計画とともに第8次施行命令が下された。これに伴い昭和54年11月には、日本道路公団仙台建設局長から秋田県教育委員会教育長あてに、道路計画路線内に存在する埋蔵文化財包蔵地の分布調査の依頼があった。これを受けて秋田県教育委員会では、昭和55・56年の2<sup>(1)(2)</sup>ケ年にわたって遺跡の分布調査を行い、計画路線内に44遺跡が存在することを報告した。さらに昭和58年にはこれら遺跡の詳細分布調査<sup>(3)</sup>を行い、最終的に路線内には37遺跡<sup>(4)</sup>が存在することを報告している。

これらの調査結果に基づき、日本道路公団と秋田県教育委員会との間で、37遺跡の保存について協議されたが、路線変更の不可能なことから、記録保存の措置をとることで合意し、昭和60年度から調査が開始されたのである。

調査は、秋田市寄りの遺跡から順次着手され、昭和60年には、河辺郡河辺町七曲地区の6遺跡<sup>(5)</sup>、翌61年には仙北郡協和町中淀川地区の上ノ山Ⅰ・Ⅱ<sup>(6)</sup>、館野遺跡<sup>(7)</sup>、それに同町峰吉川地区に所在する半仙遺跡<sup>(8)</sup>の一部の調査が実施されている。さらに昭和62年には半仙遺跡の残りの部分と、西仙北サービスエリア予定地の<sup>(9)</sup>上野台遺跡とその北側の<sup>(10)</sup>寺沢遺跡、仙北郡南外村の大畑潜沢Ⅲ・小出Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡<sup>(11)</sup>の一部、平鹿郡大森町の下田遺跡<sup>(12)</sup>、横手市の手取清水遺跡<sup>(13)</sup>の調査を行っている。

昭和63年には小出Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡の残りの部分と小出Ⅳ遺跡<sup>(14)</sup>、北田山田ヶ沢Ⅰ・Ⅱ遺跡、大曲市の石神<sup>(15)</sup>・太田<sup>(16)</sup>・下田谷地遺跡<sup>(17)</sup>、横手市の上猪岡遺跡<sup>(18)</sup>、平鹿郡平鹿町の竹原遺跡<sup>(19)</sup>の調査を行い、翌平成元年には大畑潜沢Ⅱ遺跡の調査が行われている。

## 註

- 1 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第79集 1981  
(昭和56年)
- 2 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第93集 1982  
(昭和57年)
- 3 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第116集 1984  
(昭和59年)

はじめに

- 4 37遺跡のうちその後の範囲確認調査で遺跡範囲が路線内に及んでいないことが判明した遺跡があり、また、新たに館野遺跡、北田山田ヶ沢Ⅰ・Ⅱ遺跡を加えて、結果的に本調査の対象となった遺跡は27遺跡である。
- 5 秋田県教育委員会「石坂台Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ・Ⅸ、松木台Ⅲ遺跡」『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅰ』秋田県文化財調査報告書第150集 1986（昭和61年）
- 6 秋田県教育委員会「上ノ山Ⅰ遺跡・上ノ山Ⅱ遺跡」『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅱ』秋田県文化財調査報告書第166集 1988（昭和63年）
- 7 秋田県教育委員会「館野遺跡」『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅱ』秋田県文化財調査報告書第166集 1988（昭和63年）
- 8 秋田県教育委員会「半仙遺跡」『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅲ』秋田県文化財調査報告書第180集 1989（平成元年）
- 9 秋田県教育委員会「上野台遺跡」『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅲ』秋田県文化財調査報告書第180集 1989（平成元年）
- 10 秋田県教育委員会「寺沢遺跡」『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅲ』秋田県文化財調査報告書第180集 1989（平成元年）
- 11 秋田県教育委員会「小出Ⅰ遺跡・小出Ⅱ遺跡・小出Ⅲ遺跡」『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅶ』秋田県文化財調査報告書第206集 1991（平成3年）
- 12 秋田県教育委員会「下田遺跡」『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅳ』秋田県文化財調査報告書第189集 1990（平成2年）
- 13 秋田県教育委員会「手取清水遺跡」『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅴ』秋田県文化財調査報告書第190集 1990（平成2年）
- 14 秋田県教育委員会「小出Ⅳ遺跡」『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅷ』秋田県文化財調査報告書第206集 1991（平成3年）
- 15 秋田県教育委員会「石神遺跡」『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅵ』秋田県文化財調査報告書第191集 1990（平成2年）
- 16 秋田県教育委員会「太田遺跡」『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅸ』秋田県文化財調査報告書第207集 1991（平成3年）
- 17 秋田県教育委員会「下田谷地遺跡」『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅳ』秋田県文化財調査報告書第189集 1990（平成2年）
- 18 秋田県教育委員会「上猪岡遺跡」『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅹ』秋田県文化財調査報告書第208集 1991（平成3年）
- 19 秋田県教育委員会「竹原遺跡」『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅺ』秋田県文化財調査報告書第209集 1991（平成3年）



## 2 調査の組織と構成

調査主体者 秋田県教育委員会

遺跡名・所在地・調査面積・調査期間・調査担当者

遺跡名	所在地	調査面積	調査期間	調査担当者
北田山田ケ沢Ⅰ	仙北郡南外村字 北田山田ケ沢87外	300㎡	昭和63年10/1～10/30	栗澤 光男(文化財主事) 高橋 正洋(非常勤職員)
北田山田ケ沢Ⅱ	仙北郡南外村字 北田山田ケ沢268外	500㎡	昭和63年10/1～10/30	高橋 忠彦(文化財主任) 鎌田 茂(非常勤職員)
大畑潜沢Ⅱ	仙北郡南外村字 大畑潜沢155外	2,700㎡	平成元年 9/4～ 9/18	高橋 忠彦 栗澤 光男
大畑潜沢Ⅲ	仙北郡南外村字 大畑潜沢255	4,880㎡ (475㎡)	昭和62年11/5～11/17	築 一郎(学芸主事) 鎌田 茂 村上 光明(非常勤職員)

専門指導員

昭和62年度

- 工楽 善通 奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター集落遺跡研究室長  
 桑原 滋郎 宮城県多賀城跡調査研究所長（現宮城県教育庁文化財保護課長）  
 小林 達雄 国学院大学文学部教授  
 白石 建雄 秋田大学教育学部助教授  
 須藤 隆 東北大学文学部助教授（現東北大学文学部教授）

昭和63年度

- 白石 建雄 秋田大学教育学部助教授  
 戸沢 充則 明治大学文学部教授  
 林 謙作 北海道大学文学部助教授  
 吉岡 康暢 国立歴史民俗博物館考古研究部教授  
 渡辺 誠 名古屋大学文学部助教授（現名古屋大学文学部教授）

(五十音順)

はじめに

総務担当

加藤 進 秋田県埋蔵文化財センター主査（現秋田県立博物館課長補佐）

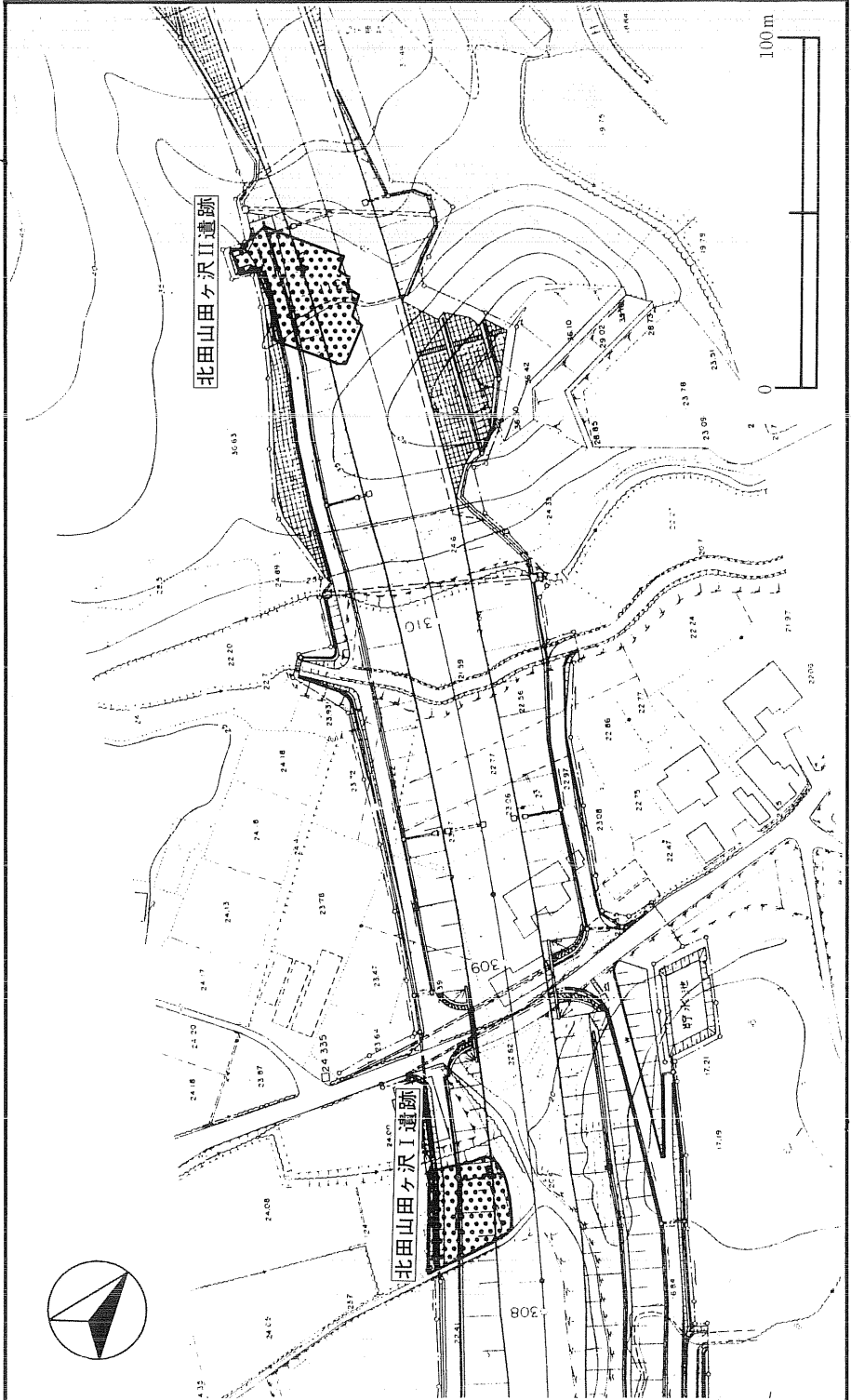
佐田 茂 秋田県埋蔵文化財センター主査

高橋忠太郎 秋田県埋蔵文化財センター主事

協力機関

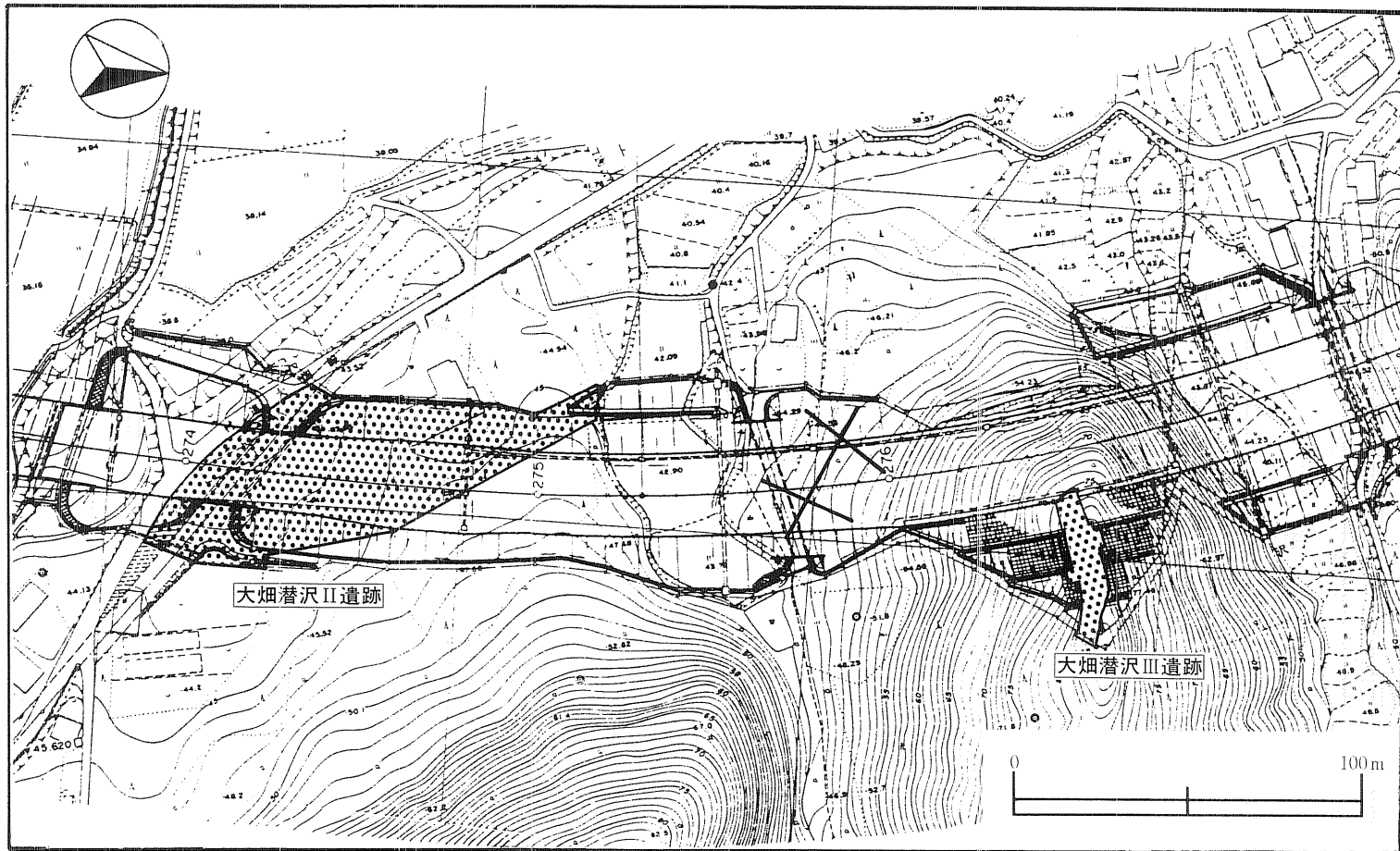
南外村・南外村教育委員会

神岡町・神岡町教育委員会



第1図 道路計画と調査範囲(1)





第2図 道路計画と調査範囲(2)

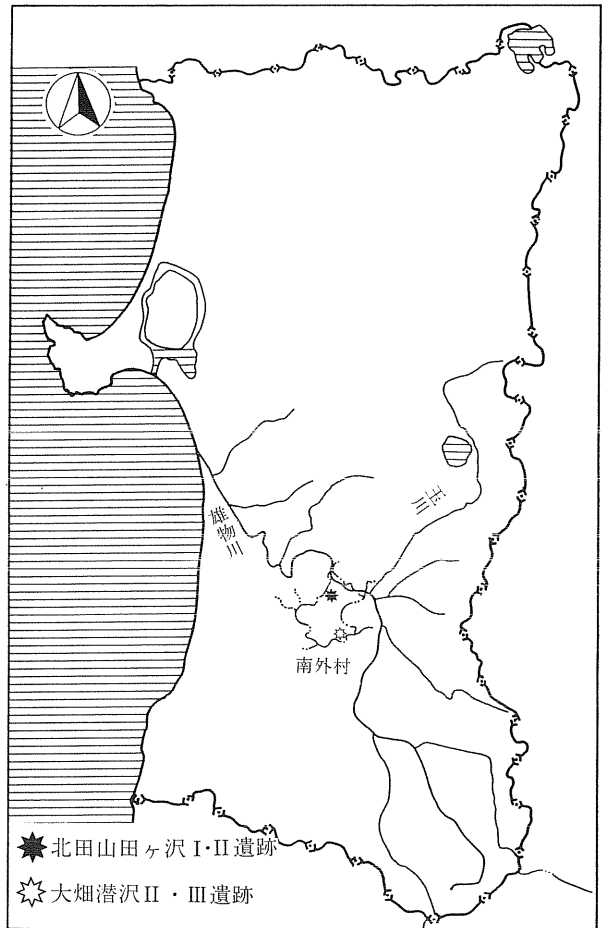
## 遺跡周辺の地形・地質と歴史的環境

## 1 遺跡周辺の地形

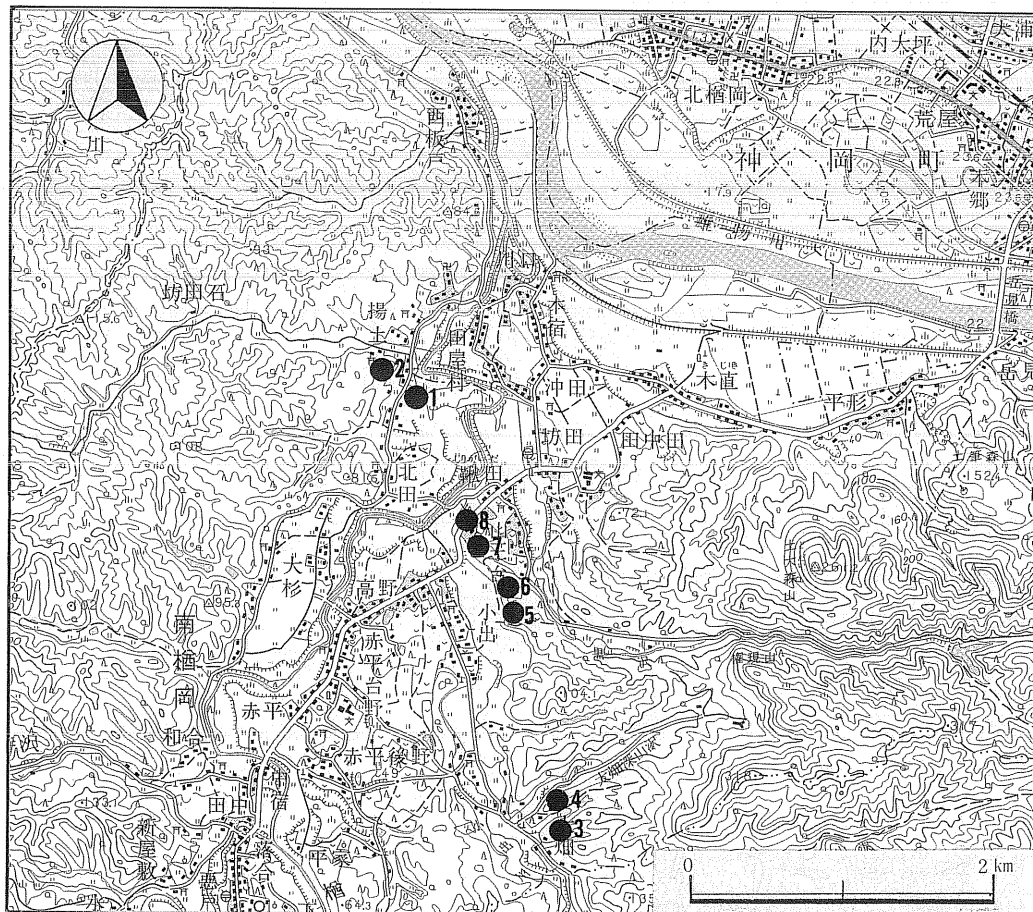
北田山田ヶ沢Ⅰ・北田山田ヶ沢Ⅱ遺跡、大畑潜沢Ⅱ・大畑潜沢Ⅲ遺跡のある南外村は、秋田県の中央部のやや南寄りにあり、村の大部分は出羽丘陵と、中央を南北に流れる櫛岡川流域の狭小な平地とからなる。南外村の大部分を占める出羽丘陵は、新潟県を含む東北地方日本海沿岸地帯の帯状の山地であり、新第三紀後半から第四紀にかけて進行した出羽変動が形成した褶曲山脈である。雄物川はこの出羽丘陵を削り続けて北流し、大曲市の北部で玉川と合流し、大きく西に蛇行する地域では、出羽丘陵は切り立った断崖をなしている。こうした雄物川に面した側とは対照的に、南外村側の櫛岡川右岸に面した出羽丘陵は、標高250～300mの土大森山や権現山を最頂部として、西北に向かって緩やかに高さを減じて、沖積面との接点には、櫛岡川やその支流である大小の沢によって形成された段丘面が認められる。一方の櫛岡川左岸では右岸ほど段丘面の発達は顕著でなく、東に張り出した丘陵末端部と櫛岡川との間にわずかに低位の段丘面が認められる程度である。

北田山田ヶ沢Ⅰ遺跡は櫛岡川と雄物川との合流点から南へ約1.5km、櫛岡川左岸で標高24mの低位の河岸段丘面北側先端部に立地している。北田山田ヶ沢Ⅱ遺跡は、北田山田ヶ沢Ⅰ遺跡の西方500m、これも櫛岡川左岸の丘陵、標高30m前後の斜面上に立地している。

大畑潜沢Ⅱ・大畑潜沢Ⅲ遺跡は、南外村南端部、櫛岡川の支流小出川右岸の丘陵上に位置している。大畑潜沢Ⅱ遺跡は、小出川に向かって緩く傾斜する丘陵裾部の標高45mほどの斜面上に立地しており、大畑潜沢Ⅲ遺跡は、大畑潜沢Ⅱ遺跡とは北側の小さな沢を隔て、西に張り出した標高80m前後の狭い尾根状の丘陵末端部に立地している。

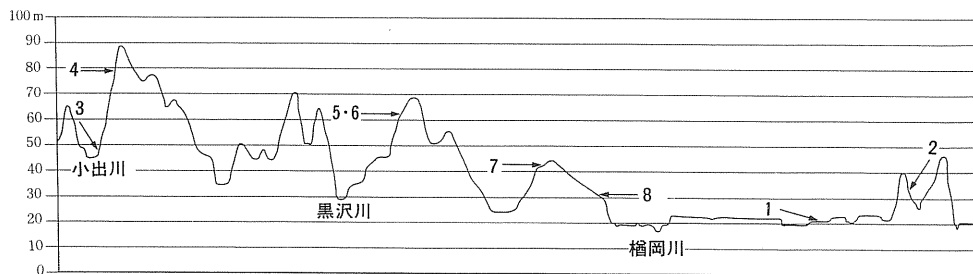


第3図 遺跡位置図



- |           |           |         |         |
|-----------|-----------|---------|---------|
| 1 北田山田ヶ沢Ⅰ | 2 北田山田ヶ沢Ⅱ | 3 大畑潜沢Ⅱ | 4 大畑潜沢Ⅲ |
| 5 小出Ⅰ     | 6 小出Ⅱ     | 7 小出Ⅲ   | 8 小出Ⅳ   |

第4図 遺跡周辺の地形図



- |             |             |           |           |
|-------------|-------------|-----------|-----------|
| 1 北田山田ヶ沢Ⅰ遺跡 | 2 北田山田ヶ沢Ⅱ遺跡 | 3 大畑潜沢Ⅱ遺跡 | 4 大畑潜沢Ⅲ遺跡 |
| 5 小出Ⅰ遺跡     | 6 小出Ⅱ遺跡     | 7 小出Ⅲ遺跡   | 8 小出Ⅳ遺跡   |

第5図 遺跡縦断面図

## 2 遺跡周辺の地質

秋田県は東北地方グリンタフ地帯の一角を占め、新第三紀以降の地層が先新第三系を不整合に覆って広く分布している。この新第三紀の地層（新第三系）は伝統的に上下に二分される。下部は「下部グリンタフ」とよばれ、主として火山噴出物から構成されている。一方上部は「含油新第三系」とよばれ、泥岩・砂岩などの堆積岩からなる。

含油新第三系を構成する地層は下位から順に女川層、船川層、天徳寺層、笹岡層に区別されている。これら含油新第三系を構成する堆積物は上位のものほど粗粒になる傾向がある。すなわち最下位の女川層は層理が発達した硬質で均質な頁岩からなるが、天徳寺層のシルト岩を経て、最上位の笹岡層では主として砂岩から構成されている。このことは含油新第三系を堆積した海が時間とともに浅海化していったことの反映であると解釈されている。

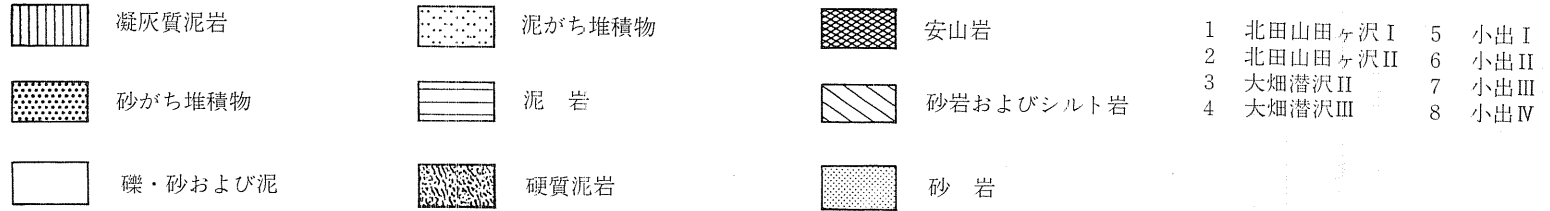
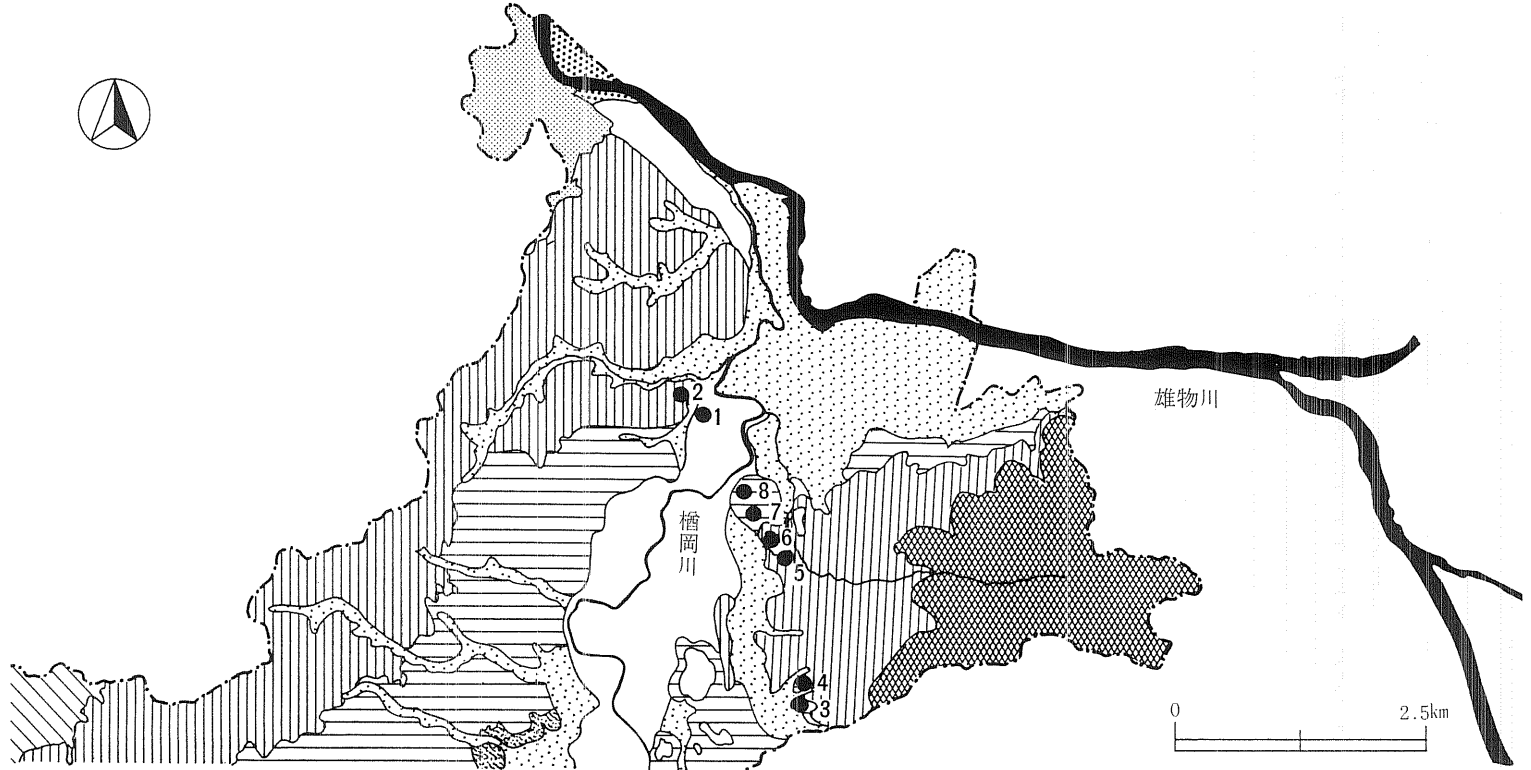
南外村を含む大曲市を中心とする地域には、下位から新第三紀中新世の横根峠層、畑村層、須郷田層、大森層、女川層および船川層、鮮新世の天徳寺層、第四紀洪積世の段丘堆積物、沖積世の沖積低地堆積物および現世の崖すいからなっている。

北田山田ヶ沢Ⅰ遺跡の立地する低位段丘面の基盤層は、礫・砂及び泥などの段丘堆積物である。北田山田ヶ沢Ⅱ遺跡の立地する丘陵は、標高100～200mの中位侵食面のうち南外村北部に広がる立倉丘陵地の一部で、この丘陵地の背面の標高は120m内外で稜線には礫層をのせ、山頂の定高性を持ち、模式的な出羽丘陵の典型地である。この地域の基盤層は、上部船川層で、黒色の凝灰質泥岩からなり、露頭表面に黄色粉末（Jarosite）が付着する特徴がある。拳～人頭大の石灰質団塊をよく含んでいて、下位の下部船川層とは漸移整合である。

大畑潜沢Ⅱ・大畑潜沢Ⅲ遺跡は最頂部387.6mの姫神山山地の西麓に立地している。姫神山山地は雄物川、橋岡川とその支流、小出川の谷によってとり囲まれ、直径約3kmの団塊状の独立した山地で主分水嶺線の方法はほぼ南北で、標高350m内外の定高性を示している。構成岩質は輝石安山岩で、水系は表層地質に強く制約され放射状パターンを呈し、大畑潜沢Ⅲ遺跡の北側を西流する大畑深山沢などの小水系は樹枝状パターンを呈する。両遺跡ともその基盤層は上部船川層で、表土は褐色森林土壌であるが、大畑潜沢Ⅲ遺跡をも含む標高100m前後の丘陵にはコナラなどの広葉樹もしくはスギ人工林とが生育し、大畑潜沢Ⅱ遺跡などの標高40mほどの緩斜面はスギの人工林や農耕地、宅地として利用されている。

### 参考文献

- 1 秋田県教育委員会『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅲ』秋田県文化財調査報告書第180集 1989（平成元年）
- 2 秋田県農政部農地整備課『土地分類基本調査 大曲』1978（昭和53年）



第 6 図 遺跡周辺の表層地質図

### 3 遺跡周辺の歴史的環境

今回調査された4遺跡の周辺には、旧石器時代から中世までの遺跡（第7図、第1表）があり、これらの遺跡は、村のほぼ中央を北流する檜岡川によって形成された河岸段丘上や、丘陵地などに立地している。以下には遺跡周辺の歴史的環境を概観する。

旧石器時代の遺跡としては、檜岡川右岸の河岸段丘上に立地する小出Ⅰ遺跡（F）・小出Ⅳ遺跡（C）の2遺跡がある。小出Ⅰ遺跡ではナイフ形石器、台形様石器、局部磨製石斧、尖頭器などの石器と剥片など数千点に及ぶ遺物が検出されている。小出Ⅳ遺跡では、ナイフ形石器、スクレイパーなどの石器が検出されている。両遺跡には時期差があり、小出Ⅰ遺跡の方が古い様である。この他、檜岡川下流の右岸の南外村で『再会の森』と呼んでいる場所でも、旧石器時代のエンドスクレイパーが表採されており、檜岡川兩岸の段丘上や出羽丘陵の山麓などには、まだ未発見の旧石器時代の遺跡が存在していると予想される。

縄文時代の遺跡は、早期～晩期の遺跡が存在しているが、その多くは中期や晩期に属する。中期の遺跡としては、中期前葉の小出Ⅳ遺跡、中期中葉（大木8a・8b式期）の山王台遺跡（1）、中期末葉（大木10式期）の小出Ⅰ遺跡・小出Ⅱ遺跡（E）などがある。大木土器様式の土器は、東北地方南部に分布しており、本地域もその文化の影響を受けていたことがうかがわれる。晩期の遺跡としては、大畑深山遺跡（2）、中野遺跡（9）、巢ノ沢遺跡（10）などがある。また、今回調査され狩猟場として利用されていたことが判明した、中期の大畑潜沢Ⅲ遺跡（G）から直線で南東方向へ約1kmには、時期は後期で異なるが同様の性格を持つ石神遺跡（Ⅰ-大曲市）がある。

弥生時代の遺跡としては、小出Ⅰ遺跡と小出Ⅳ遺跡の2遺跡があり、小出Ⅳ遺跡からは、竪穴住居跡が1軒検出されている。

古代の遺跡としては、土師器坏・甕や須恵器坏・壺の骨蔵器を埋納した墓が5基検出された小出Ⅰ遺跡と、同時代の竪穴住居跡が1軒検出された小出Ⅱ遺跡の2遺跡がある。両遺跡で検出された遺構の時期は、出土した土師器、須恵器などの遺物から、平安時代中期（10世紀初頭）頃に位置付けられるものとされており、小出Ⅰ遺跡で検出された墓を作ったのは、小出Ⅱ遺跡に住んだ人たちであった可能性がある。

中世の遺跡としては、窯跡と城館などの遺跡がある。窯跡には、大畑潜沢Ⅲ遺跡の西方に位置する大畑窯跡（12）がある。同窯跡は珠洲系陶器を生産した遺跡で、その操業年代は、出土遺物の珠洲系陶器から13世紀（鎌倉時代）頃とされている。この他、大畑窯跡出土の陶器と技法が類似する陶片が採集され、同じ珠洲系陶器を生産した窯跡とされる松山腰窯跡（13）と甕ノ沢窯跡（14）がある。また、珠洲系陶器が検出され、中世において利用されていた場所と思



われる遺跡として、小出Ⅰ遺跡・小出Ⅲ遺跡と今回調査された北田山田ケ沢Ⅰ遺跡（B）・北田山田ケ沢Ⅱ遺跡（A）等がある。城館遺跡には、北田山田ケ沢Ⅰ遺跡・北田山田ケ沢Ⅱ遺跡の北方に位置し、楯岡川左岸の丘陵に立地する楯岡城<sup>(1)</sup>（15）をはじめ、同流域には17箇所<sup>(1)</sup>にその跡（16～31）が見られる。楯岡城は、角館を本拠地とした戸沢氏と姻戚関係にあって、その重臣であった小笠原氏（楯岡氏）の居城であることが知られている。しかし、他の城館についての詳細は判然としない。が、楯岡氏の時世は戦乱の世であり、これらの館が楯岡氏の軍事上の面からの要請で築上されたものと推察すれば、その多くは楯岡城を本城とした支城あるいは砦であったと考えられる。

※（ ）内の番号は、第7図の表示番号に対応する。

#### 註

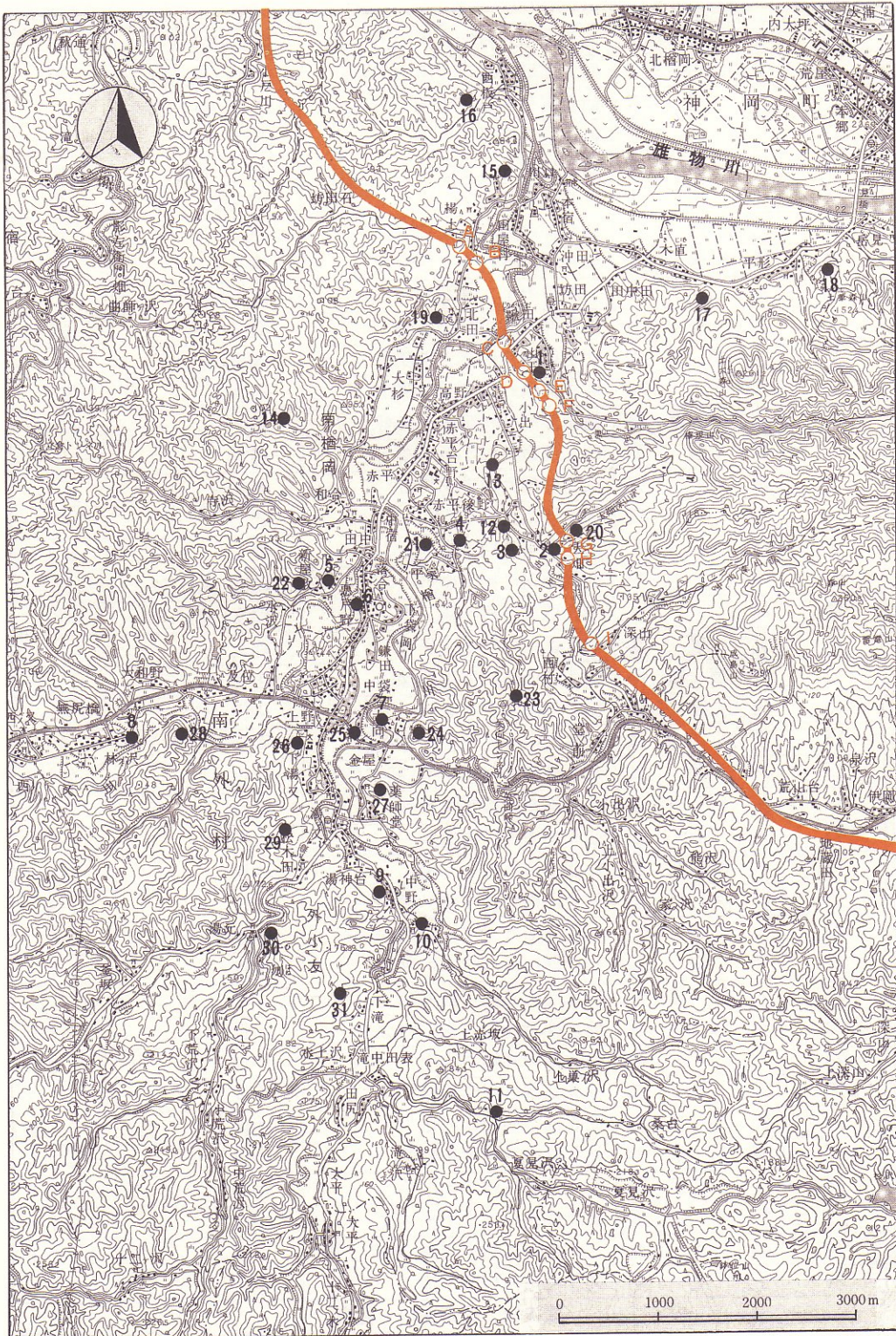
- 1 佐原太郎時連の城であったが、室町時代中頃の長禄2（1458）年に、平鹿郡増田城主の小笠原信濃次郎光冬（尾張守長景）がこれを滅ぼし、翌年移住し楯岡氏と称したことによる。

#### 参考文献

- 1 奈良修介・豊島 昂『秋田県の考古学』郷土考古学叢書 1967（昭和42年）
- 2 秋田県『秋田県史』考古編 1977（昭和52年）
- 3 秋田県教育委員会『秋田県の中世城館』秋田県文化財調査報告書第86集 1981（昭和56年）
- 4 南外村教育委員会『仙北郡南外村 大畑窯跡発掘調査報告書』1981（昭和56年）
- 5 南外村教育委員会『南外村誌』資料篇第六集 1982（昭和57年）
- 6 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第93集 1982（昭和57年）
- 7 秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図（県南版）』1987（昭和62年）
- 8 長山幹丸『南外村の城と館』南外村郷土史資料 1987（昭和62年）
- 9 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第179集 1989（平成元年）

※参考文献の番号は、第1表の文献番号に対応する。





第7図 周辺遺跡位置図



遺跡番号	遺 跡 名	所 在 地	時 代	文献番号
A	北田山田ヶ沢Ⅱ	仙北郡南外村字北田山田ヶ沢	縄文(後)・中世	9
B	北田山田ヶ沢Ⅰ	仙北郡南外村字北田山田ヶ沢	縄文(後・晩)	9
C	小 出 Ⅳ	仙北郡南外村字小出	旧石器・縄文・弥生	9
D	小 出 Ⅲ	仙北郡南外村字小出	縄文・中世	6
E	小 出 Ⅱ	仙北郡南外村字小出	縄文・平安	6
F	小 出 Ⅰ	仙北郡南外村字小出	旧石器～中世	6
G	大 畑 潜 沢 Ⅲ	仙北郡南外村字大畑潜沢	縄文(中)	6
H	大 畑 潜 沢 Ⅱ	仙北郡南外村字大畑潜沢	縄文	6
I	石 神	大曲市内小友字石神	縄文・中世	6
1	山 王 台	仙北郡南外村字山王台	縄文(中)	5・7
2	大 畑 深 山	仙北郡南外村字大畑深山	縄文(晩)	6
3	大 畑	仙北郡南外村字大畑深山	縄文	5・7
4	赤 平 後 野	仙北郡南外村字赤平後野	縄文	5・7
5	新 屋 布	仙北郡南外村字新屋布	縄文	7
6	悪 戸 野	仙北郡南外村字悪戸野	縄文	5・7
7	大 向	仙北郡南外村字大向	縄文	7
8	林 ノ 沢	仙北郡南外村字林ノ沢	縄文	5・7
9	中 野	仙北郡南外村字中野	縄文(晩)	7
10	巢 ノ 沢	仙北郡南外村字巢ノ沢	縄文(晩)	7
11	大 黒 森	仙北郡南外村字大黒森	縄文	7
12	大 畑 窯 跡	仙北郡南外村字大畑深山	中世	4・5・7
13	桧 山 腰 窯 跡	仙北郡南外村字大畑	中世	7
14	甕 コ 沢 窯 跡	仙北郡南外村字大杉赤平沢	中世	7
15	檜 岡 城	仙北郡南外村字古館・同字揚土	中世	3・5・7・8
16	猿 倉 沢 館	仙北郡南外村字猿倉沢	中世	7・8
17	平 形 館	仙北郡南外村字植沢	中世	7・8
18	木 直 沢 館	仙北郡南外村字下植	中世	7・8
19	壇 ノ 平 館	仙北郡南外村字壇ノ平山	中世	7・8
20	大 畑 館	仙北郡南外村字大畑潜沢	中世	7・8
21	平 家 館	仙北郡南外村字赤平平家	中世	3・5・7・8
22	太 郎 坊 館	仙北郡南外村字新屋布	中世	7
23	六 郎 沢 館	仙北郡南外村字赤平六郎沢	中世	3・5・7・8
24	大 向 館	仙北郡南外村字大向	中世	7・8
25	大 卷 館	仙北郡南外村字金屋	中世	3・5・7・8
26	天 神 森 館	仙北郡南外村字石仏	中世	3・5・7・8
27	薬 師 堂 館	仙北郡南外村字薬師堂	中世	3・5・7・8
28	大 小 手 館	仙北郡南外村字大小手	中世	3・5・7・8
29	松 木 田 館	仙北郡南外村字下湯ノ又	中世	3・5・7・8
30	湯 元 館	仙北郡南外村字岩倉・同字卜別	中世	3・5・7・8
31	下 滝 館	仙北郡南外村字下滝	中世	7・8

第1表 周辺遺跡一覧表

※ 本表は第7図の表示番号に対応する

# 北田山田ヶ沢 I 遺跡

# 第1章 遺跡の概要

## 第1節 遺跡の立地

北田山田ケ沢Ⅰ遺跡は、櫛岡川左岸に形成された河岸段丘上に存在する。この河岸段丘は、西方の出羽丘陵から流れ出る沢水などによって侵食されて、ほぼ北東へ張り出す舌状地形を呈しており、遺跡は標高24 mの段丘先端部に立地している（第1図）。

遺跡の現況は休耕地である。その北側は、下方の農道に向かって急斜面となっており、北西側は揚土部落の児童館跡地で、南西側は水田、南東側は一段低い水田（一部減反のため畑地）となっている。

なお、本遺跡から北へ約500 mの出羽丘陵の末端部の標高30～35 mの斜面には、北田山田ケ沢Ⅱ遺跡が所在する。

## 第2節 調査の方法と経過

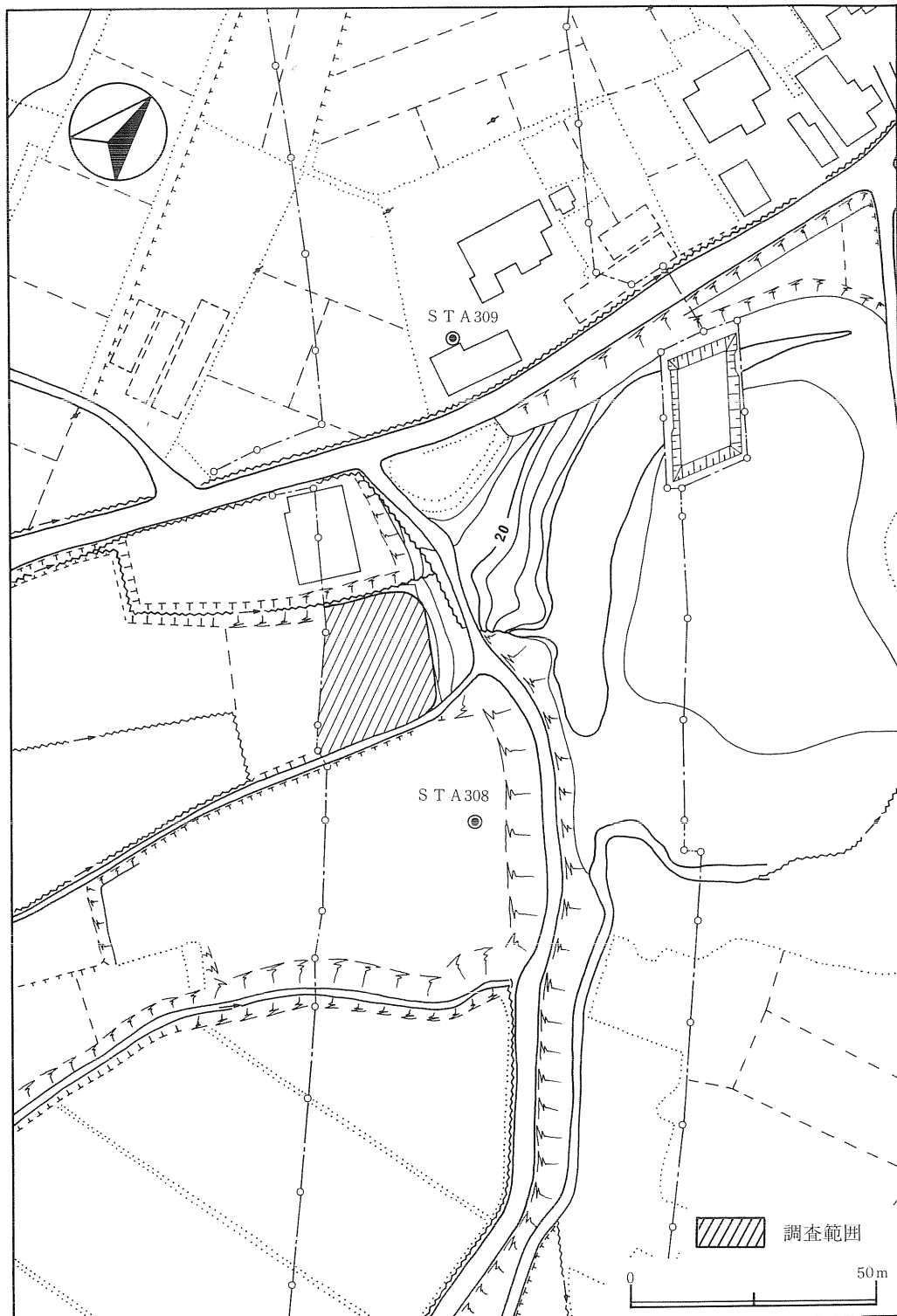
### 1 調査の方法

発掘調査はグリッド方式で行った。調査区中央部に任意のグリッド原点MA50を設定して、これから磁北に合わせた南北基線とこれに直交する東西基線を設け、4 m×4 mのグリッドを設定した。また、南北基線には2桁の算用数字、東西基線にはアルファベット2文字の組み合わせを付し、各グリッドの名称は南東隅の交点の算用数字とアルファベットを組み合わせで呼称した。

遺構等の実測は、各グリッド杭を利用して遣り方測量で行い、原則として縮尺は20分の1とした。また、調査区地形図は平板測量で行い、縮尺は250分の1とした。なお、20分の1の遺構平面図と250分の1の調査区地形図から、200分の1の遺構配置図など必要な図面を作成した。

### 2 調査の経過

10月3日、調査に先立って、発掘調査説明会、発掘機材の搬入、テントの設営、プレハブ設置場所の整地作業を行う。この後、調査区北側から粗掘りと遺構確認精査を開始する。また、範囲確認時に入れたトレンチ内の埋土除去を行い、土坑2基（SK01・02）を検出する。4日、グリッド杭打設と調査区西端に沿って土層観察の為にトレンチを入れる。この結果、遺構確認面である第Ⅱ層上面まで攪乱が及んでいることが判明する。この日、土坑2基（SK03・04）



第 1 図 調査範囲図

を検出する。翌5日には、土坑5基（SK05～09）を検出する。7日、土坑1基（SK10）を検出する。8日、範囲確認時に入れたトレンチ内の埋土除去を終了する。11日、検出した遺構の調査を始める。また、土坑1基（SK11）を検出する。本日まで、遺構は土坑11基を検出してきたが、遺物の出土量は、縄文土器片や石器などが数十点と少ない。20日、土坑1基（SK12）を検出する。22日、第Ⅱ層上面までの掘り下げを終了する。24日、第Ⅱ層上面の遺構確認精査と各遺構の調査を終える。このうちSK12は堆肥溜に掘られた現代のものと判明、欠番とした。翌25日、遺跡基本土層図作成、遺跡遠景と近景等の撮影準備及び撮影を行う。26日、調査区地形の平板測量を行い、全ての実測作業を完了する。翌27日から撤収作業と機材の整理をし、31日、発掘機材等を搬出して、北田山田ヶ沢Ⅰ遺跡の発掘調査を終了する。

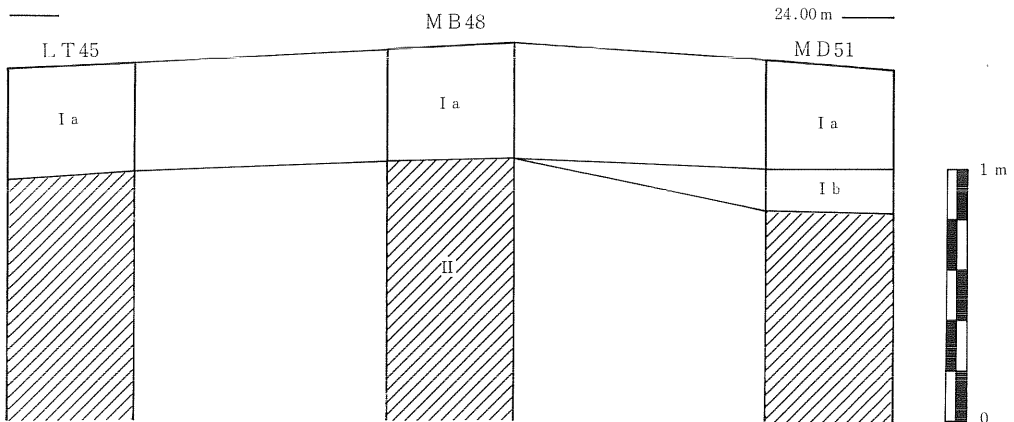
### 第3節 遺跡の層序

調査区全域は、畑地や水田の造成工事で、遺構確認面である第Ⅱ層（地山）まで削平が及んでいた。このため第Ⅱ層までは、整地後の盛土と耕作土の単純層であった。遺跡の層序は、調査区南端に沿って入れた東西トレンチの北壁の土層から、以下の通り観察できた（第2図）。

第Ⅰ-a層 黒褐色土（10YR2/3）：層厚26～46cmの耕作土および盛土である。縄文土器片や石器を少量含んでいる。

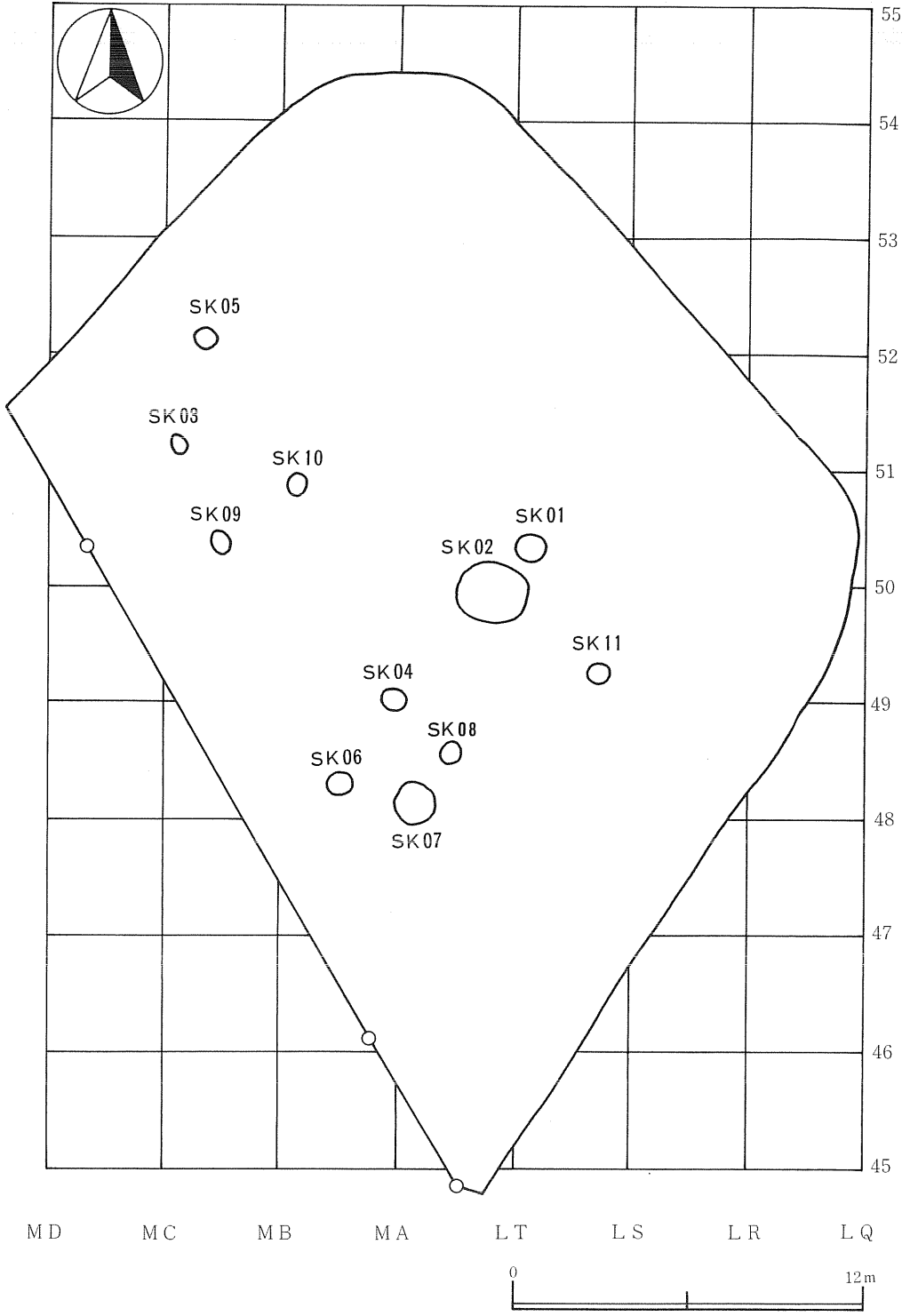
第Ⅰ-b層 黒色土（7.5YR2/1）：層厚6～55cmの盛土である。調査区西側のみで認められた層である。

第Ⅱ層 にぶい黄褐色土（10YR5/4）：よくしまった粘質土の地山で、遺構確認面である。



第2図 土層柱状図





第3図 遺構配置図

## 第2章 検出遺構と遺物

### 第1節 遺構と出土遺物

#### 1 土坑

##### SK01 (第3・4・6図、図版4)

L S 50グリッドで検出した。平面形は長軸(東西)110cm×短軸(南北)100cmのほぼ円形を呈し、確認面からの深さ22cmである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は炭化物とにぶい黄褐色土粒子を少量含み、しまりのある単一層である。人為的な埋土と考えられる。

遺物は縄文土器片4点が出土した。第6図1は鉢形土器の口縁部の破片である。2・3は同一個体である。鉢形土器の体部の破片で、LR単節の斜縄文が施されている。4は僅かに内湾する鉢形土器の口縁部の破片で、口縁に平行に数条の沈線が施されている。

##### SK02 (第3・4・6図、図版4)

L S 49・50、L T 49・50グリッドにかけて検出した。平面形は長軸(北東-南西)250cm×短軸(北西-南東)225cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは66cmである。底面は平坦で、その中央部には径21cm、深さ24cmのピットがある。壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は4層に分けられた。2層は酸化鉄粒子を少量含み、部分的に赤みを帯びている。3層は炭化物を少量含み、4層は多量の炭化物と礫を若干含んでいる。また、4層は堅くしまっており、1～3層は4層よりしまりが弱い。これらの土層は、壁際からほぼ中央部に向かって緩やかな傾斜をなして堆積していることから、本土坑が廃棄された後に、自然流入した堆積土と考えられる。

遺物は縄文土器片8点と剝片15点が出土した。第6図5・6は同一個体である。波状口縁を成す深鉢形土器の口縁部の破片で、口縁部は無文である。7・8は鉢形土器の体部の破片で、いずれもLR単節の斜縄文が施されている。このうち5・6は縄文時代後期中葉に属するものと思われる。

##### SK03 (第3・4図、図版4)

MB51グリッドで検出した。平面形は長軸(北東-南西)70cm×短軸(北西-南東)67cmのほぼ円形を呈し、確認面からの深さ10cmである。底面は平坦で、壁は急傾斜で立ち上がっている。覆土は炭化物とにぶい黄褐色土粒子を少量含み、しまりの弱い単一層である。人為的な埋土と考えられる。遺物は縄文土器片1点と剝片2点が出土した。

##### SK04 (第3・4・6図、図版5)

L T 48・49、MA 48・49グリッドにかけて検出した。平面形は長軸(北西-南東)97cm×短

軸（北東－南西）85cmのほぼ円形を呈し、確認面からの深さ9cmである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は炭化物とにぶい黄褐色土粒子を少量含み、しまりのある単一層である。人為的な埋土と考えられる。

遺物は縄文土器片1点が出土した。第6図9は浅鉢形土器の口縁部の破片で、羊歯状文が施されている。また、図の右側下に補修孔が認められる。縄文時代晩期中葉に属するものと思われる。

**SK05**（第3・4・6図、図版5）

MB52グリッドで検出した。平面形は長軸（北東－南西）82cm×短軸（北西－南東）78cmのほぼ円形を呈し、確認面からの深さ27cmである。底面は平坦で、壁は急傾斜で立ち上がっている。覆土は2層に分けられた。1層は炭化物を少量含み、2層は炭化物を若干とにぶい黄褐色土粒子を少量含んでおり、いずれもしまりのある層である。人為的な埋土と考えられる。遺物は縄文土器片6点、石器2点、剥片6点が出土した。第6図10は深鉢形土器の口縁部～体部の破片である。口唇はやや丸みを帯び、屈曲して外反する口頸部は無文で、体部にはLR単節の斜縄文が施されている。11・12は同一個体である。鉢形土器の体部の破片で、LR単節（横と縦に回転）の斜縄文が施されている。S1はスクレイパーである。左図の側縁と打点と反対の側縁に細かい剥離を施し、刃部を作出している。S2は凹石である。棒状の礫の4面に凹が作出されている。これらの石器の石質は、S1が珪質頁岩、S2が凝灰岩である。

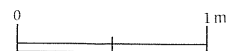
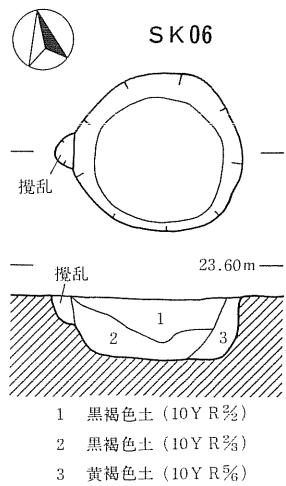
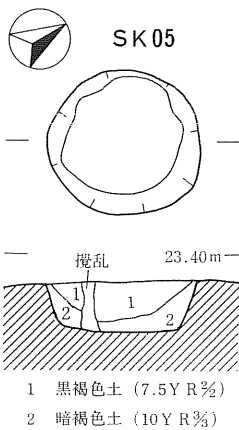
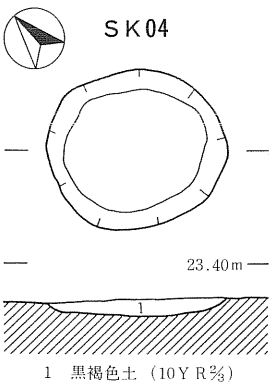
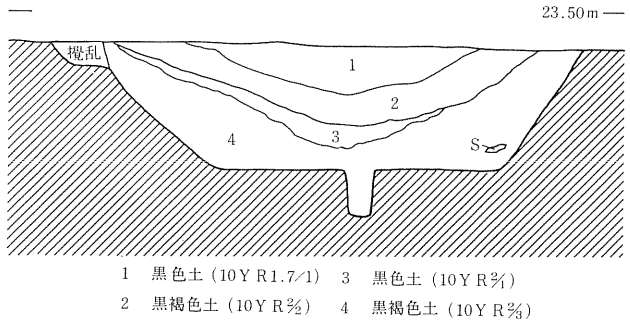
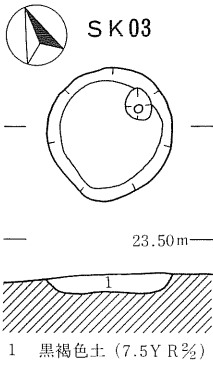
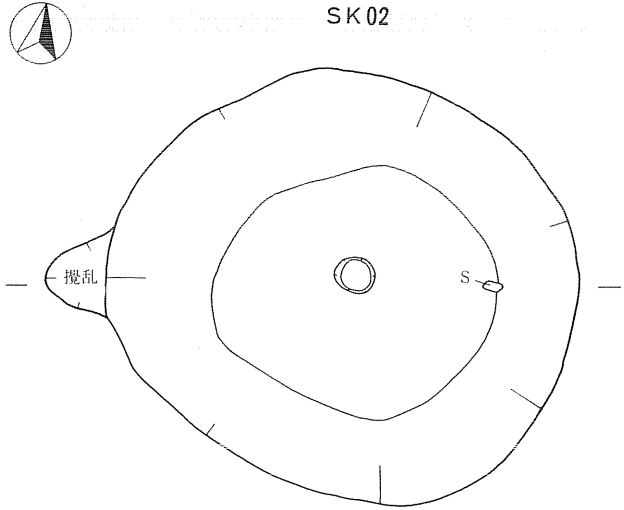
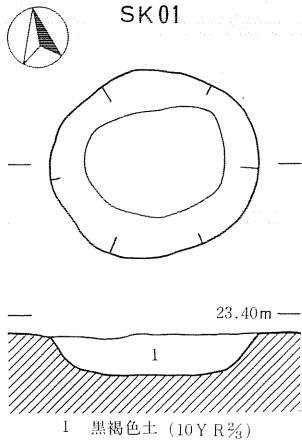
**SK06**（第3・4・7図、図版6）

MA48グリッドで検出した。平面形は長軸（北西－南東）89cm×短軸（北東－南西）84cmのほぼ円形を呈し、確認面からの深さ32cmである。底面は平坦で、壁は急傾斜で立ち上がっている。覆土は3層に分けられた。1層は炭化物を少量含み、2層はにぶい黄褐色土ブロックを少量含んでおり、3層は黒褐色土粒子を多量に含んでいる。全層とも堅くしまっている。人為的な埋土と考えられる。遺物は縄文土器片1点が出土した。第7図13は深鉢形土器の体部の破片で、原体は判然としないが、斜縄文が施されている。

**SK07**（第3・5・7図、図版6）

LT47・48、MA48グリッドにかけて検出した。平面形は長軸（北西－南東）152cm×短軸（北東－南西）142cmのほぼ円形を呈し、確認面からの深さ44cmである。底面は平坦で、壁は急傾斜で立ち上がっている。覆土は2層に分けられた。1層は炭化物を少量含み、2層は炭化物を若干とにぶい黄褐色土粒子を少量含んでいる。いずれも堅くしまっている層である。人為的な埋土と考えられる。

遺物は縄文土器片11点と剥片6点が出土した。第7図14は浅鉢形土器の口縁部～体部の破片である。口唇にはB突起が付されており、口縁部には2条の沈線、その内面には刻目のある隆



第4図 土坑SK01~SK06

帯が1条、それぞれ口縁に平行に施されている。体部にはLR単節の斜縄文が施された雲形文が施されている。15は器形は不明であるが、肉彫的な手法による文様が施されている土器片である。16は壺形土器の口縁部の破片である。口唇には1条の沈線、口縁には瘤状の突起が付された隆帯が施されている。口縁部は無文である。17は台付土器の台部の破片である。底縁に平行する沈線と弧状を成す沈線や孔が施されている。また、赤色漆が塗られたものと思われ、赤みを帯びている。18は鉢形土器の口縁部～体部の破片である。口縁部には口縁に平行する沈線が、体部にはLR単節の斜縄文が施されている。19～22は鉢形土器の体部の破片で、20～22は同一個体である。19はRL単節の縦走縄文が施され、20～22はRL（上帯）、LR（下帯）単節の非結束羽状縄文が横位に施されている。また、内面には煤状炭化物が付着している。これらの土器は縄文時代晩期前半に属するものと思われる。

**SK08**（第3・5・7図、図版7）

LT48グリッドで検出した。平面形は長軸（北東－南西）87cm×短軸（北西－南東）84cmのほぼ円形を呈し、確認面からの深さ27cmである。底面は平坦で、壁は急傾斜で立ち上がっている。覆土は2層に分けられた。1層は炭化物を若干とにぶい黄褐色土粒子を少量含み、2層はにぶい黄褐色土粒子を多量に含んでいる。いずれも堅くしまっている層である。人為的な埋土と考えられる。遺物は縄文土器片1点が出土した。第7図23は器形は不明であるが、肉彫的な手法による文様が施されている。縄文時代晩期前葉に属するものと思われる。

**SK09**（第3・5・7図、図版7）

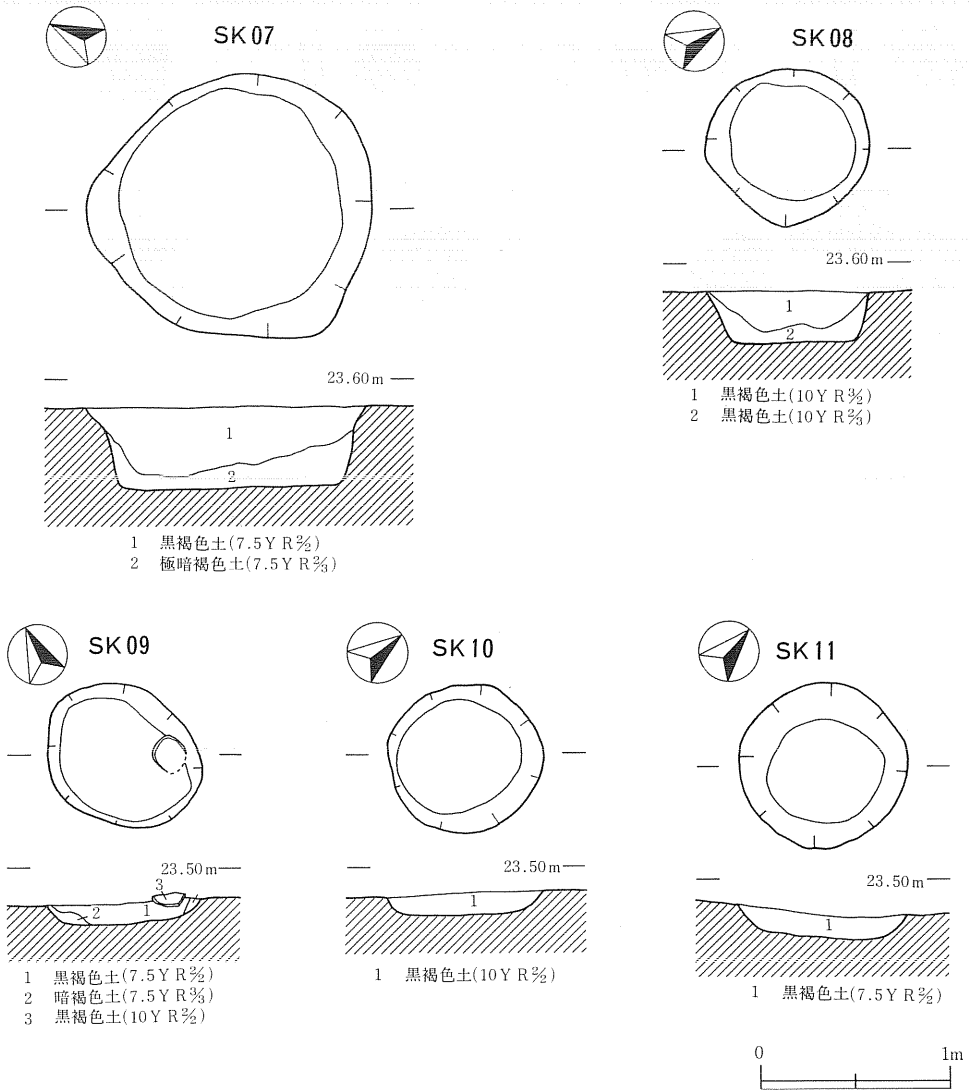
MB50グリッドで検出した。平面形は長軸（北西－南東）87cm×短軸（北東－南西）73cmの楕円形を呈し、確認面からの深さ11cmである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は3層に分けられた。1層は炭化物と暗褐色土粒子を少量含んでおり、2層はにぶい黄褐色土粒子を少量含んでいる。3層は炭化物とにぶい黄褐色土粒子を若干含んでいる。全層とも堅くしまっている。人為的な埋土と考えられる。

遺物は土坑北東隅から縄文土器が出土した。第7図24は深鉢形土器の底部～体部の破片である。文様は磨滅しており不明であるが、残存する部位の底径は95mmで、器高は68mmである。

**SK10**（第3・5・7図、図版8）

MA50グリッドで検出した。平面形は長軸（北東－南西）82cm×短軸（北西－南東）79cmのほぼ円形を呈し、確認面からの深さ12cmである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は炭化物若干とにぶい黄褐色土粒子を多量に含み、堅くしまっている単一層である。人為的な埋土と考えられる。

遺物は縄文土器片3点が出土した。第7図25は深鉢形土器の体部の破片で、LR単節の斜縄文が施されている。

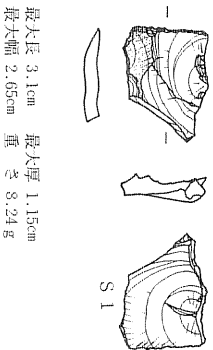
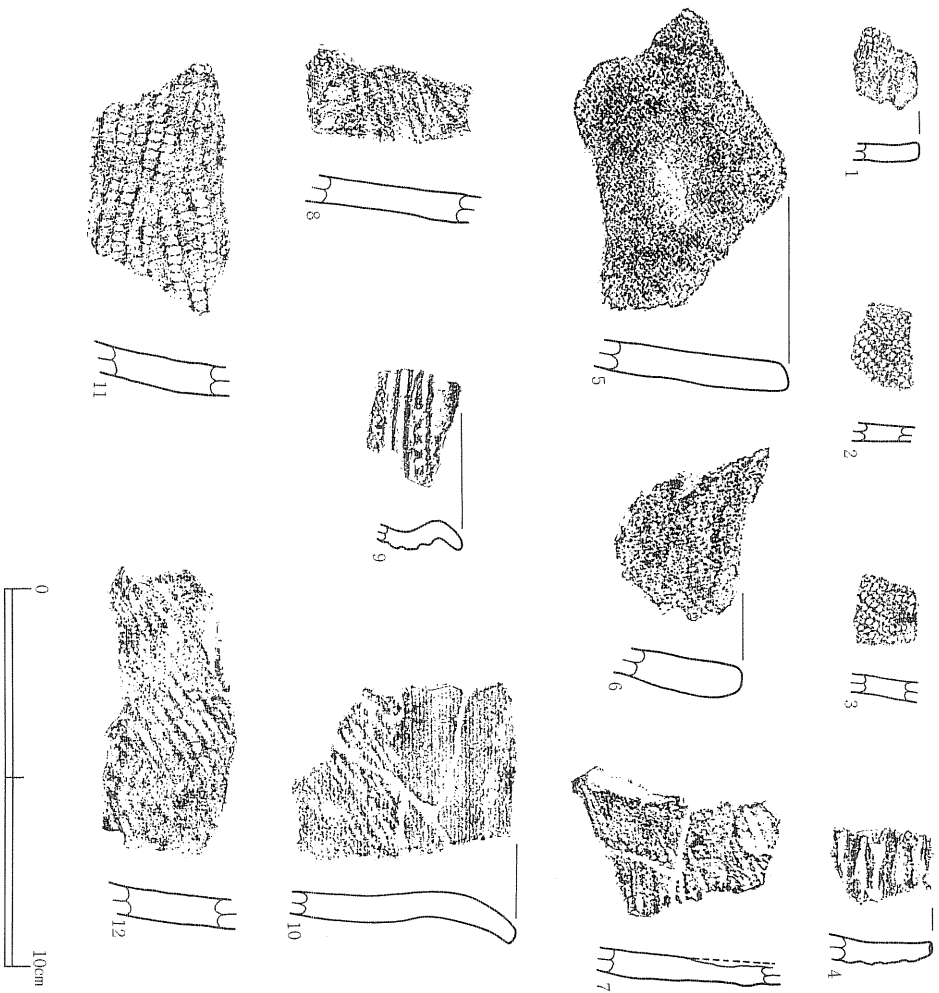


第5図 土坑SK07～SK11

SK11 (第3・5・7図、図版8)

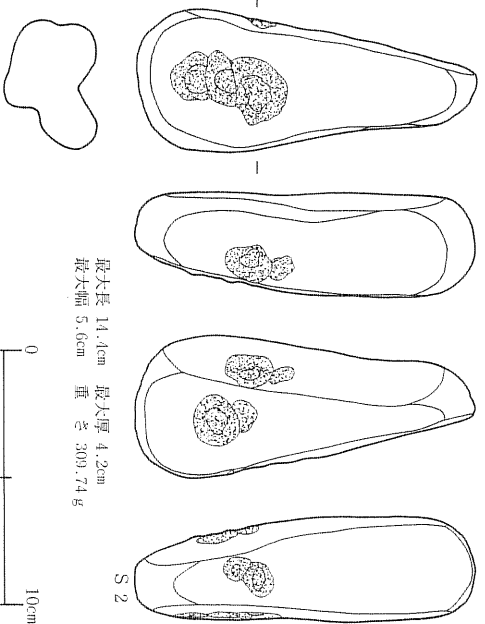
LS49グリッドで検出した。平面形は長軸(北東-南西)90cm×短軸(北西-南東)87cmのほぼ円形を呈し、確認面からの深さ12cmである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は炭化物を若干とにぶい黄褐色土ブロックとにぶい黄橙色土ブロックを少量含み、堅くしまっている単一層である。人為的な埋土と考えられる。

遺物は縄文土器片4点が出土した。第7図26・27は深鉢形土器の体部の破片である。26は原体が判然としないが、斜縄文が施されており、27は細目のLR単節の横走縄文と斜縄文(図左下)が施されている。



最大長 3.1cm 最大厚 1.15cm  
最大幅 2.65cm 重 さ 8.24g

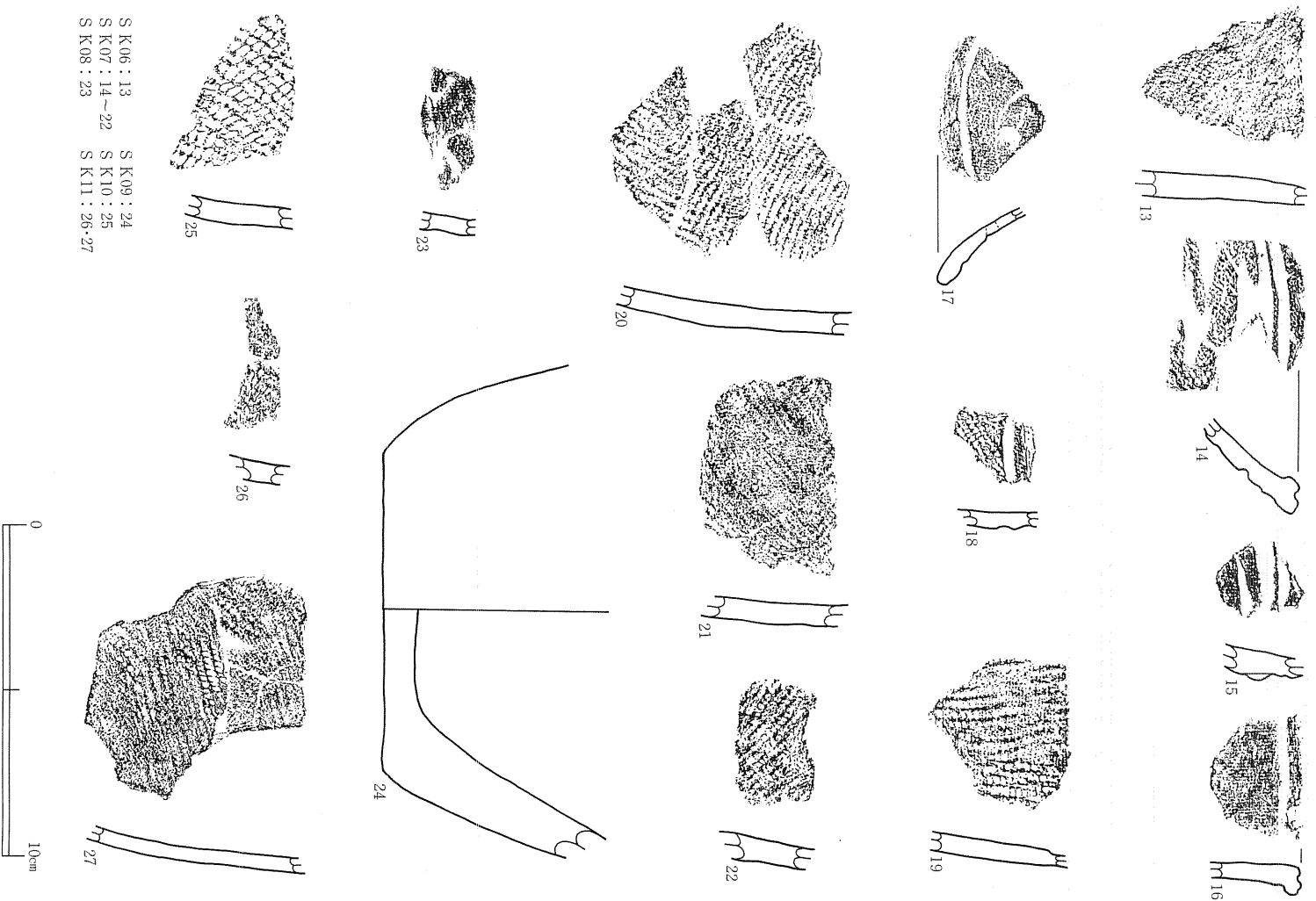
S K01: 1~4  
S K02: 5~8  
S K04: 9  
S K05: 10~12, S 1・2



最大長 14.4cm 最大厚 4.2cm  
最大幅 5.6cm 重 さ 309.74g

第6図 遺構内出土遺物(土器・石器)





S K 06 : 13  
S K 07 : 14~22  
S K 08 : 23

S K 09 : 24  
S K 10 : 25  
S K 11 : 26~27

第7図 遺構内出土遺物(土器)

## 第2節 遺構外出土遺物

### 1 縄文土器

7点出土したが、細片で脆い上に磨滅して文様が不鮮明で、図示できなかった。

### 2 石器 (第8図S3~5、図版10)

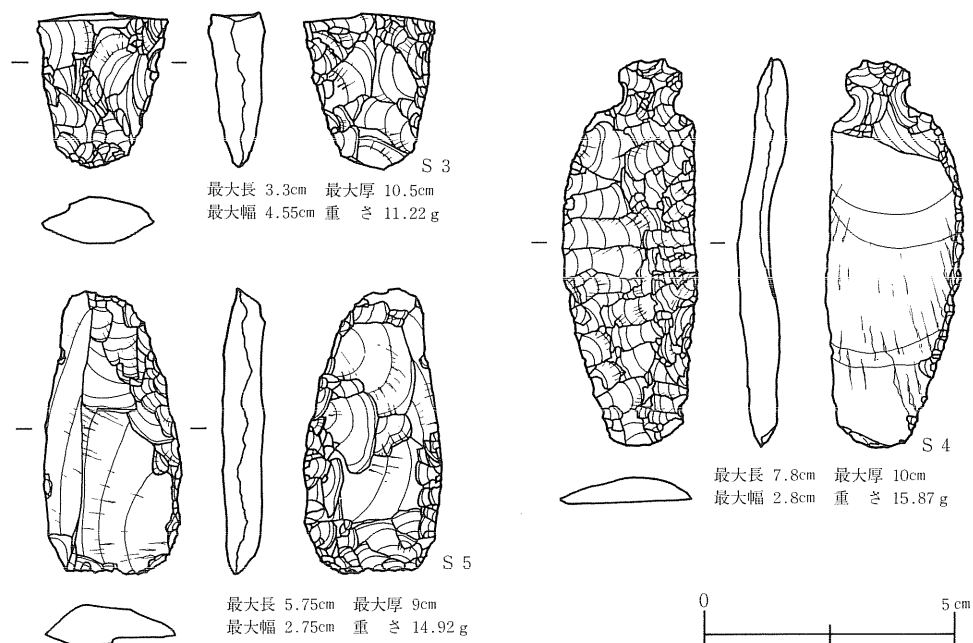
3点出土した。S3は石槍の基部である。両面の全面は二次加工しており、その断面形は菱形様を呈し、基端は弧状を成している。S4は縦型の石匙である。背面全面と主要剥離面のつまみ部と片側縁を二次加工し、つまみ部は打点側に作出している。S5は石筥である。主要剥離面の全面を二次加工し、背面には素材の剥離面を残している。石質は全て、珪質頁岩である。

### 3 中世陶器 (第9図29・30、図版10)

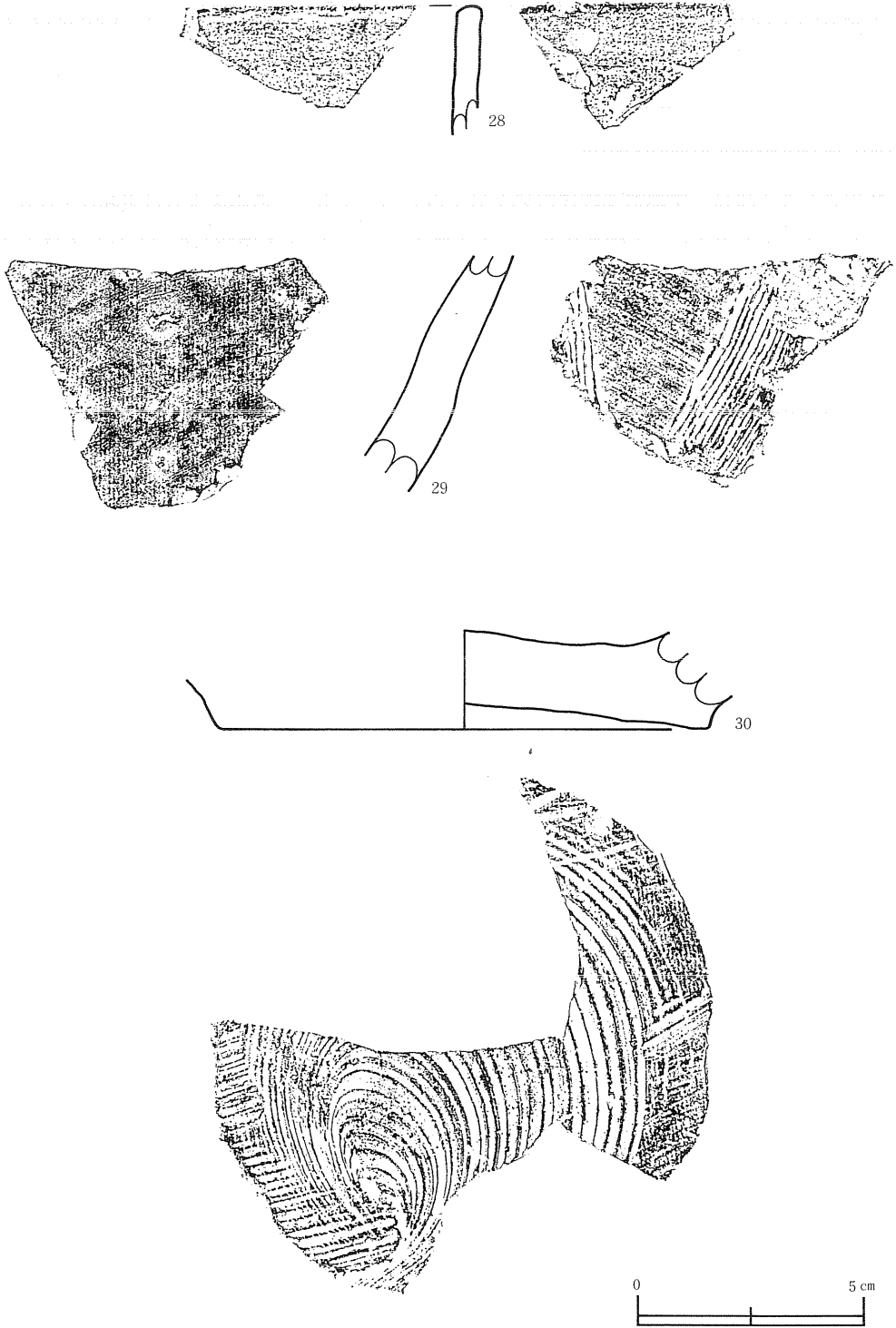
2点出土した。29は播鉢の体部破片で、内面には底面中心部から口縁に向けて、ほぼ直線に御目が施されている。御目は14本の条線によって構成されており、その巾は19mmほどである。30は甕と思われる底部の破片で、ロクロからの切り離しの際の右回転糸切り痕が認められる。胎土は緻密で硬質、色調は内外面とも灰色である。図上復原による底径は108mmである。

### 4 その他の遺物 (第9図28、図版10)

1点出土した。内外面とも浅黄橙色を呈する陶器片である。器形は判然としないが、口縁部の破片と思われる。内面には細い布痕が認められる。中世以降のものと思われる。



第8図 遺構外出土遺物 (石器)



第9図 遺構外出土遺物（土器）

### 第3章 まとめ

調査の結果、300㎡の調査範囲から縄文時代の土坑が11基検出され、縄文時代の土器と石器、中世の珠洲系陶器などが出土した。

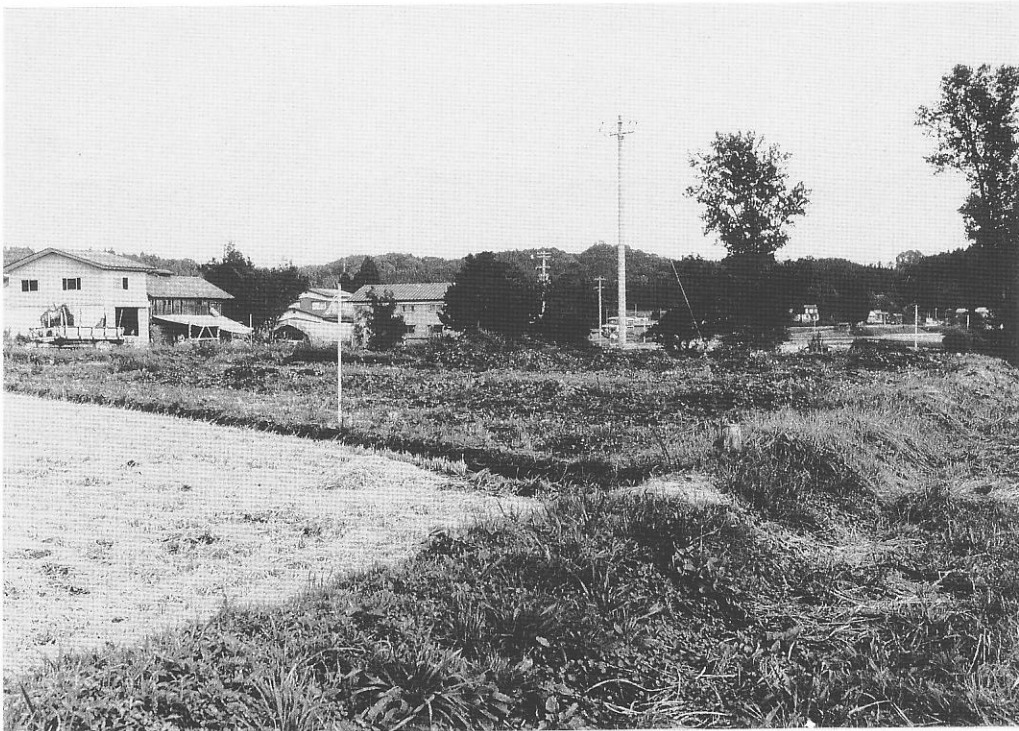
検出された土坑は、平面形がほぼ円形を呈するものが大半で、その大きさは長軸が100cm以内におさまるものが多い。土坑の時期は、その覆土中より出土した遺物から、およそ縄文時代後期～晩期の範疇にはいるものと考えられる。しかし、これらの土坑の用途については、それを把握できる資料が乏しく明確にできなかったが、SK02は、長軸2.5mある大型の土坑であり、底面中央部に柱穴をもつことから、貯蔵穴としての機能が推定され、SK01・03～11は、覆土の堆積状態が、人為的に一気に埋め戻されたものと考えられることから、墓壙としての機能が推定される。

出土遺物は、遺構内外合わせてコンテナ（54cm×33.5cm×9.5cm）で1箱ほどであり、その主なものは縄文時代晩期の土器破片で、同後期の土器破片、中世の珠洲系陶器などは数点と僅少であった。また、縄文時代の石器も遺構内外合わせて5点と僅かであった。

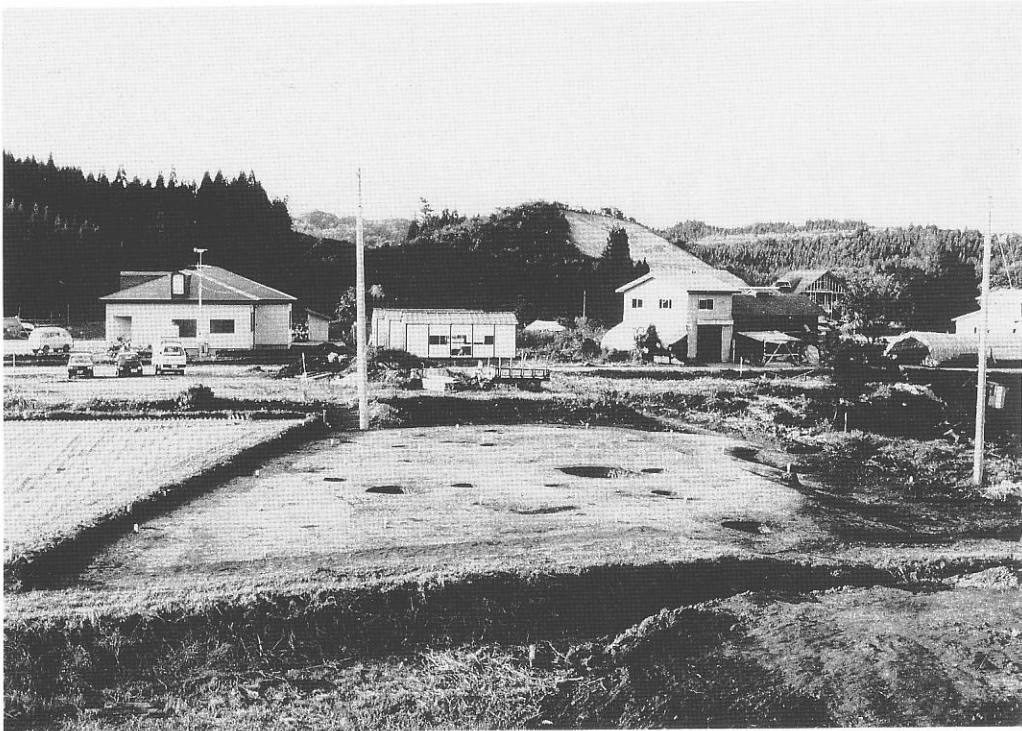
なお、遺跡の範囲は、検出遺構と出土遺物の分布状況や遺跡の地形から、本調査区外の南西側の水田方面へ広がっているものと考えられ、本調査区で検出された土坑を構築した人々の住居跡などの遺構の存在が予想される。



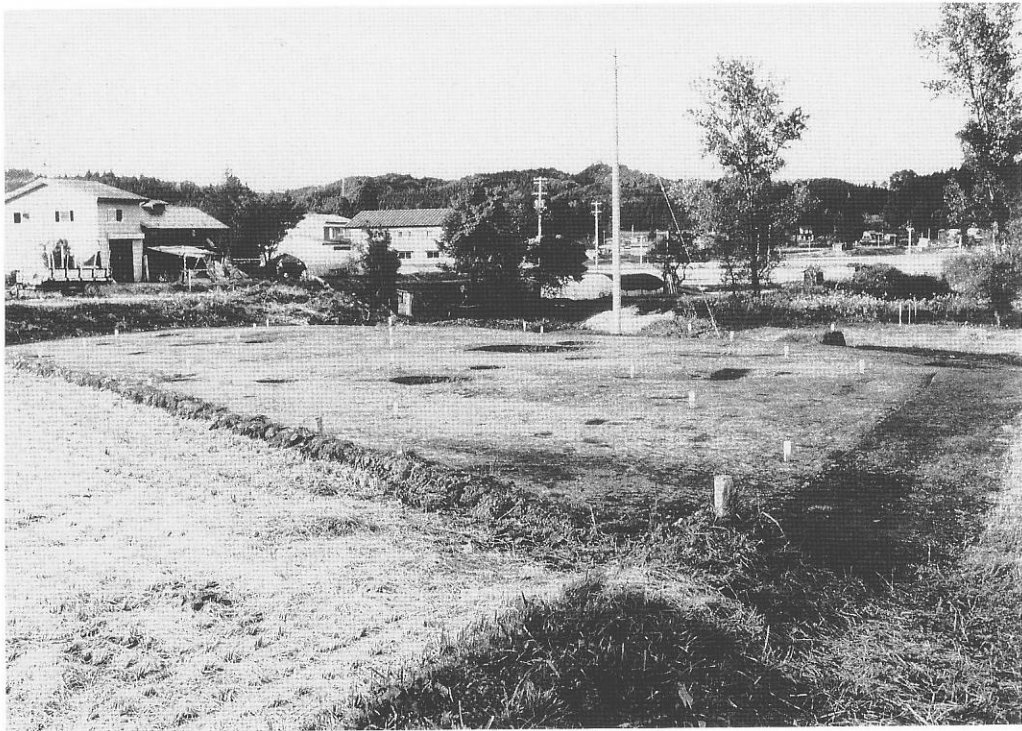
1 調査前全景 (南東▷北西)



2 調査前全景 (南西▷北東)



1 調査後全景（南東▷北西）

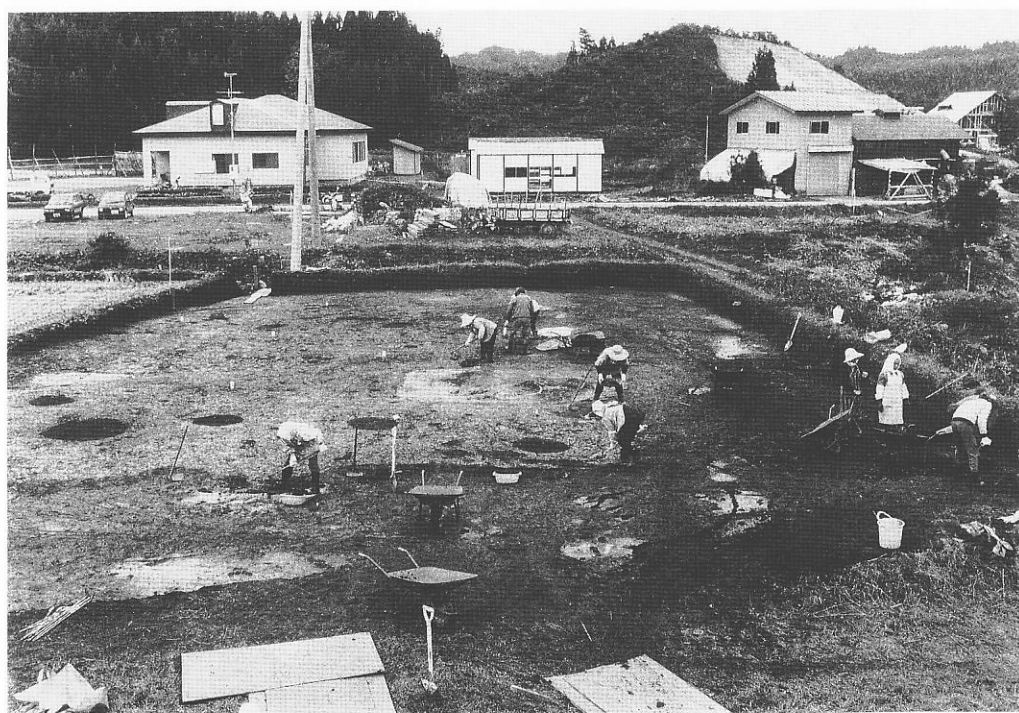


2 調査後全景（南西▷北東）

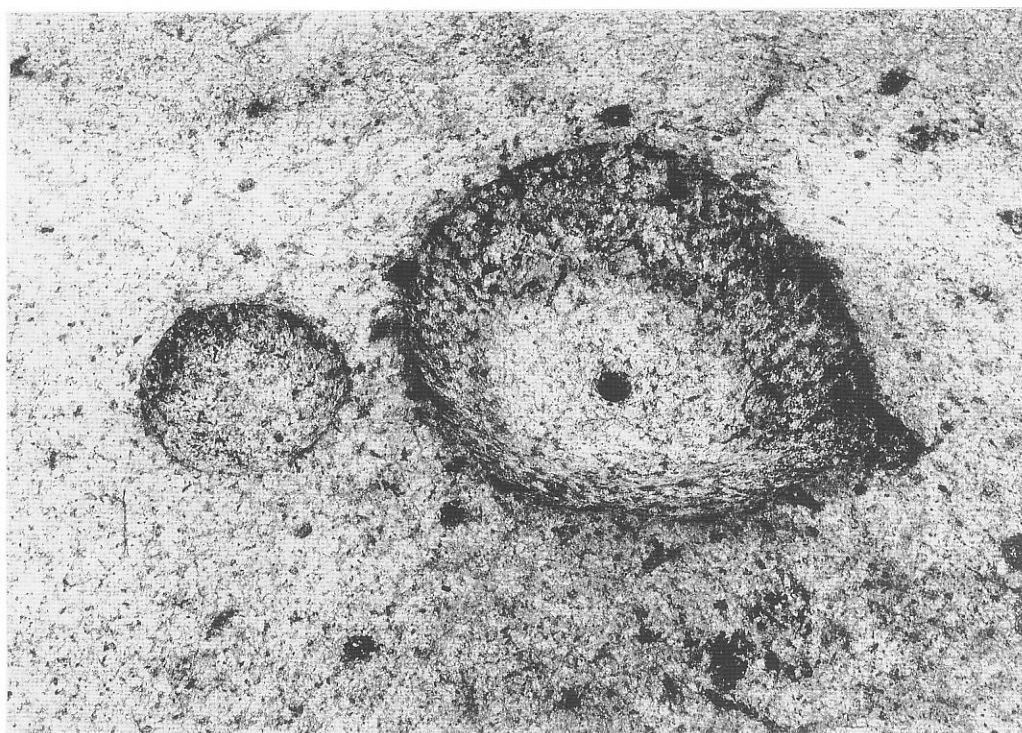




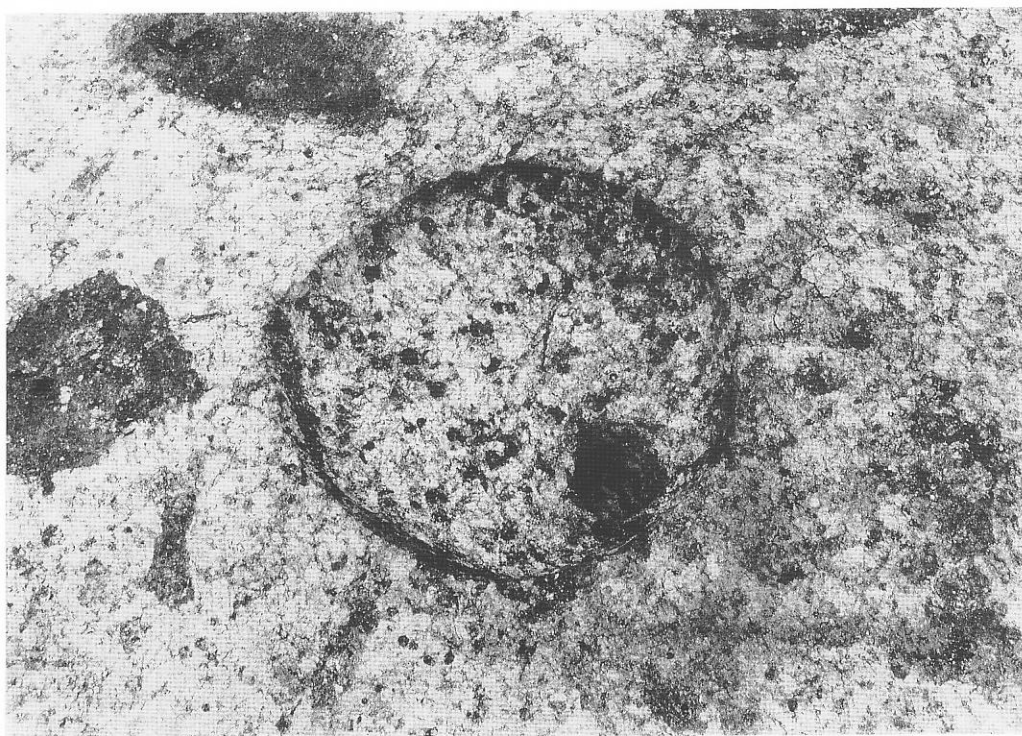
1 調査風景 (南▷北)



2 調査風景 (南東▷北西)

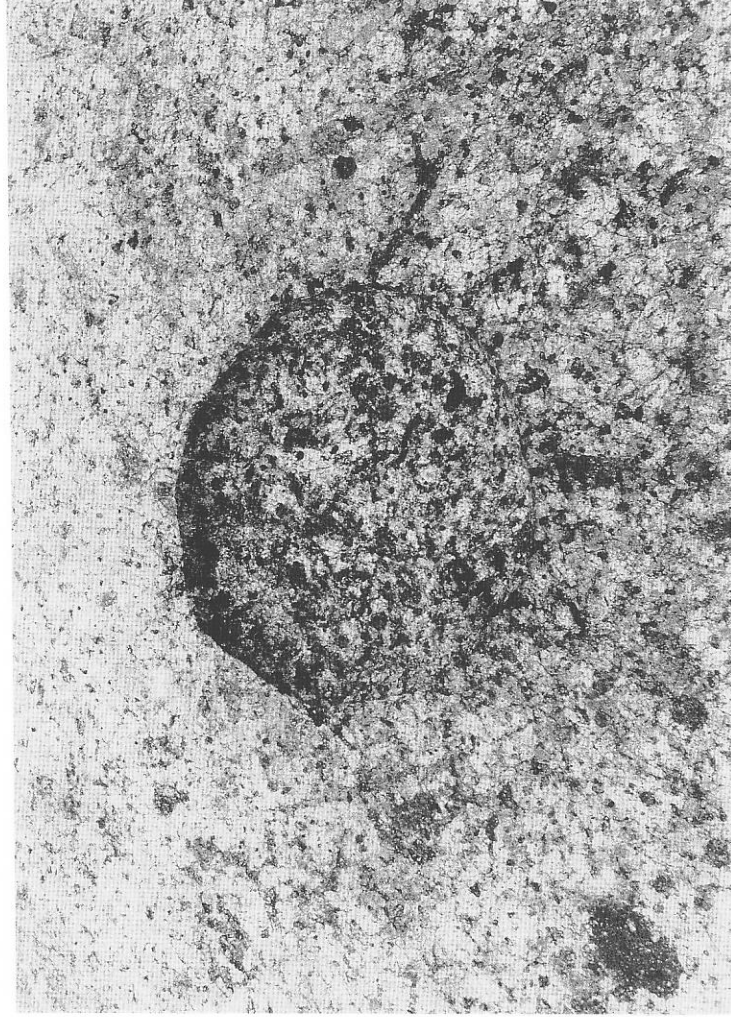


1 SK01・SK02 (北西▷南東)

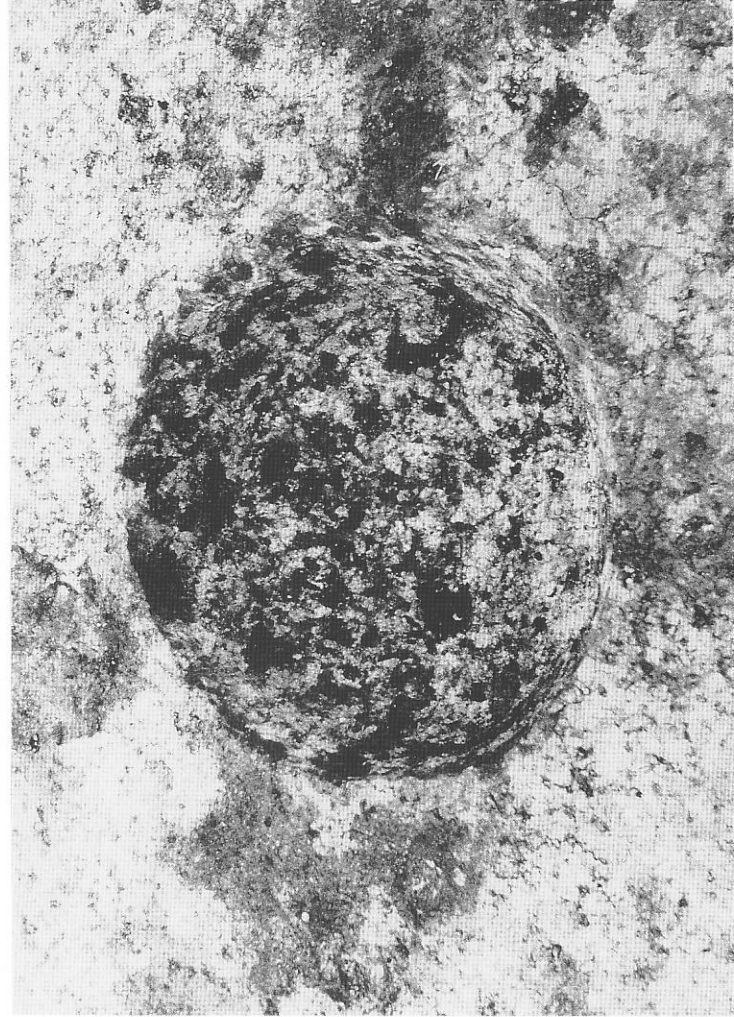


2 SK03 (北西▷南東)

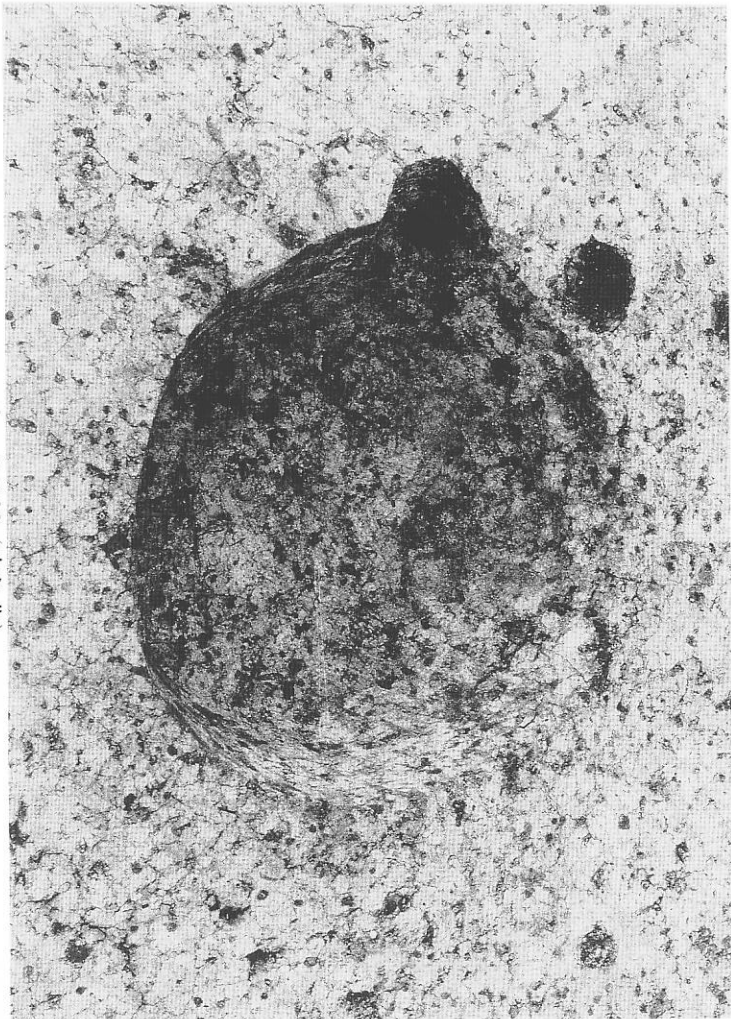




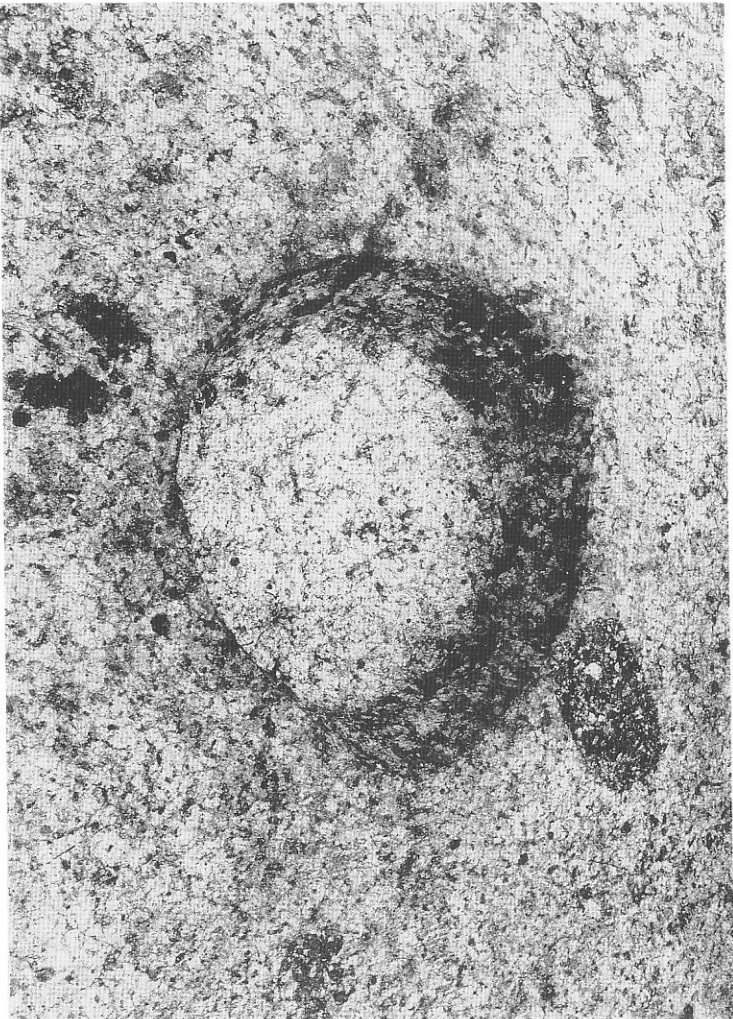
1 SK04 (北△南)



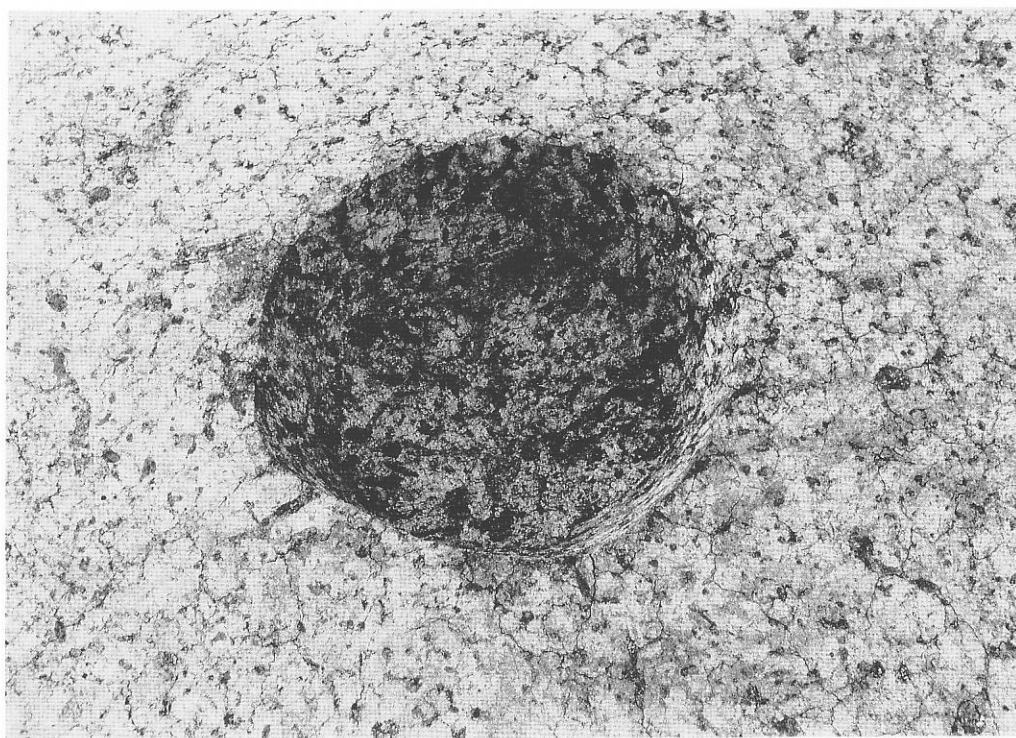
2 SK05 (南東△北西)



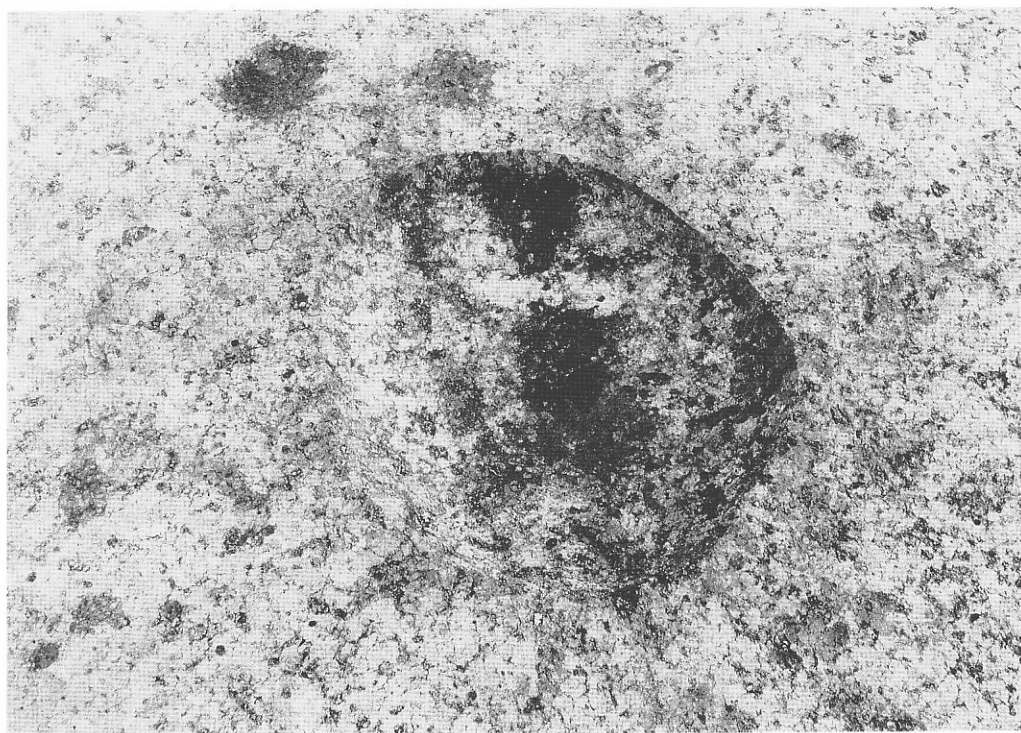
1 S K 06 (南▷北)



2 S K 07 (北東▷南西)

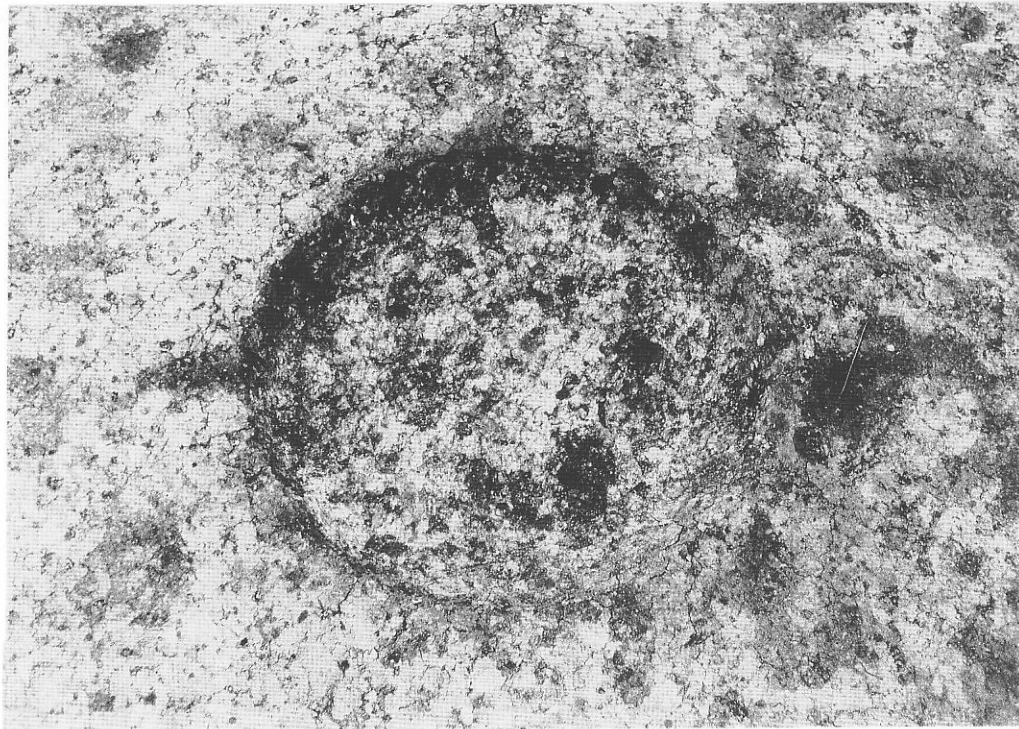


1 SK08 (南東▷北西)

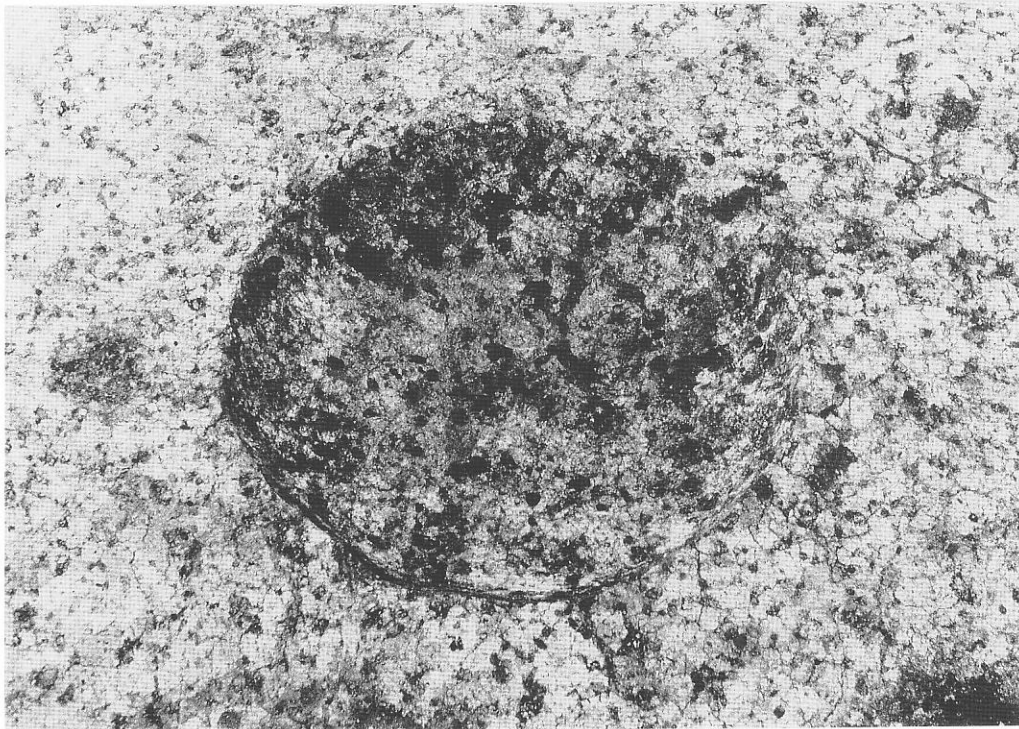


2 SK09 (北▷南)

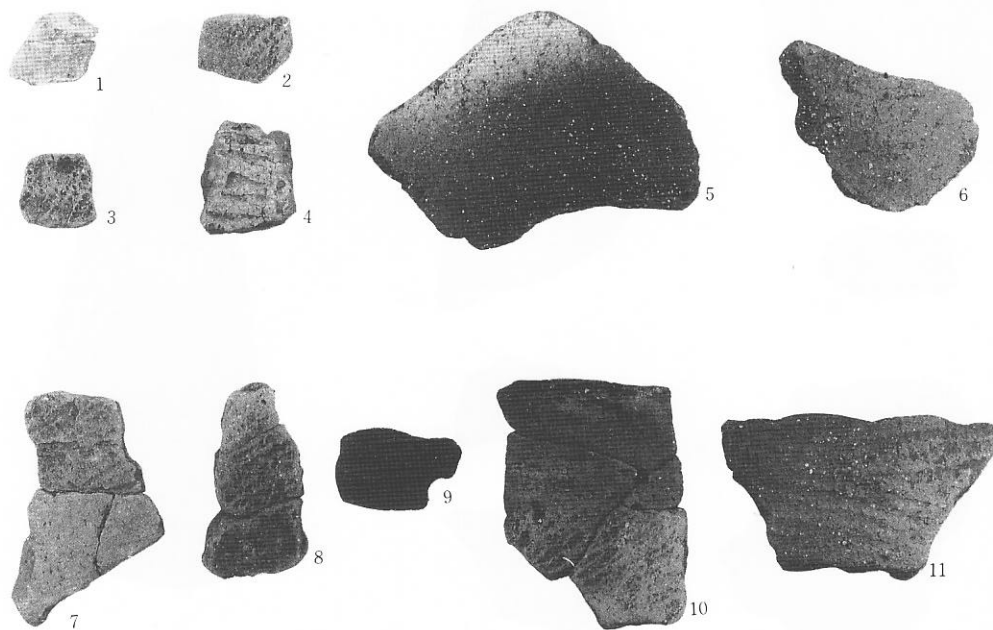




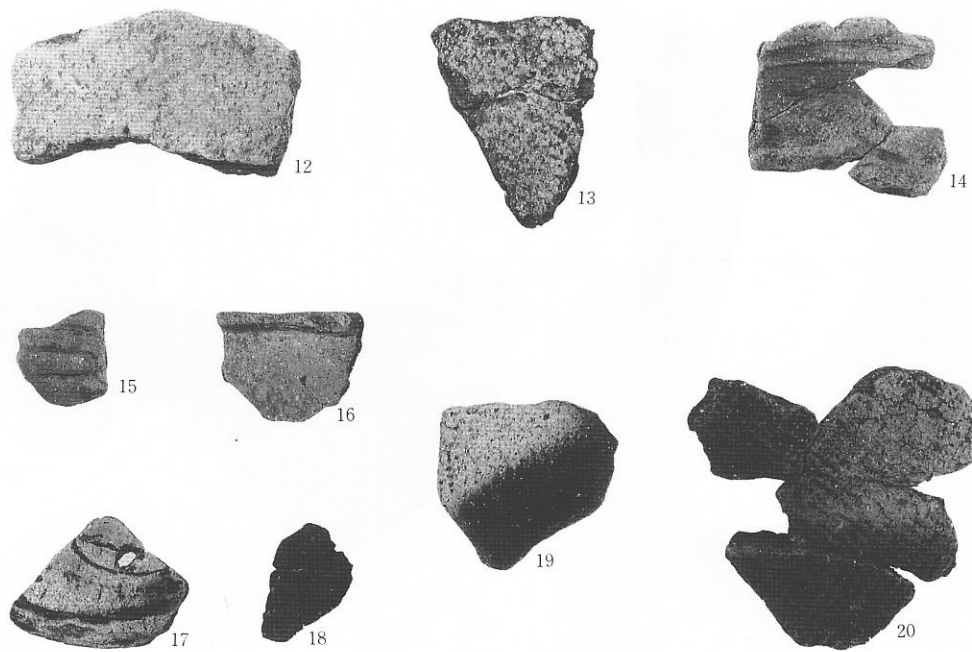
1 SK10 (南▷北)



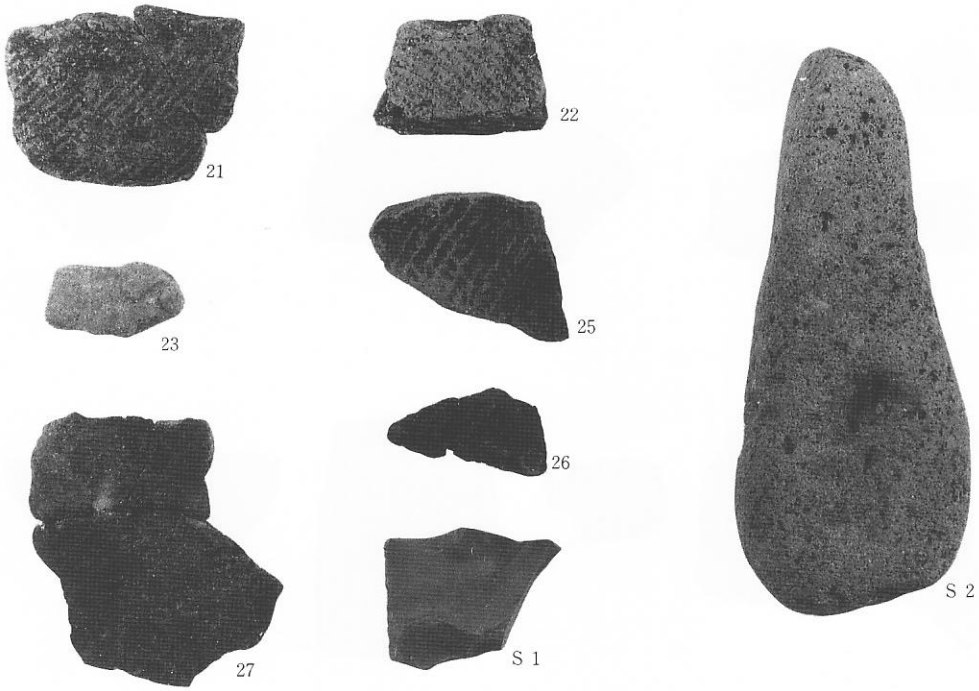
2 SK11 (南東▷北西)



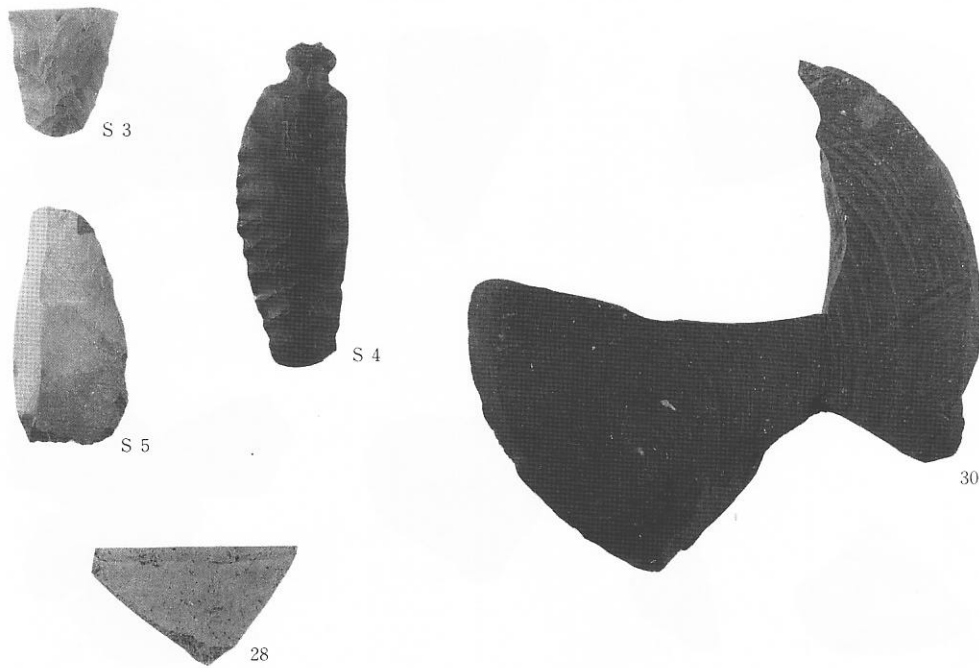
1 遺構内出土遺物 (土器)



2 遺構内出土遺物 (土器)



1 遺構内出土遺物（土器・石器）



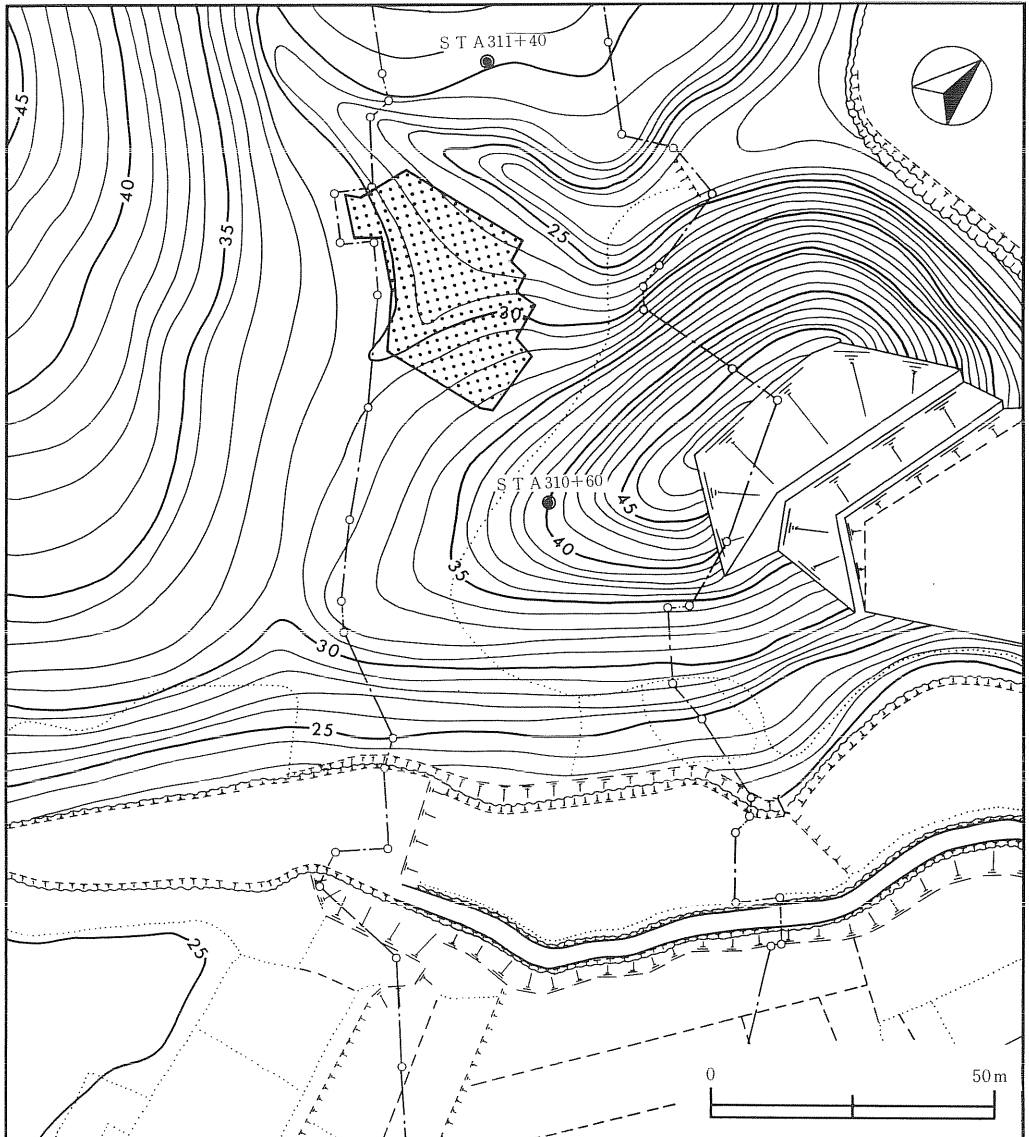
2 遺構外出土遺物（土器・石器）

# 北田山田ヶ沢Ⅱ遺跡

# 第1章 遺跡の概要

## 第1節 遺跡の立地

遺跡は南外村の北端、楯岡川と雄物川との合流点から、南へ約1kmの標高35～30mの出羽丘陵の末端部に立地し、北田山田ヶ沢I遺跡からは北へ約500mに位置している。



第1図 調査範囲図



遺跡の南東側からは、標高50mを頂部とする急斜面が迫り、一方の西側は遺跡を最低地とする緩やかな斜面が続いている。さらに北側は、小さな沢を挟んでこれも急傾斜の斜面が広がっていて、遺跡地は周辺を低い山地に囲まれた鞍部状の凹地となっており、調査範囲内の南東側の斜面と北西の最低地との標高差は2m以上もある。現況はスギの伐採された根が残る原野である。

## 第2節 調査の方法と経過

### 1 調査の方法

調査は、調査対象範囲とその地形を考慮して、範囲内南側に任意点MA50を選定し、グリッド杭には、東西方向に東から西に向かってLA→LT→MA→MTとアルファベットの組み合わせを、南北方向は、南から北に向かって連続する2桁の数字を用い、この両者の組み合わせによる記号(LA50など)を記入し、グリッドの呼称には、その東南に当たる杭の記号を与えている。

出土遺物は、遺構外のものについては、出土グリッド・出土層位・出土年月日を記入したラベルとともに取り上げ、遺構内出土の遺物については、出土遺構名・出土層位・出土年月日を記入したラベルとともに取り上げている。また遺物に関してはその出土状況によって、その都度写真撮影や図面作成を行っている。

調査の記録は、図面と写真によった。図面は、平面・土層断面図など基本的には1/20で作図することとし、写真撮影は、基本的には35mmモノクロフィルムとリバーサルフィルムを使用し、場合によってはネガカラーフィルムをも使用している。

### 2 調査の経過

10月1日 発掘機材の搬入を行い、調査範囲内の下草刈り等を行う。

10月4日 グリッド杭の打設を行う。また範囲確認のトレンチ調査の際の排土を除去する。

10月5日 遺跡南側のグリッドから粗掘りを開始する。MF49・MG51グリッドなどの西側の各グリッドⅡ層から土器片・石器が僅かずつ出土している。MA51グリッドより須恵器系中世陶器片がまとまって出土している。

10月16日 MF54グリッドより縄文土器片がまとまって出土する。

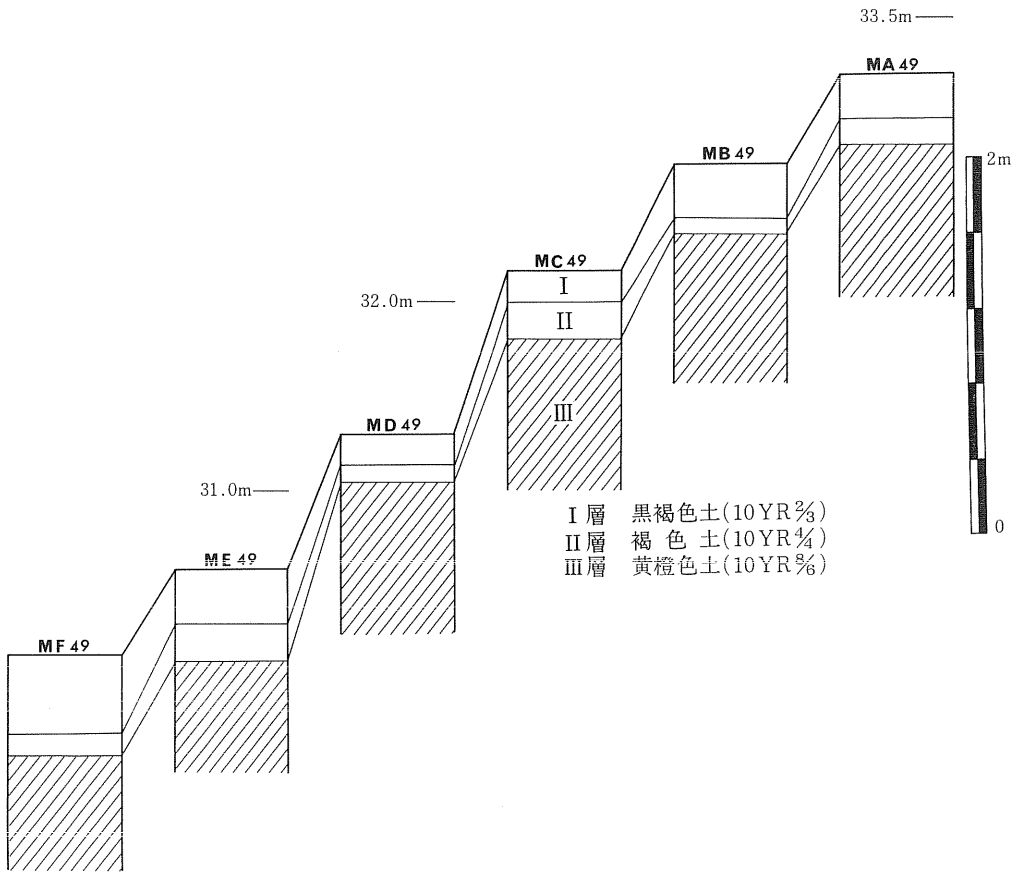
10月20日 各グリッドの粗掘りと精査を並行して行い、調査は中央部から北側へ移行しつつある。遺構の検出はない。

10月28日 中央部から北側の調査でも、遺構の検出は無く、遺物も出土しない。

10月31日 調査終了後の全景写真の撮影をし、機材の撤収を行った。

第3節 遺跡の層序

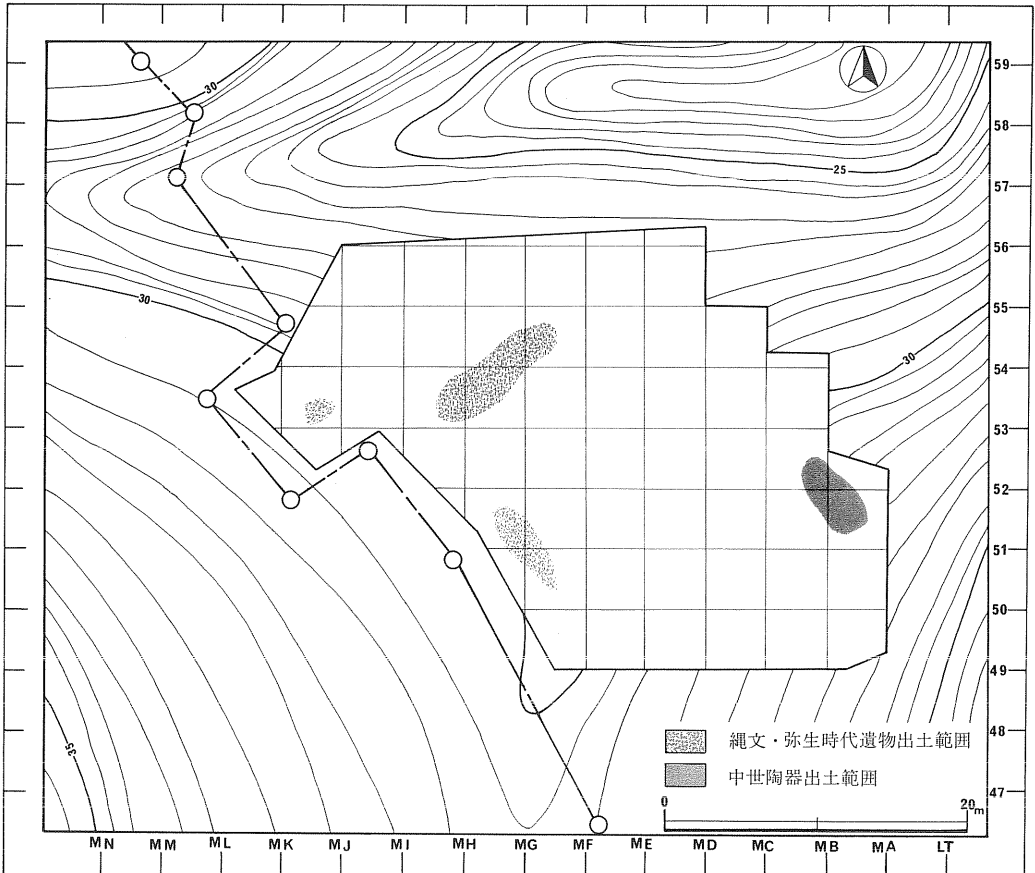
遺跡の層序は、基本的にⅠ層表土は黒褐色の腐植土で、間隙のあるしまりのない土である。Ⅱ層は褐色土で、粘性としまりがあり、炭化物を少量含んでいる。縄文、弥生時代の遺物はこの層に含まれる。Ⅲ層は黄橙色の地山で、基盤層である船川層由来の軟質の泥岩を含んでおり、これはⅢ層表面に露出している。Ⅰ・Ⅱ層とも場所によって層厚に差はあるものの、調査範囲全体で観ることができる。Ⅰ層の厚さは南東斜面で20cm、西北部では40cmで、Ⅱ層は20cm前後で一定している。



第2図 土層柱状図

## 第2章 出土遺物

調査では遺構の検出は無かったが、調査区内西側のMF54グリッドのⅡ層から縄文時代と弥生時代の土器片・石器が出土し、一方の東側の緩斜面のMA51グリッドのⅠ層からは、中世陶器の破片が斜面に沿って帯状に出土している。



第3図 グリッド配置図

### 第1節 土器 (第4・5図、図版2・3)

#### 1 縄文土器 (1～3・16)

1はR捺糸文。2はR捺糸文を地文として、沈線内を磨り消しているが、磨り消しが弱く、わずかに地文の痕跡が残っている。3はLR原体の横位回転による縄文が施されている。3点

とも胎土には、石英粒などの径1mm以下の砂粒を含むが、緻密で焼成も良好である。16は、平坦な口唇、やや外反する口縁部で、丸みのある体部上半に最大径をもち、口縁部下半から体部全体にLR原体の縦位回転による縄文が施される。胎土は、1～3と同様、砂粒を含むものの緻密で、焼成も良好である。

## 2 弥生土器 (4～15)

胎土が極めて緻密であるが、径3mm前後の砂粒を含んでおり、この点において縄文土器の胎土との違いが明瞭である。4は、壺形土器の口縁破片で、2条1組の平行沈線が引かれる。5は、波状を呈する無文の口縁部で縄文の施される体部とは深い沈線で画される。6～8は同一個体で、体部上半の沈線下にはLR原体の斜位→横位回転による縄文が施される。9の縄文も細いLR原体による。11～14は、鉢形土器の破片で同一個体である。細いLR原体による縄文が施される。

15は上げ底ぎみの底部からわずかに膨らみながら立ち上がる鉢形土器であろう。体部下端までLR原体の縦位回転による縄文が付される。

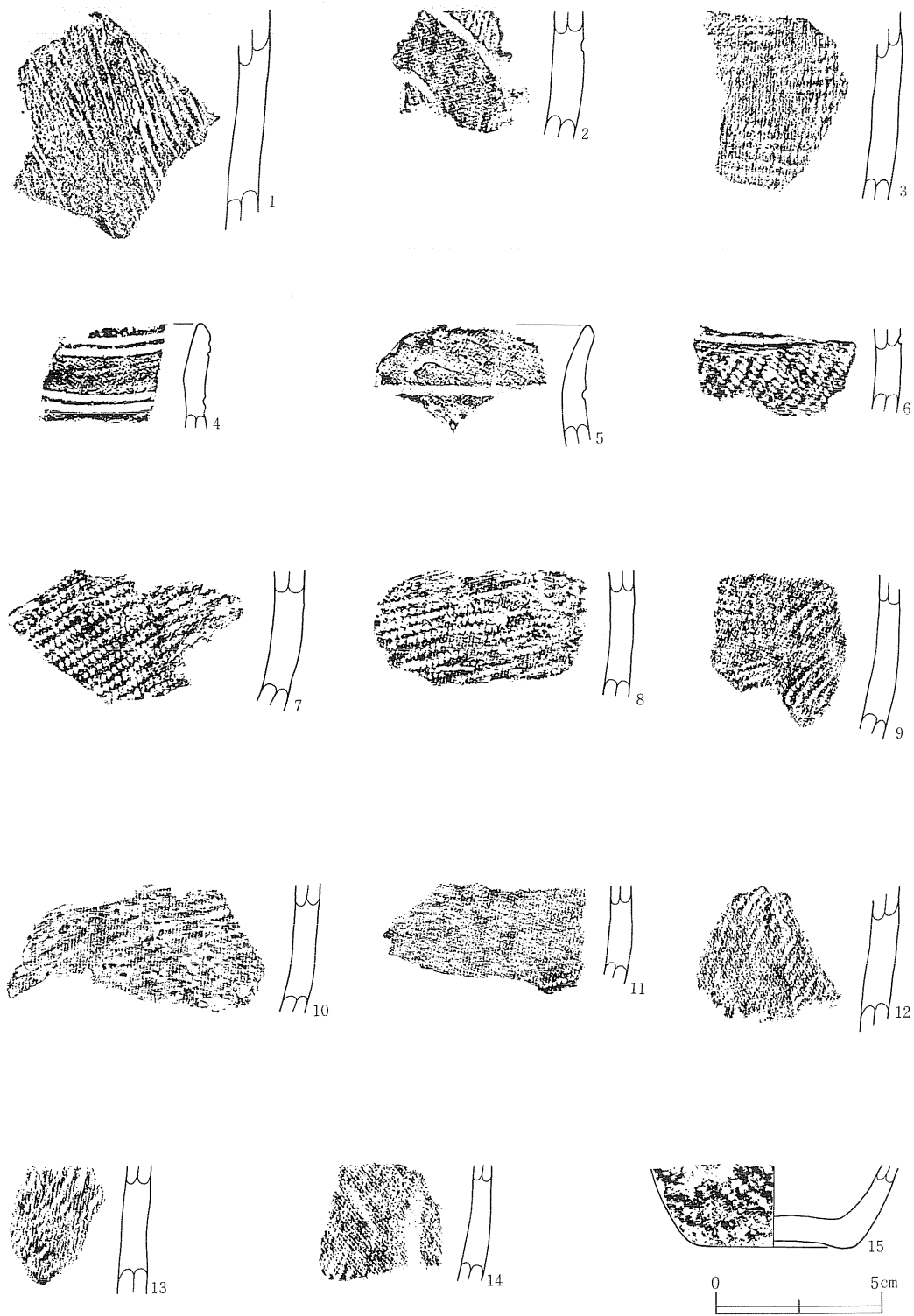
## 3 中世陶器 (17)

広口(径20.5cm)で、体部上半に最大径(36.2cm)をもつ壺である。口縁は、外端がしっかり面どりされ、頸部は曲線的に強く外反して短く立ち上がる。体部は上半で丸く大きく張り出し、底部に至る倒卵形を呈するのであろう。器外面頸部には丁寧な撫でが、体部には1cm間に1～2本の平行打圧原体による右下がりの叩打が行われる。内面頸部には丁寧な撫でが行われ、体部上半には横方向の粗い撫で、それ以下は縦方向の丁寧な撫でが行われるが、部分的に押圧痕をとどめる。焼成は良好で灰色を呈し、胎土には径1mm以下の砂粒を含んでいる。

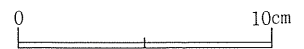
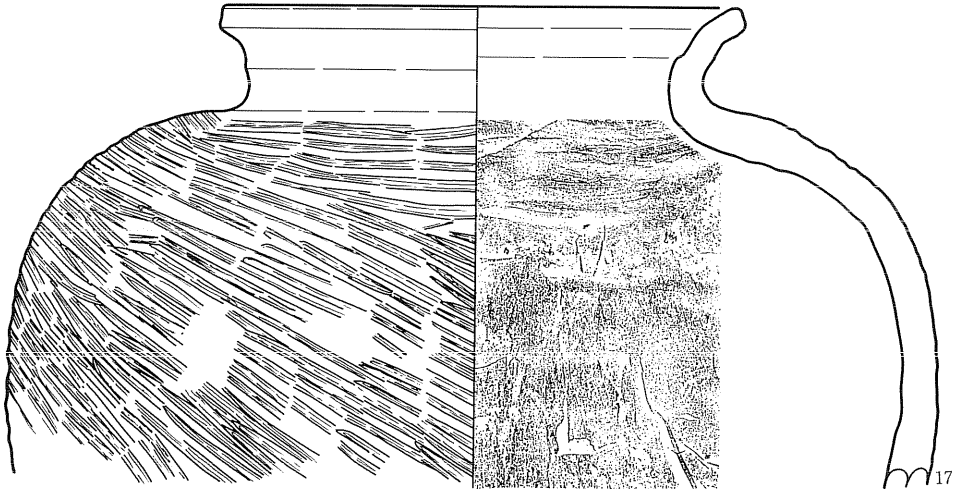
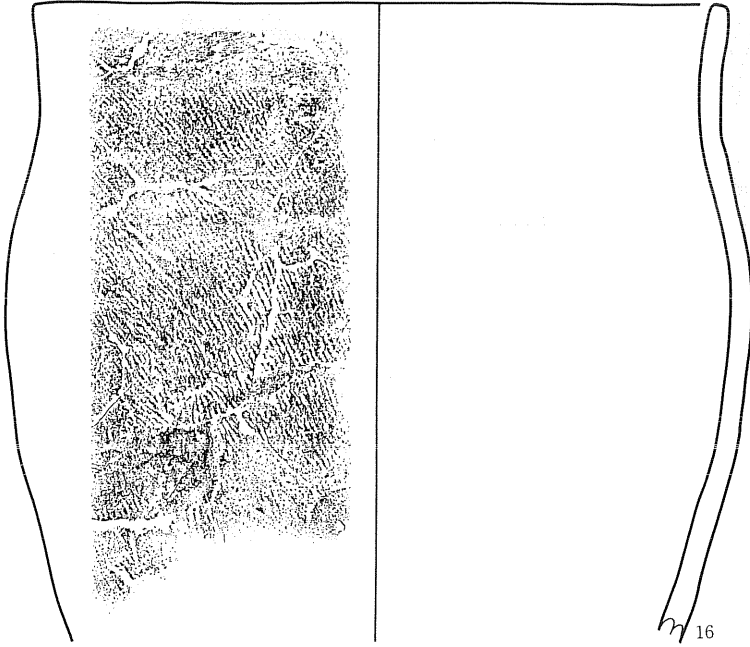
## 第2節 石器 (第6図、図版3)

S1は横長剥片を素材とした石筥で、背面は基部側に自然面を残し、粗い剥離を施す。主要剥離面の刃部には大きく使用痕が認められる。S2は自然面を大きく残した、素材の一側縁に刃部を設けた搔器である。S3は素材剥片の形状をそれほど変えることなく、主要剥離面の一側縁にのみ調整を行った尖頭器様の石器で、先端部には一部自然面が残り、また打面も残される。S4は扁平な剥片素材の背面に一方向から平坦剥離を行い、主要剥離面の一側縁には細かな調整を施すが、反対側の側縁の調整は粗い。S5は、三方向から剥片を剥取した石核である。S6の磨製石斧の基端部には、敲打痕があり、刃部にはわずかながら使用痕が認められる。

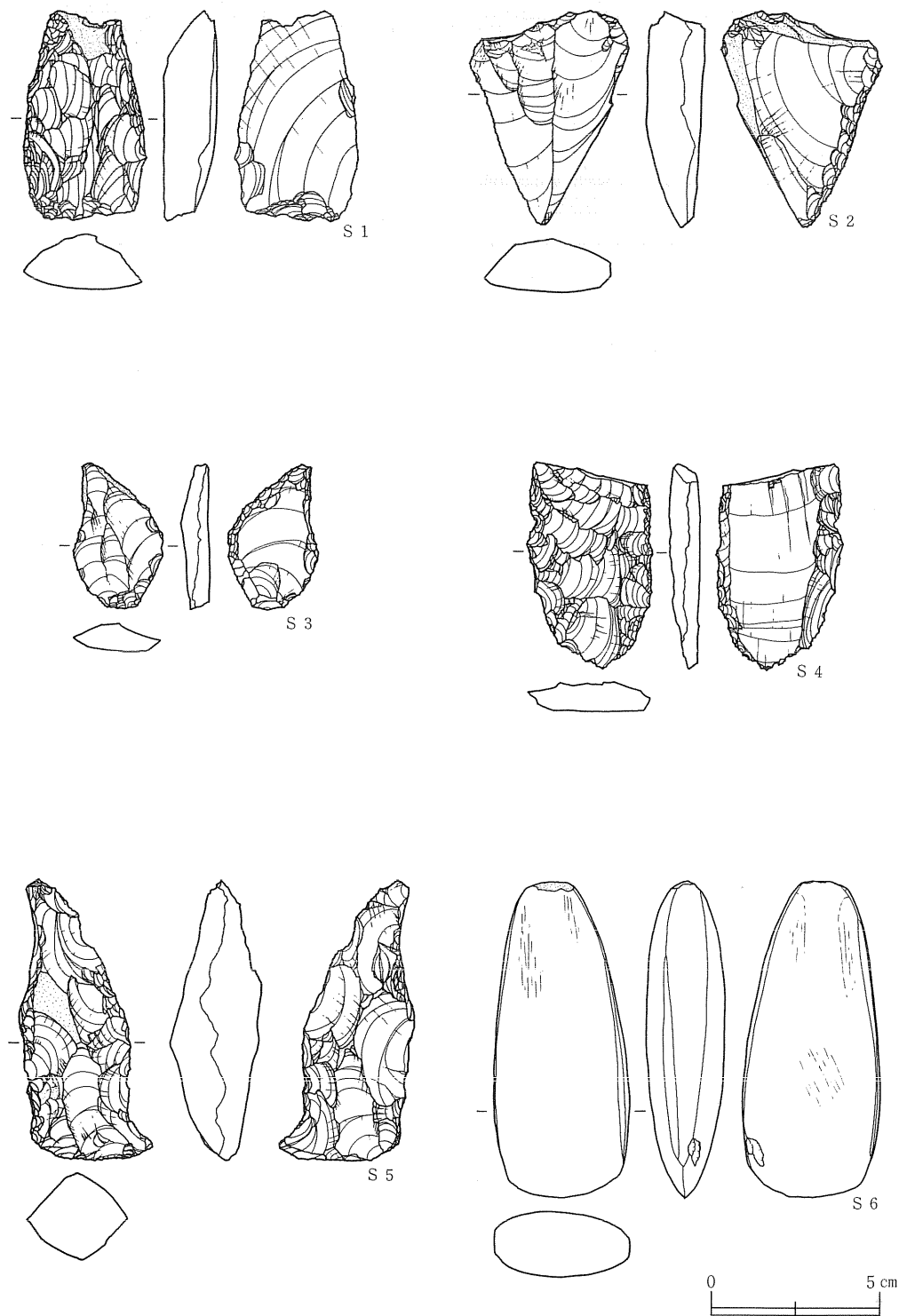
石質はS1～S5は頁岩で、S6は緑色凝灰岩である。



第4図 出土遺物（土器）



第5図 出土遺物（土器）



第6図 出土遺物（石器）

## 第3章 まとめ

北田山田ケ沢Ⅰ遺跡、北田山田ケ沢Ⅱ遺跡の発見の契機となったのは、昭和63年度の小出遺跡の調査中に、長山幹丸氏によって、北田山田ケ沢Ⅱ遺跡から表採の中世陶器の破片を紹介されたことによる。また時期を同じくして、北田山田ケ沢Ⅰ遺跡周辺の水田から出土したという個人所有の石槍と磨製石斧を実見するにおよんで、両地域に遺跡の存在することが予想されたため、秋田県教育委員会が、同年8月に範囲確認調査<sup>(1)</sup>を実施したものである。

北田山田ケ沢Ⅱ遺跡の調査の結果は、既述のとおり縄文時代の土器・石器、弥生時代の土器、中世陶器の壺が出土しただけで、遺構は検出されなかった。出土地点は縄文・弥生時代の遺物が西北の低地で、土器の摩滅状況からしても調査範囲外西の斜面からの流れ込みと考えられる。

縄文時代の土器は、撚糸文と曲線的な沈線文が描かれており後期前半の時期であり、また弥生時代の土器は、点数が少なく詳らかに言及できないが、前半期に位置付けられる。

中世陶器は東側の斜面から、全く1個体分のみの破片で、帯状に出土していることから、東側斜面から流れ込んだものであろう。この東側斜面をもつ標高50m前後の独立丘を呈する丘陵末端部はその頂部から東側半分を削平されており、現在では遺構の存在の有無を確認することはできない。この中世陶器の壺は、吉岡康暢氏によれば、須恵器系中世陶器で珠洲陶の系譜を引くものである。県内において、中世の集落遺跡以外から出土する珠洲系陶器の壺・甕などは、その多くが経塚など墳墓に埋納された経外容器として供されたものであり、本遺跡の壺も、<sup>(3)(4)</sup>県内の諸例と同じものと考えられる。

三辻利一氏の胎土分析<sup>(5)</sup>によればこの壺は、小出Ⅰ遺跡出土の壺<sup>(6)</sup>とともに大畑窯跡の所産である。大畑窯跡の年代は調査報告書によれば13世紀中頃～後半の操業とされる。南外村にはこの大畑窯跡の他<sup>(7)</sup>2ヶ所で珠洲系陶器の窯跡が確認されており、この地域が13世紀後半には珠洲系陶器の生産地であったことが窺える。また本遺跡や小出Ⅰ遺跡の例からしても生産地である地元で消費されていたことも事実である。他地域における珠洲系陶器の胎土分析によっては、当地域における中世窯業の技術的伝経路や、生産形態、流通形態などを解明することも可能である。

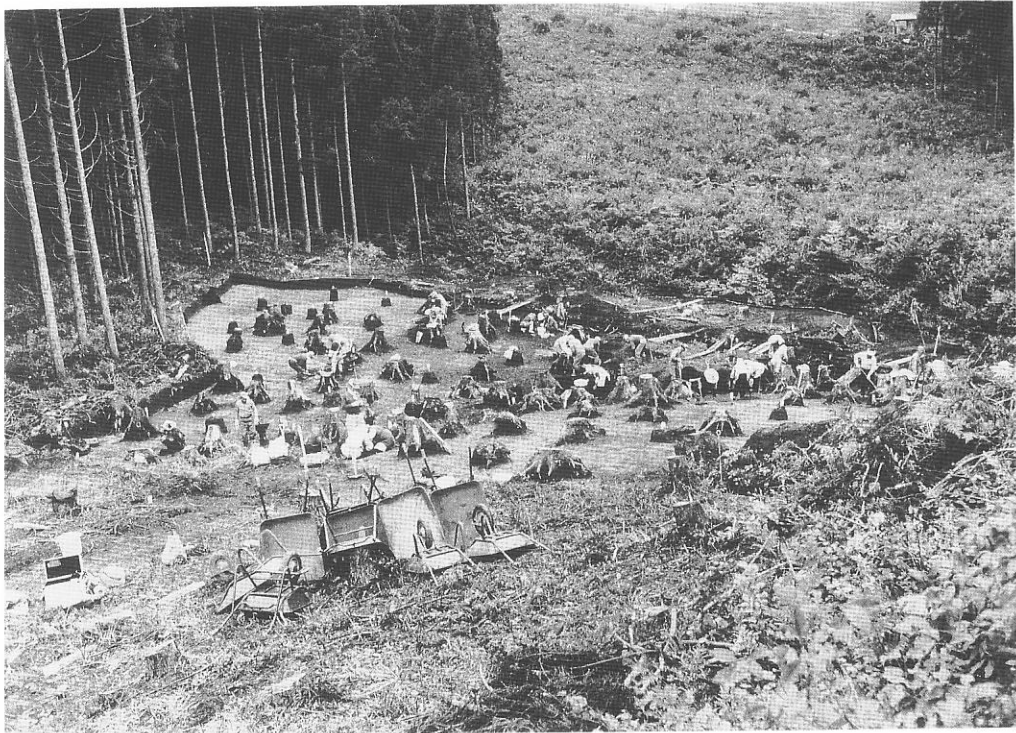
## 註

- 1 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第179集 1989  
(平成元年)
- 2 吉岡康暢「経外容器からみた初期中世陶器の地域相」『紀要』第14号 石川県立郷土資料館  
1985(昭和60年)



北田山田ケ沢Ⅱ遺跡

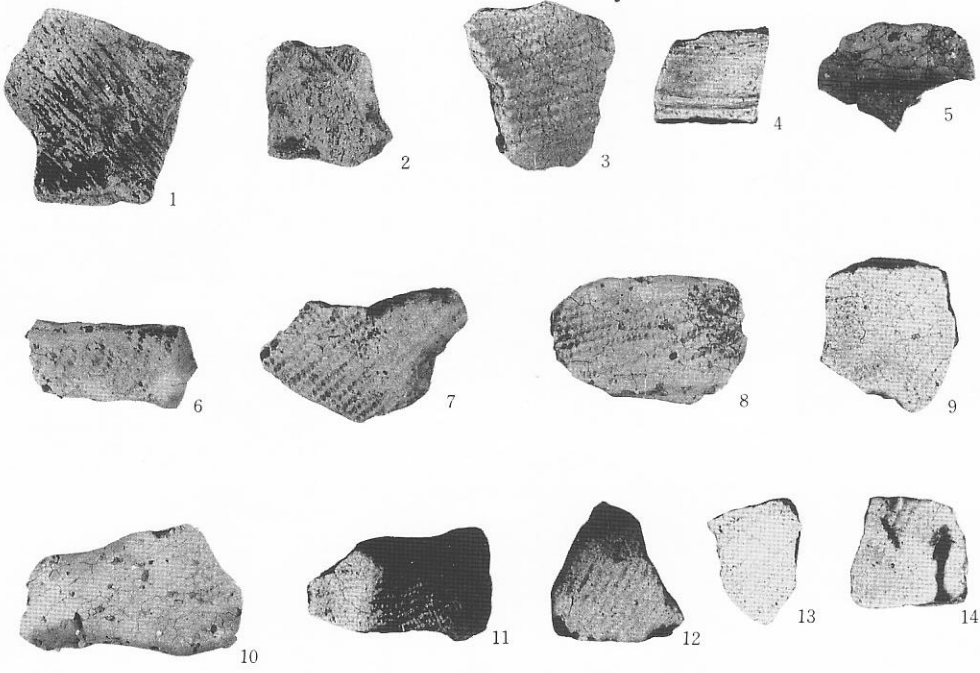
- 3 秋田県埋蔵文化財センター『秋田県内の珠洲系陶器』埋蔵文化財研究会資料 1985 (昭和60年)
- 4 註3によれば県内において、珠洲系陶器の出土した経塚は7ヶ所である。このうち松岡経塚と上溝観音寺経塚の在銘経筒にはそれぞれ建久7年(1196)、久安5年(1149)の紀年が記されている。
- 5 三辻利一「小出遺跡出土中世陶器の産地推定」『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅷ』秋田県文化財調査報告書第206集 秋田県教育委員会 1991 (平成3年)
- 6 秋田県教育委員会「小出Ⅰ遺跡」『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅷ』秋田県文化財調査報告書第206集 1991 (平成3年)
- 7 南外村教育委員会『大畑窯跡』1981 (昭和56年)
- 8 桧山腰窯跡と甕コ沢窯跡の2ヶ所であり、「遺跡周辺の歴史的環境」を参照されたい。



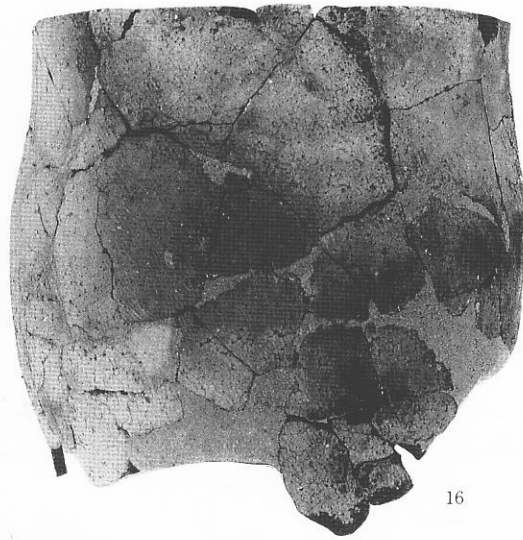
1 調査風景 (南▷北)



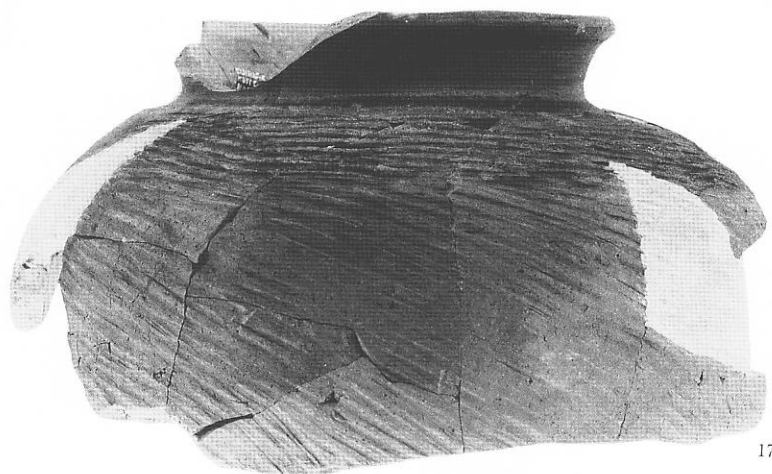
2 調査後全景 (北▷南)



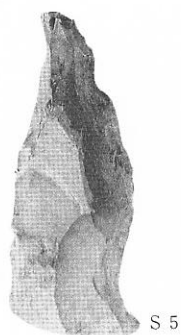
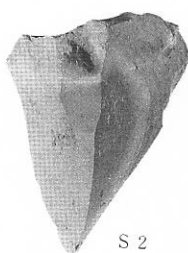
1 出土遺物（土器）



2 出土遺物（土器）



1 出土遺物 (土器)



2 出土遺物 (石器)

# 大畑潜沢Ⅱ遺跡

## 調査の概要

本調査においては、遺構・遺物とも全く検出されなかった。従って、ここでは調査の概要を記述するにとどめておく。

### 1 遺跡の立地

遺跡は、楯岡川の支流である小出川右岸の標高45m前後で、沖積地に面した丘陵裾部に立地している。遺跡のある丘陵は、標高387.6mの姫神山を最頂部とする姫神山山地の西麓で、遺跡の西から南側にかけては村道大畑線が走り、また遺跡北側の小沢を隔た舌状の丘陵には大畑潜沢Ⅲ遺跡が立地する。

遺跡内は、北から南へ緩く傾斜しており、南端では小沢が埋められた平坦地となっている。現況は宅地、畑地、スギの人工林からなっている。

### 2 調査の方法

調査は、最初遺跡内の遺物・遺構の分布密度や検出面の確認をするためにトレンチを設定して行った。トレンチは磁北に沿って南北に幅1mで4m間隔に、さらにこれに直交する東西トレンチを、これも4m間隔に設定した。

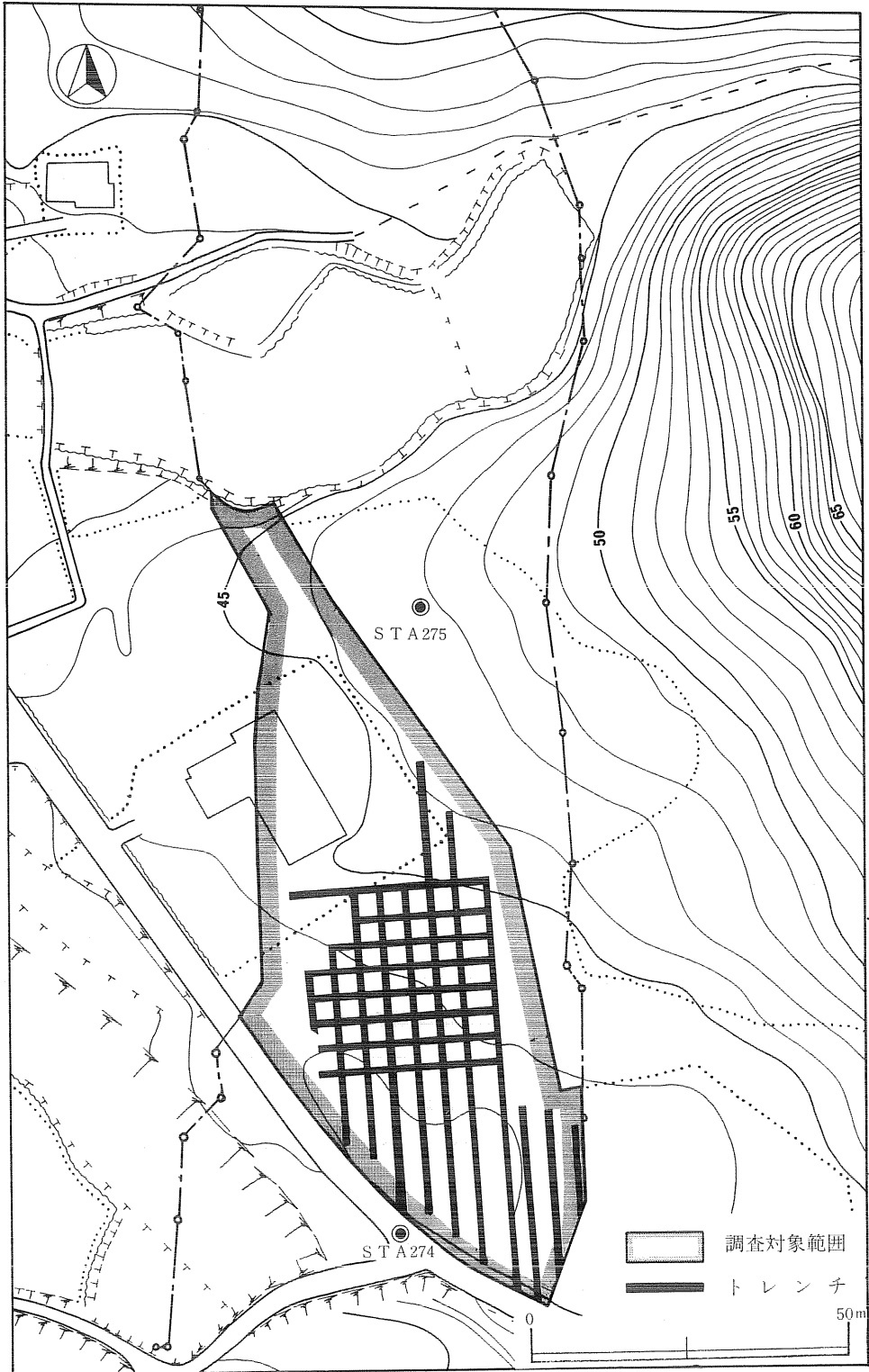
### 3 調査の結果

調査の結果、調査範囲の大部分が宅地造成の際に地山まで削平を受けていることが判明し、遺構・遺物とも全く検出されなかった。

調査の対象となった範囲については、昭和63年度に行われた東北横断自動車道秋田線に係る遺跡分布調査<sup>(1)</sup>で、周辺から縄文土器片と剝片が採集されたことから遺跡として5,020㎡が調査の必要な部分とされたものである。本調査ではこのうちの西側2,700㎡を調査し、結果は前述の通りであったが、分布調査における遺物の採集、さらには、平成2年度に行われた東側の調査<sup>(2)</sup>において、調査範囲東端で1点ではあるが縄文土器片が出土していることから、縄文時代の遺跡の中心が東側の緩斜面にあることが十分に予想され、その意味では、今回の調査範囲も同時代の生活圏の一部であったと考えられる。

#### 註

- 1 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第93集 1982(昭和57年)
- 2 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第217集 1991(平成3年)



第1図 調査範囲図



1 調査前全景（南▷北）



2 調査風景（南▷北）



# 大畑潜沢Ⅲ遺跡

# 第1章 遺跡の概要

## 第1節 遺跡の立地

大畑潜沢Ⅲ遺跡は仙北郡南外村字大畑潜沢255に所在する。

遺跡は、南西向きに舌状にのびる丘陵先端部に立地している。この丘陵は出羽丘陵を蛇行しながら北流する櫛岡川の支流小出川右岸側に位置している。丘陵先端部の頂部はその幅が10m前後に過ぎず、典型的な馬の背状を呈している。その頂部の標高は75～84mを測り、丘陵下の水田面との比高差は40～46m前後である。

遺跡の位置する丘陵の調査前の現況は植林された杉林であった。

## 第2節 調査の方法と経過

### 1 調査の方法

本遺跡は昭和58年度の遺跡分布調査の結果から、丘陵先端部の頂部からその南側の急斜面および丘陵裾部の緩斜面にかけての計4,880㎡が当初遺跡範囲とされていた<sup>(1)</sup>。

調査は、まず丘陵頂部と丘陵南裾部にトレンチを設定し、遺跡の広がりを検討した(第1図)。その結果、丘陵頂部では、陥し穴を確認したが、丘陵南裾部では遺構・遺物を確認できなかった。これらのことから、遺跡は丘陵の急斜面から緩斜面には広がらないものと判断し、丘陵頂部の平坦面を全面的に発掘することとした。

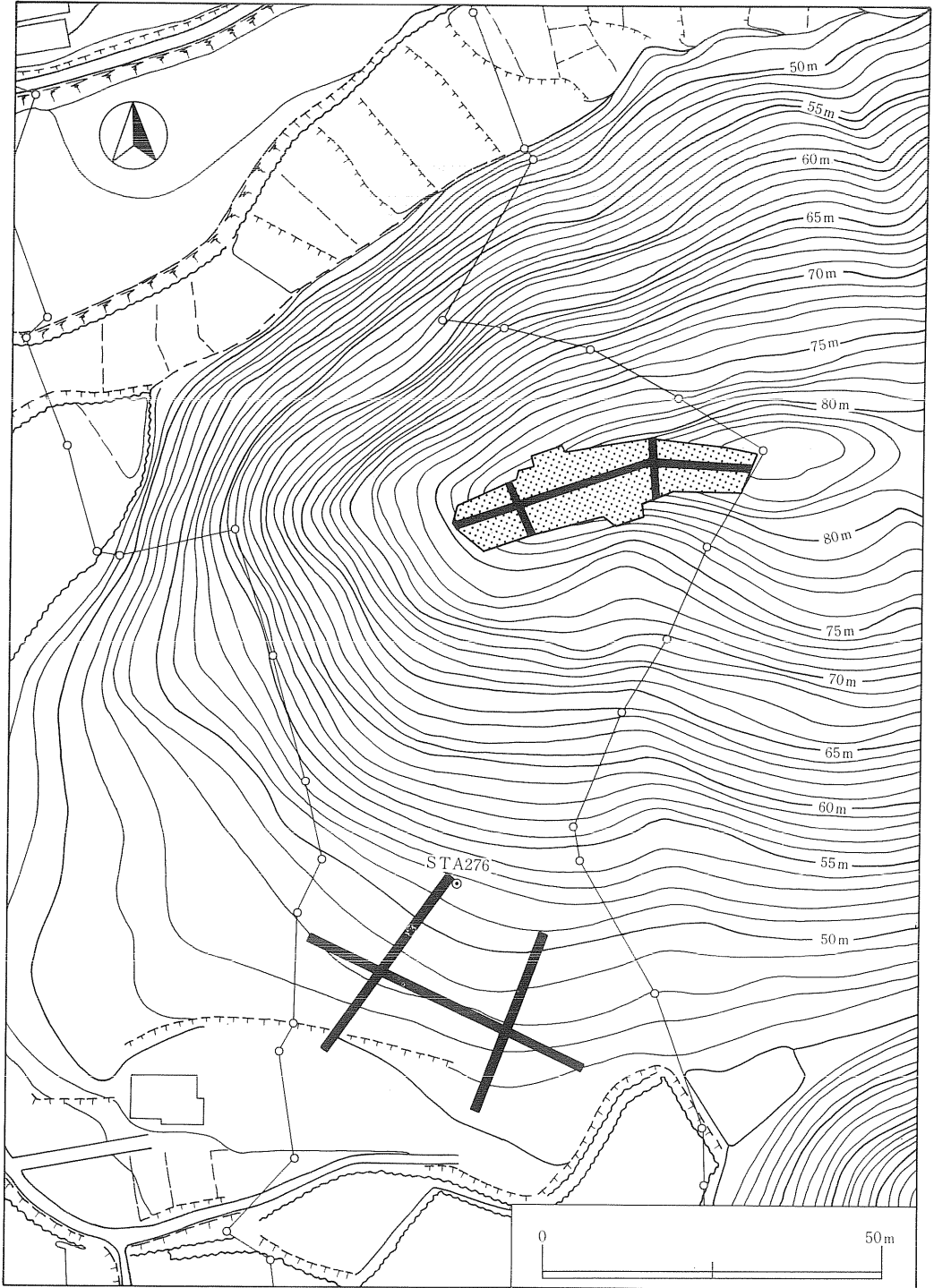
発掘においては、発掘面積が狭少なことから、方眼杭の打設は行わず、遺構は任意の点を基準点として割り付けて平面実測することとした。その後、これらの基準点および工事用幅杭等を平板測量し、工事図面等の平面図と対比できるようにした。

丘陵頂部の発掘面積は365㎡、丘陵南裾部の試掘調査面積は110㎡である。

### 2 調査の経過

調査は11月5日から11月17日まで実施した。

11月5・6日は丘陵頂部と丘陵南裾部の緩斜面に幅1mのトレンチを設定し、遺跡の広がりを調査した(第1図)。丘陵南裾部では遺構・遺物は検出されなかったが、丘陵頂部では6日に陥し穴(SKT01)を確認し、丘陵頂部を全面調査することにした(以下、丘陵頂部の全面調査範囲を調査区と呼ぶ)。9日には調査区全域の表土除去を開始するとともに、陥し穴SKT01を完掘した。翌10日にはSKT01の南西側で、陥し穴SKT02とSKT03を確



調査区

トレンチ

第1図 調査範囲図

認するとともに調査区中央北側で同一個体の縄文土器破片を数点検出した。12日には調査区中央南端部で微小剝離痕ある剝片を検出した。13日にSKT02・03を完掘し、SKT01とともに平面実測を行った。この間、調査区の土層断面の実測も実施した。16日からは、調査区の地山面の地形や工事杭等を測量し、17日にすべての現場作業を完了した。

### 第3節 遺跡の層序

調査区の層序はⅠ～Ⅲ層に分けた。各層は調査区全域にわたり比較的一様である（第2図）。

Ⅰ層は表土層である。層厚10cm前後を測る。草根が多く入り込み、孔隙が多い。

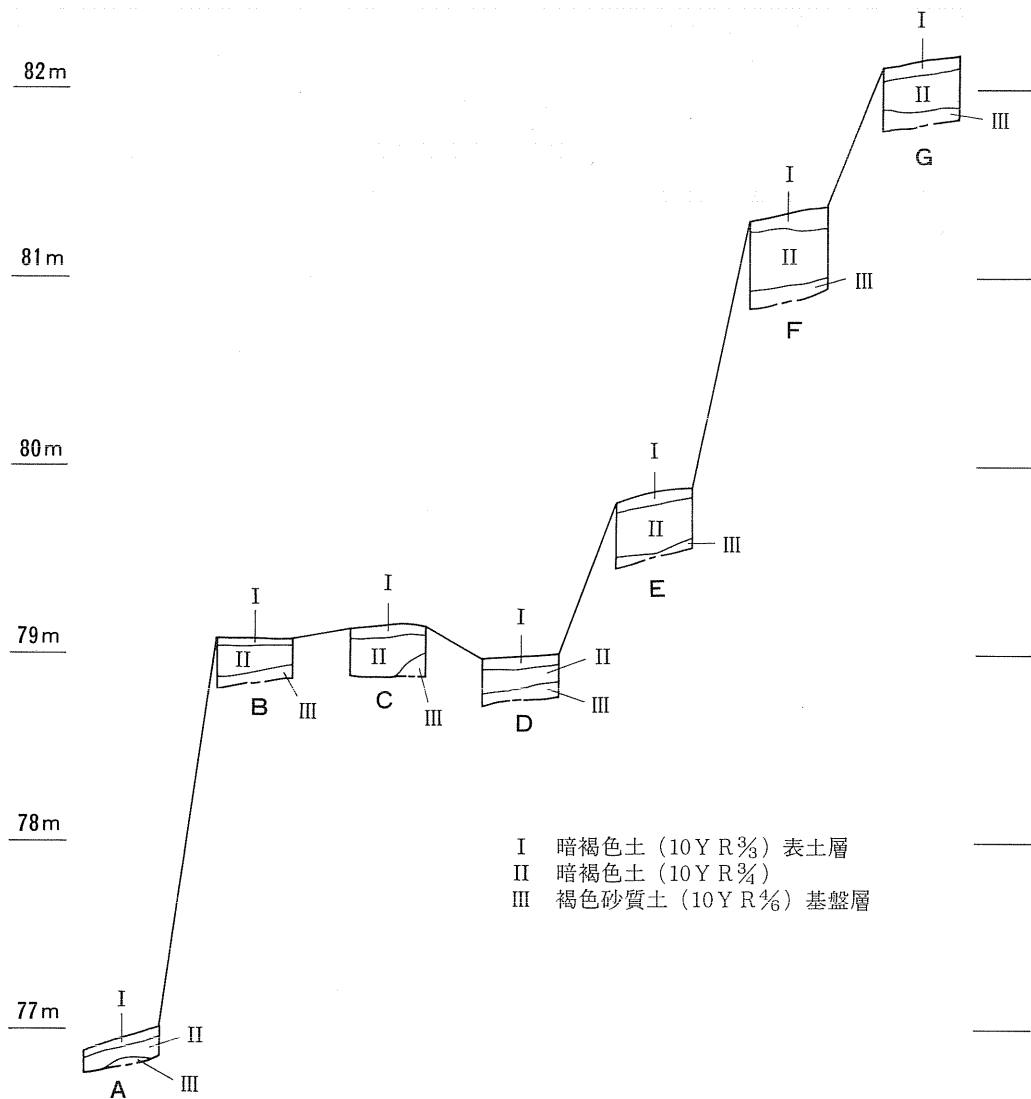
Ⅱ層は層厚15～20cm前後で、西側斜面際（第2図A地点）では相対的に薄くなる。上層との境界は漸移的である。Ⅰ層よりも相対的に粘性が強いが、部分的に砂質の強まる部分もある。草根は比較的顕著であるが、色調は暗褐色～褐色を呈し、腐植の沈着が弱い。

Ⅲ層は泥岩の基盤層である。中新世新第三紀堆積層の船川層に相当する<sup>(2)</sup>。上位は風化が若干進み、砂質土状を呈し、部分的に大形の泥岩塊が残存する。Ⅱ層との境界は漸移的である。風化した本層上位には縄文時代中期土器を包含する。

本調査区においては縄文時代の遺物が基盤層付近から出土したことから、縄文時代以降に堆積層が形成されていたことは明らかである。しかしながら、Ⅰ～Ⅲ層の境界は漸移的で、明瞭な層理面を認めることができないことから、各層は堆積層位ではなく、基本的に土壌層位に相当すると考えられる。このうち、Ⅰ・Ⅱ層は土壌分類では褐色森林土壌に属しており、いわゆる黒ボク土は認められない<sup>(3)</sup>。この両層は土壌層位のA層に属するものとみられ、その厚さは20～30cm前後と薄い。また、両層の下位には土壌層位のB層の形成は認められず、風化したⅢ層上位は土壌層位C層に相当する。

このような土壌の特徴は土壌化の度合いが低い様相を示している。この様相は、調査区が位置する丘陵頂部では、安定した地表面が長期にわたって形成されなかったこと、換言すれば表土の流失が比較的激しかったことに起因すると想定できる。このような状況は周辺の植生が疎林であったことによる可能性があろう。

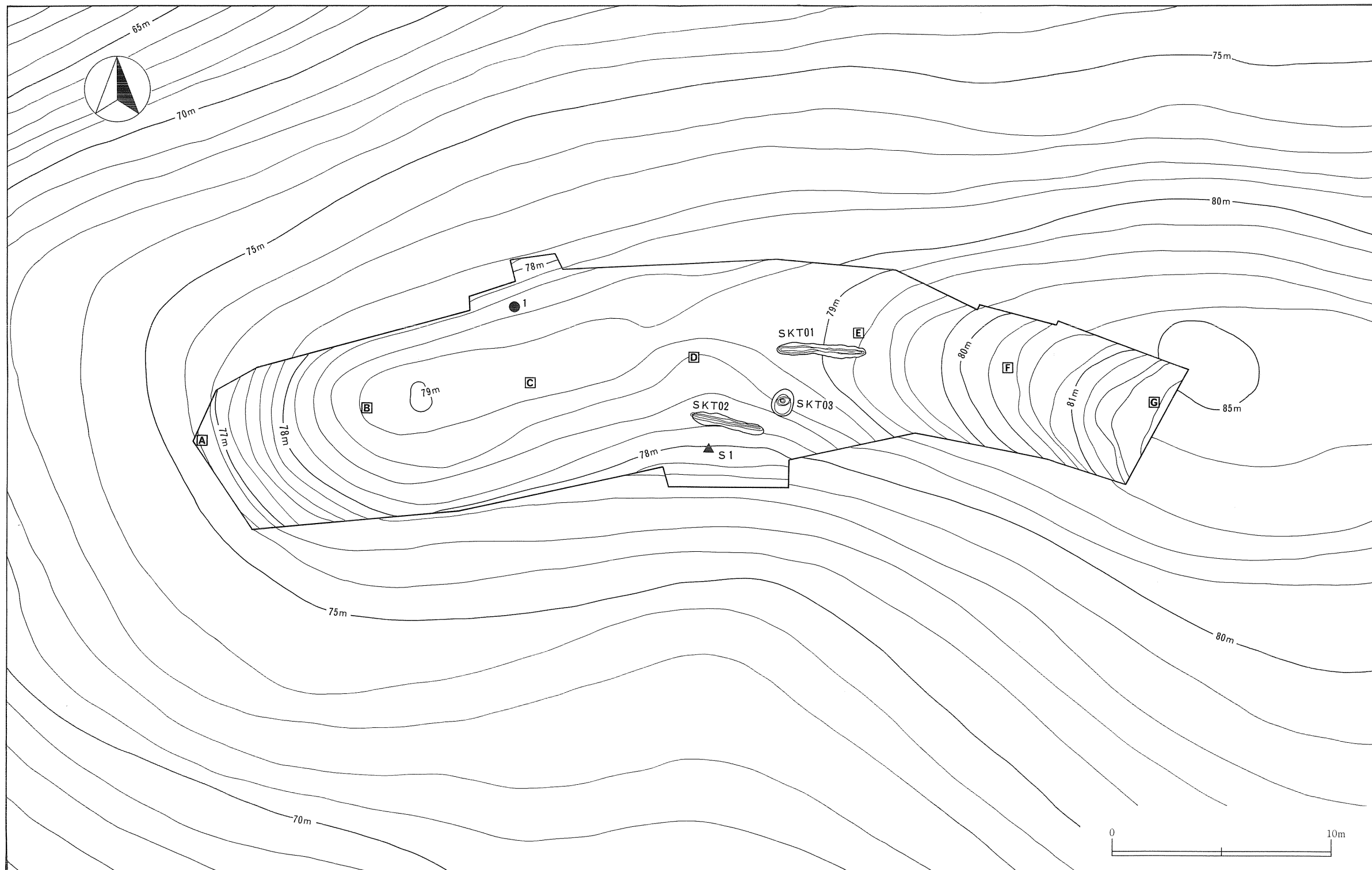
この疎林植生が存在したとして、いつまで溯るかは不明確であるが、後述する縄文時代中期土器および石器が基盤層であるⅢ層直上もしくは一部Ⅲ層上位で出土していることから、縄文時代中期前後には土壌層位A層（およびB層）の形成が充分でないことが想定できる。このことから該期には疎林植生が形成されていた可能性は高く、陥し穴の立地条件を考える際に留意される。



第2図 調査区土層柱状図

註

- 1 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第116集 1984 (昭和59年)
- 2 秋田県農政部農地整備課『土地分類基本調査 大曲』1978 (昭和53年)
- 3 註2文献



第3図 調査区遺構配置図 A~Gは土層柱状図位置(第2図対応)

## 第2章 検出遺構と遺物

### 第1節 遺構

今回の調査において検出した遺構は陥し穴3基である。このうち2基は平面形が溝状を呈するもので、他の1基は円形で、底面に柱穴状の掘り込みを有するものである。前二者は調査区中央南側に並列し、後者は前二者の中間に位置する（第3図）。

#### 1 陥し穴

##### **SKT01**（第4図）

調査区のはぼ中央で確認した。平面形は長さ405cm、幅65cmの溝状を呈し、長軸方向はほぼ東西方向で、調査区の位置する丘陵の尾根の向きと一致している。底面は長さ380cm、幅10cm前後を測り、確認面から底面までの深さは110cm前後である。壁は四周ともほぼ垂直に立ち上がっている。

横断面の覆土土層は12層に分かれる。

1層は基本層序Ⅰ層、2・3層はⅡ層にほぼ対応し、遺構の大半が埋没した後のくぼみに堆積した層群である。4層以下は褐色～暗褐色土（4・6・8・10・12層）と地山に類似した明黄褐色土（5・7・9・11層）とが互層となった堆積である。これらの堆積は遺構周囲からの表土の流入と壁の崩壊が季節変化によって周期的に生じた結果とみられ、いずれも自然営力によるものと考えられる。

本遺構からの遺物の出土はない。

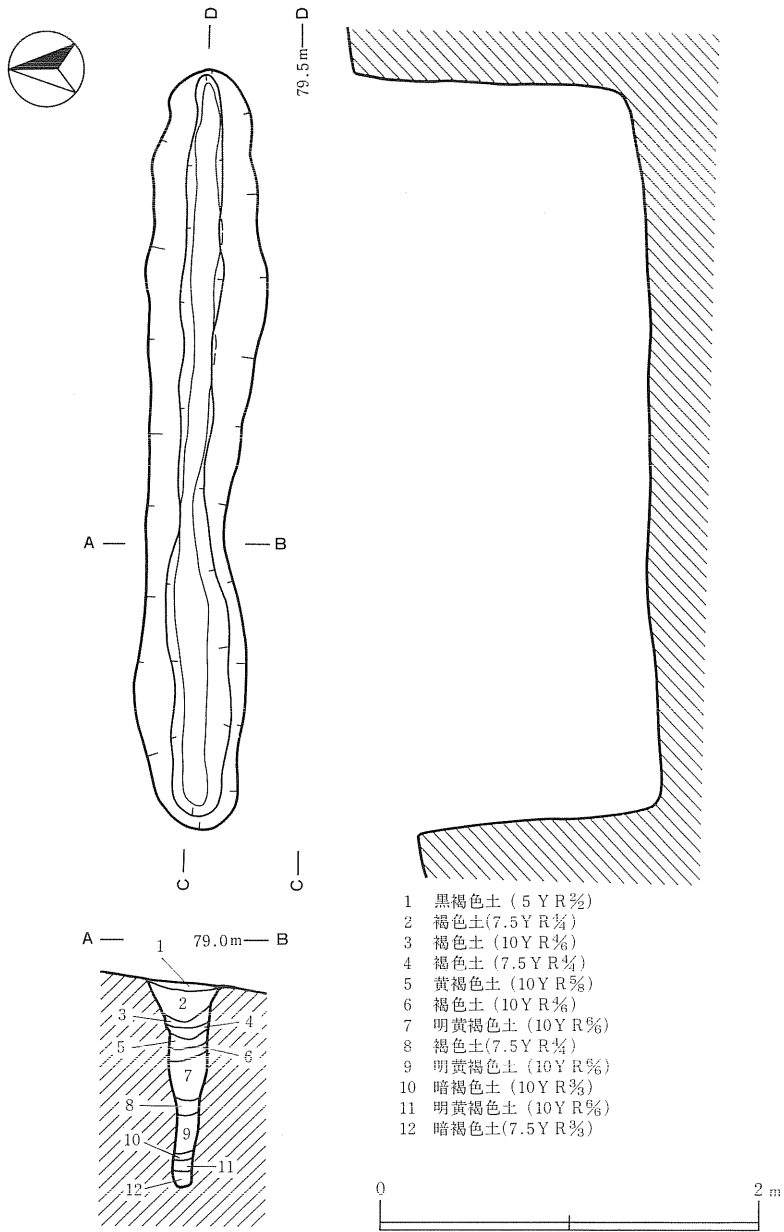
##### **SKT02**（第5図）

調査区中央南側の急斜面際で確認した。SKT01と同じく平面形は溝状を呈し、SKT01の南西約4mにはぼ平行して位置する。平面形は長さ335cm、幅60cm前後を測る。底面は長さ330cm、幅10cm前後で、確認面からの深さは130cm前後である。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、西端部の壁は底面から開口部に向かって若干内傾しながら立ち上がっている。

横断面の土層観察では、覆土は8層に分かれる。

1層は基本層序Ⅰ・Ⅱ層にほぼ対応し、遺構の大半が埋没した後のくぼみに周囲から表土が流入したものとみられる。2層以下は壁の崩壊土を主体とする層群である。このうち、層厚2～3cm前後の薄層の5・7層は炭化物を含む。これらの堆積状況はSKT01と同様、季節による堆積環境の変化に起因するものと考えられる。

本遺構から遺物は出土しなかった。

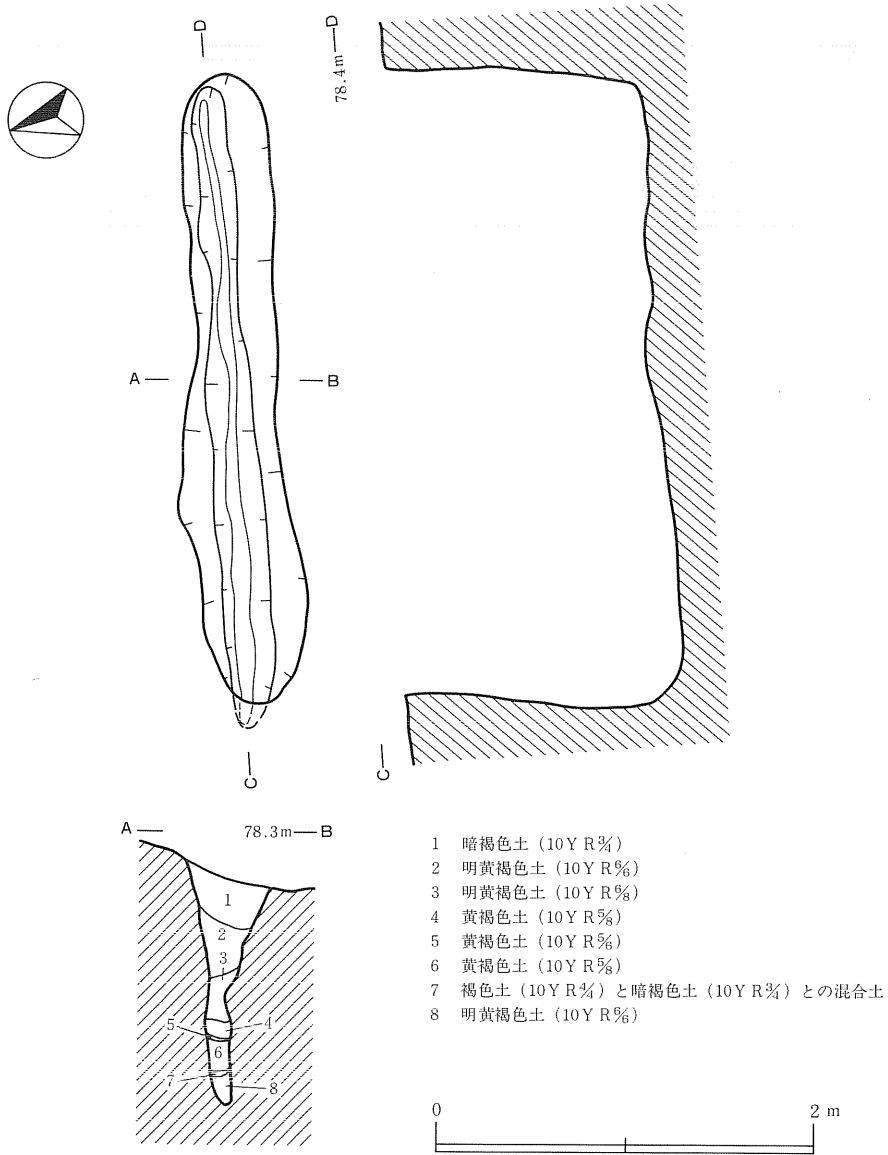


第4図 陥し穴SKT 01

SKT 03 (第6図)

調査区中央南側で確認した。SKT 01とSKT 02のほぼ中間に位置している。平面形は長径125cm、短径95cmの楕円形をなし、ほぼ円筒状に掘り込まれている。確認面から底面まで

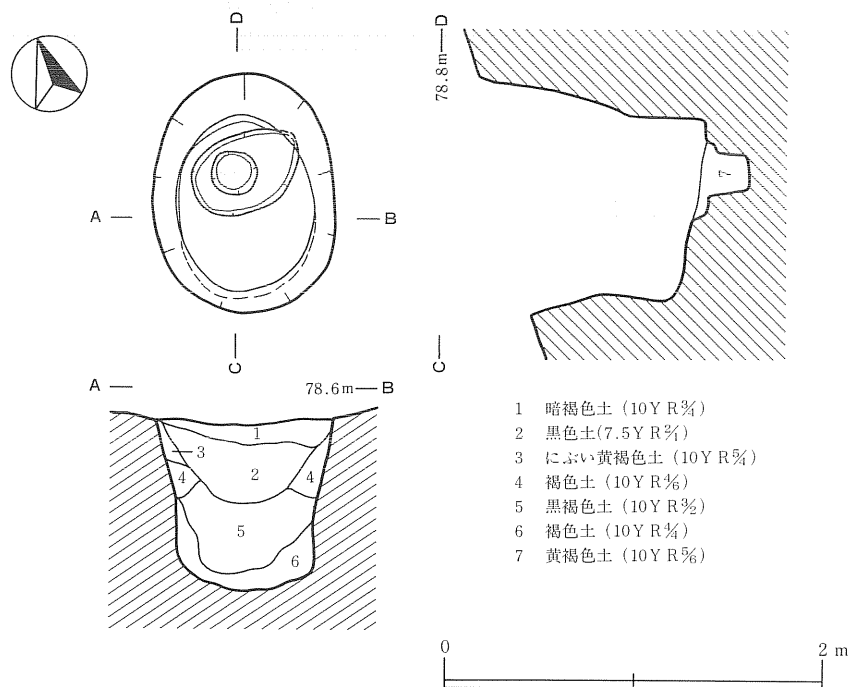




第5図 陥し穴SKT 02

の深さは90cm前後を測る。底面にはさらに深さおよそ25cmの柱穴状の落ち込みがある。この落ち込みはその上部5cmが60×40cm前後の楕円形の平面形を呈し、その下は直径約25cm、深さ20cmの円筒状になっている。その底面はほぼ平らであり、人為的な掘り込みとみられる。

覆土は7層に分かれる。1・2・5・6層は基本層序Ⅰ・Ⅱ層を主体とする流入土、3・4層は壁の崩壊土とみられる堆積である。前者のうち1・2・5層は炭化物を含むが、特に2層



第6図 陥し穴SKT 03

に顕著である。7層は底面の柱穴状掘り込み内の覆土である。基盤層である泥岩の風化土を主体とし、若干の炭化物を含む。しまりが弱く、自然堆積層と判断される。本掘り込みには逆茂木を設置した可能性があるが、現状ではその痕跡を認めることはできない。

本遺構からの出土遺物はない。

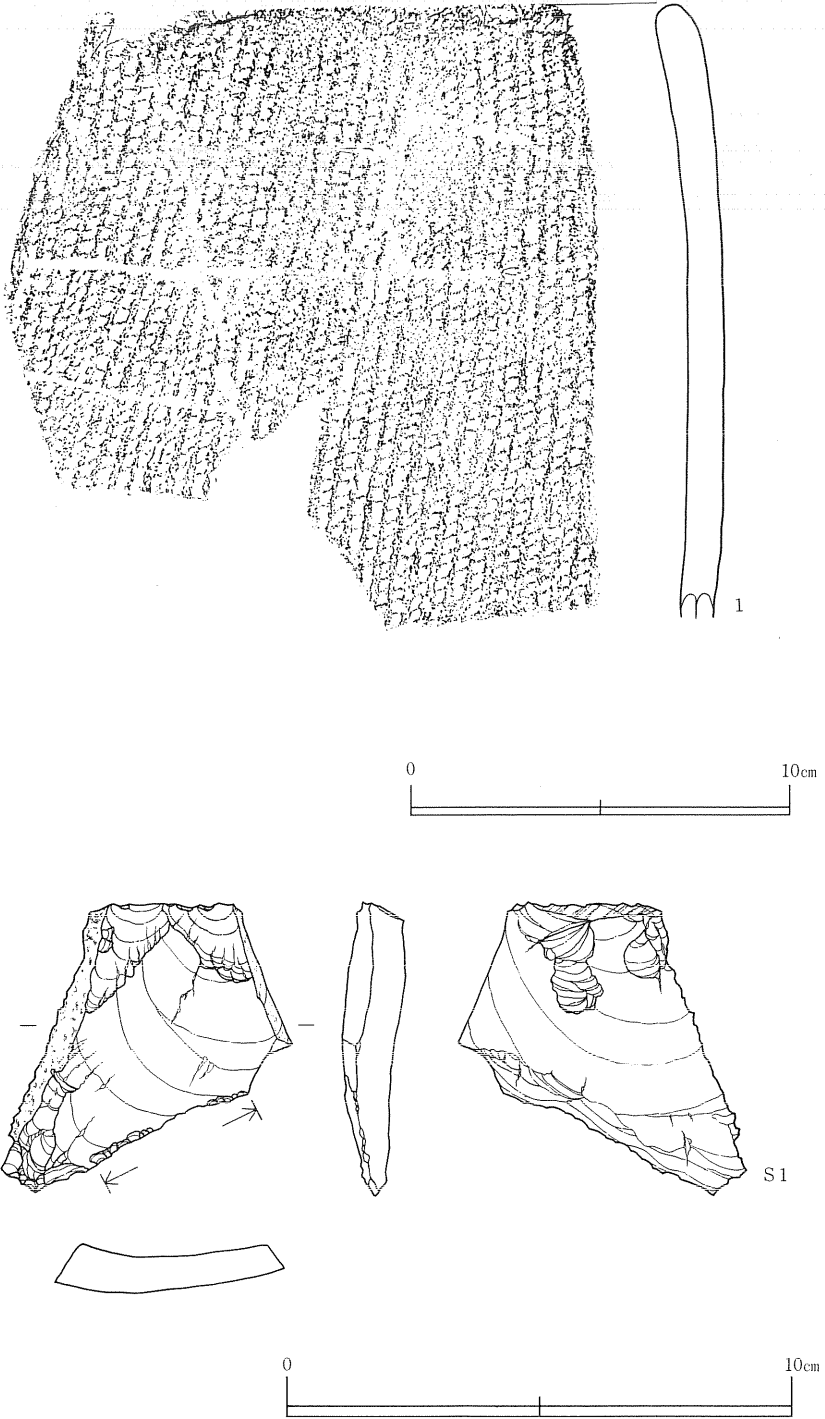
## 第2節 出土遺物

今回の調査では、調査区中央北側で同一個体の縄文土器破片数点を、調査区中央南側で微小剥離痕ある剥片1点を検出したのみであった(第3図)。

### 1 土器(第7図)

1は粗製深鉢の口縁部から体部にかけての破片である。調査区中央北側の斜面際で、破片数点をⅢ層直上から一部Ⅲ層上位において検出した。

口縁部は若干内傾し、微かに肥厚する。口唇部は丸くおさめられている。器表面には全面に比較的条の太いL撚糸文が縦位に施されている。胎土には石英や長石等の砂粒を比較的多量に



第7図 出土遺物（土器・石器）

含む。色調は外面が褐灰色、内面が黄褐色を呈し、焼成は良好である。

本例はその器形および胎土の特徴から縄文時代中期末（大木10式）に属するものと考えられる。

## 2 石器（第7図）

S 1は調査区中央南側のⅢ層直上で検出した頁岩製の微小剥離痕ある剥片である。

剥片の末端縁両面に微小剥離痕が残る。剥片は剥離面打面をもち、一方の側面には自然面が残っている。背面には大小3枚の先行剥離面が存在し、その剥離方向は主要剥離面のそれとほぼ同じである。剥離角は $110^{\circ}$ 前後を測る。

## 第3章 まとめ

今回の調査においては、馬の背状を呈する丘陵頂部において、異なった形態をもつ陥し穴3基と僅かな縄文土器と石器を検出した。

以下では陥し穴の特徴を整理し、さらに、後述するように平面形が溝状を呈する2基が属するとみられる縄文時代中期末から後期前葉にかけての陥し穴獣の評価について検討し、まとめとする。

### 形態

縄文時代の陥し穴（以下、他の文献からの引用では当該遺構の呼称は陥し穴に統一する）の形態分類は今までに多数提出されているが、その平面形によって大別し、底部施設の有無等によって細分する考えが一般的である。ここでは田村壯一氏によるA～C型の大別表記を採用する<sup>(1)</sup>。田村氏はその平面形をもとに以下の通り大別している。

A型……………溝形を呈し細長い形状を示すもの

B型……………楕円形若しくは長方形を呈すもの

C型……………円形か方形を基調としたもの

この大別に従えば、今回検出した陥し穴のうちSKT01・02がA型に、SKT03がC型に属する。

以下各型ごとにその形態と覆土の特徴をまとめる。

A型の2基は確認面での開口部の幅や底面の幅はほぼ等しいが、SKT01は開口部の長さが約4.1m、SKT02では約3.4mを測り、両者の長さにはおよそ0.7mもの差がある。一方、その縦断面形はともに長方形に近く、その斉一性は強い。また、共に底面では柱穴もしくは杭穴状の落ち込みは認められない。後述するように両者はその配置から同時に設置されたものと想定できることから、その長さの変異は許容範囲内にあったものと認められる。このことから、本型の陥し穴は長さよりも幅が獲物捕獲の機能と密接に関連するとみられる。

この陥し穴の幅に注目してその機能を推定した研究に佐藤孝則氏によるものがある<sup>(2)</sup>。佐藤氏は北海道で検出されたA型陥し穴をその主要対象動物と想定されるエゾシカの体長から陥し穴開口部の幅（短軸長）をもとに4分している。そのうち佐藤氏がC型とした幅20cm以上34cm未満のものは、エゾシカの（亜）成獣の胴幅が約21cmから34cmであることから、陥し穴の長さがエゾシカが落ちるだけ長く（長さ120cm以上）、落ちた場合肢が底に着かないだけの深さ（佐藤氏は明言していないが、恐らく深さが80cm前後以上）があれば、落ちたエゾシカの動きを制限できるとしている。

この佐藤氏の考えに従えば、本遺跡の2基のA型陥し穴は開口部幅は最大で60cmを越えるが、共に幅が34cm未満になる部位からの深さは100cm前後を測り、両者ともシカが落ち、かつ動きが制限され、生け捕ることが可能であると想定できる。<sup>(3)</sup>

次に覆土についてみると、両者とも自然堆積土とみられ、下半には季節変化に起因すると想定される壁の崩壊土と周囲からの流入土とが互層になった堆積が認められる。SKT01では底面直上に周囲からの流入土とみられる暗褐色土が、SKT02では底面直上に壁の崩壊土とみられる明黄褐色土がそれぞれ堆積しており、両者では層序に相違が認められる。後者では周囲からの流入土とみられる暗褐色系土の土量が総体的に少ないことから、両者の層序の相違はSKT02が位置する丘陵頂部の斜面際とSKT01が位置する丘陵の中央部とでは周囲からの暗褐色系土の供給量に差があったことによるものと考えられる。

また、横断面での覆土の観察からは、ある程度の埋没後の再掘り込みの痕跡を認めることはできず、現状からは、これらの陥し穴は一度掘られた後、再利用されることなく、放置されたものと推定される。

C型のSKT03は底面に柱穴状の掘り込みをもつ。このC型について田村氏は岩手県北部では底面の落ち込みが直径10cm未満の杭穴状であるのに対し、南部では直径20～30cmの柱穴状のものが大半であると指摘しており、本例は岩手県南部の特徴と共通する。<sup>(4)</sup>

底面直上と柱穴状掘り込み内には地山土に類似する黄褐色土もしくは褐色土が堆積する。いずれもしまりが弱く、逆茂木などを設置する際の埋め戻し土とは想定できない。逆茂木などが抜き取られた後に周囲から流入したものであろう。

### 配置

次に陥し穴の配置についてまとめる。

2基のA型は等高線に対して長軸を平行に約4m離れて並列する。このうち、SKT01は丘陵頂部の平坦面に、SKT02は東南側の急斜面際に位置する。C型の1基は並列する2基のA型のほぼ中間に位置する。

A型が並列する例は比較的顕著であるが、本遺跡のように2～3基程度が並列する場合とより多数の陥し穴が並列する場合がある。<sup>(5)</sup> 後者の例は秋田県南部では現在のところ認められない。この問題については後述する。

一方、C型は検出例が少なく、単独で存在する例が多い。周辺地域ではC型が直線的に等間隔に並列する配置例が確認されているが、A型と組み合わせられた配置を想定し得る例は現状では認められない。<sup>(6)</sup>

### 時期

従来の調査例からは、A型の陥し穴は縄文時代中期末～後期前葉に属する例が多く、C型は

(7) 縄文時代前期初頭以前の時期が推定されている。本遺跡では周辺から僅か一個体ではあるが、縄文時代中期末に属するとみられる深鉢破片が出土している。今回の調査では陥し穴以外に遺構は確認されなかったことから、従来の調査例も勘案すると、少なくともA型の陥し穴は縄文時代中期末に属するものと考えられる。C型の陥し穴については、その配置からはA型と同時に構築された可能性も想定できる。しかし、上述したように現状ではA型とC型とが同時に構築されたとみられる例がなく、縄文時代中期末よりも遡る時期に属する例が存在することから、その時間的位置づけについては保留したい。

### 立地

本遺跡の陥し穴は馬の背状の丘陵頂部に立地する。従来検出された陥し穴は段丘あるいは丘陵の比較的広い平坦面や緩斜面に立地する例が多い。本遺跡のような立地は同様の地形の調査例が乏しいため、特異な立地であるかは現状では判断し難い。

なお、西本豊弘氏は陥し穴が遺物・遺構の多い地域から発見される理由として、(エゾ)シカの生息適地が人間の居住した後の開地のような下草の繁茂する日当のよい疎林であったことを挙げている。<sup>(9)</sup>

遺跡の層序で触れたように、本遺跡周辺ではA型の陥し穴が設置されたとみられる縄文時代中期前後においては疎林植生が形成されていた可能性がある。この疎林植生は、現状では草原植生の影響を強く受けて生成するされる黒ボク土が存在せず、下草が繁茂していたかは不明ではあるが、西本氏の指摘する(エゾ)シカの生息適地に相当する可能性があるだろう。また、陥し穴掘削の際の効率から、樹木の密集した極相林ではなく、疎林が選地された可能性も考慮すべきである。

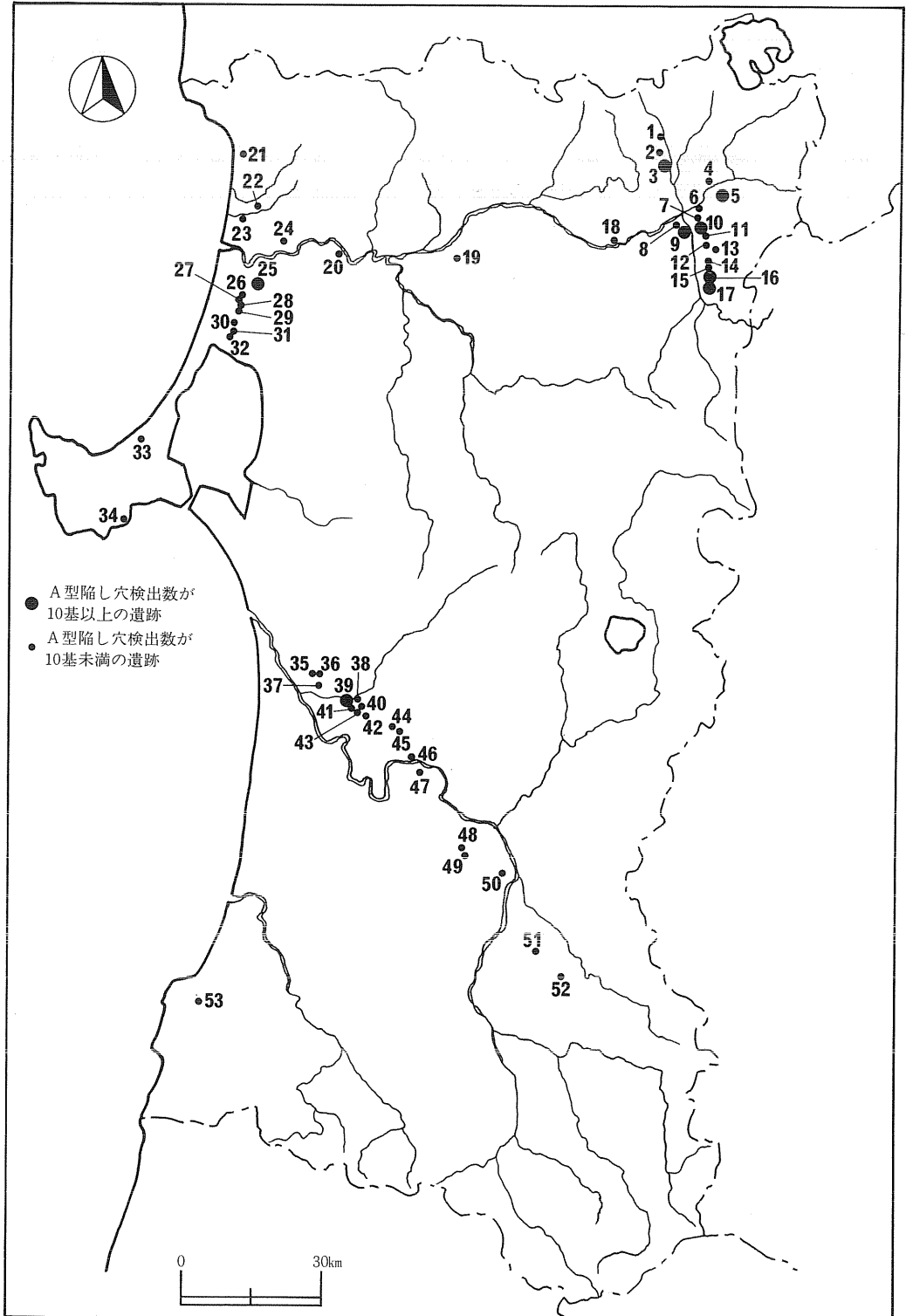
このように、陥し穴設置の際の選地には地形のみでなく、当時の微地的な植生も大きな要因であった可能性があり、今後留意されるべきであろう。

### 評価

今回の調査においては、既述のように馬の背状の丘陵頂部で、僅かの遺物と陥し穴とを検出した。遺構・遺物の検出状況と周辺の地形の観察からは、今回の調査区に隣接して居住域が存在したとは予想できない。縄文時代中期末の土器片の出土から、今回の調査区周辺は少なくとも縄文時代中期末には少数の陥し穴が設置された狩場であったと想定することができる。以下においては、この想定に基づき、A型の2基の陥し穴を中心に、本遺跡の評価について述べ、本章のまとめとする。

本遺跡例を検討するに際し、まず周辺の陥し穴について概観する。

現在までの管見に触れた秋田県内のA型の陥し穴(以下特記しない限り、陥し穴はA型のものを指すこととする)検出遺跡は第8図・第1表の通りである。



第8図 秋田県内陥し穴検出遺跡分布図



地図番号	遺跡名	所在地	陥し穴検出数			文	献	備考
			A型	B型	C型			
1	大岱Ⅰ	小坂町	2			秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅹ』秋田県文化財調査報告書第109集 1984		
2	白長根館Ⅰ	小坂町	7			秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅺ』秋田県文化財調査報告書第120集 1984		
3	はりま館	小坂町	52		3	秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅹ』秋田県文化財調査報告書第109集 1984 同『はりま館遺跡発掘調査報告書』 同第192集 1980	A型5基並列例1、6基並列例1	
4	下砂沢	鹿角市	1			鹿角市教育委員会『下砂沢遺跡発掘調査報告書』1990		
5	大湯環状列石周辺	鹿角市	28			鹿角市教育委員会『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書』(2)・(4)～(6) 1986・1988～1990		1990年調査分を含む
6	一ツ森館跡	鹿角市	1			秋田県教育委員会『一ツ森館跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第197集 1990		
7	高市向館跡	鹿角市	2			鹿角市教育委員会『高市向館跡発掘調査報告書』1982		
8	太田谷地館跡	鹿角市			3	秋田県教育委員会『西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ』秋田県文化財調査報告書第183集 1989		
9	高屋館跡	鹿角市	13			秋田県教育委員会『西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ』秋田県文化財調査報告書第198集 1990		
10	妻の神Ⅲ	鹿角市	13			秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅹ』秋田県文化財調査報告書第108集 1984	A型6基並列例1	
11	下乳牛	鹿角市	1		1	秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅺ』秋田県文化財調査報告書第119集 1989		
12	猿ヶ平Ⅰ	鹿角市	1			秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅴ』秋田県文化財調査報告書第91集 1982		
13	案内Ⅵ	鹿角市	1			秋田県教育委員会『県道田山・花輪線関係遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第115集 1984		
14	中の崎	鹿角市	1			秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅶ』秋田県文化財調査報告書第105集 1982		
15	柏木森	鹿角市	1			秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅶ』秋田県文化財調査報告書第105集 1982		
16	北の林Ⅰ	鹿角市	16			秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅲ』秋田県文化財調査報告書第89集 1982	A型5基並列例1	
17	北の林Ⅱ	鹿角市	21			秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅳ』秋田県文化財調査報告書第90集 1982		
18	薦ヶ長根Ⅳ	大館市	1			秋田県教育委員会『国道103号線バイパス工事関係遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第84集 1981		
19	藤株	鷹巣町	2			秋田県教育委員会『藤株遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第85集 1981		
20	竜毛沢館跡	二ツ井町	3			秋田県教育委員会『竜毛沢館跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第188集 1990		縄文後期前半の竪穴住居跡を切る例2
21	土井	八森町	2			秋田県教育委員会『土井遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第111集 1984		
22	中田面	峰浜村	5			秋田県教育委員会『中田面遺跡・重兵衛Ⅰ・Ⅱ遺跡・根洗場遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第74集 1980		
23	竹生	能代市	1			秋田県教育委員会『杉沢台・竹生遺跡』秋田県文化財調査報告書第83集 1981		
24	館下Ⅰ	能代市	1			秋田県教育委員会『館下Ⅰ遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第62集 1979		
25	腹鞆の沢	能代市	10			秋田県教育委員会『腹鞆の沢遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第97集 1982		
26	上の山Ⅱ	能代市	2			秋田県教育委員会『上の山Ⅱ遺跡第2次発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第137集 1986		
27	寒川Ⅰ	能代市			4	秋田県教育委員会『一般国道7号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』秋田県文化財調査報告書第167集 1988		
28	十二林	能代市	8			秋田県教育委員会『一般国道7号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』秋田県文化財調査報告書第178集 1989		
29	石丁	能代市	2			秋田県教育委員会『一般国道7号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』秋田県文化財調査報告書第178集 1989		
30	福田	能代市	1			秋田県教育委員会『一般国道7号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』秋田県文化財調査報告書第178集 1989		
31	鴨子台	八竜町	3		1			1990年調査
32	八幡台	八竜町	2					1990年調査
33	三十刈Ⅰ	男鹿市	2			秋田県教育委員会『三十刈Ⅰ・Ⅱ遺跡』秋田県文化財調査報告書第110集 1984		
34	大畑台	男鹿市	2			日本鉱業株式会社船川製油所『大畑台遺跡発掘調査報告書』1979		
35	下堤C	秋田市	1			秋田市教育委員会『秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書』1987		
36	下堤D	秋田市	4			秋田市教育委員会『秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書』1982		
37	湯ノ沢F	秋田市	1			秋田市教育委員会『秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書』1984		
38	風無台Ⅰ	河辺町			1	秋田県教育委員会『七曲台遺跡群発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第125集 1985		
39	松木台Ⅲ	河辺町	15			秋田県教育委員会『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅰ』秋田県文化財調査報告書第150集 1986		
40	石坂台Ⅰ	河辺町	1			秋田県教育委員会『七曲台遺跡群発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第125集 1985		
41	石坂台Ⅲ	河辺町	1			秋田県教育委員会『七曲台遺跡群発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第125集 1985		
42	石坂台Ⅳ	河辺町	1		3	秋田県教育委員会『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅰ』秋田県文化財調査報告書第150集 1986		
43	石坂台Ⅷ	河辺町	1			秋田県教育委員会『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅰ』秋田県文化財調査報告書第150集 1986		
44	上ノ山Ⅱ	協和町	6			秋田県教育委員会『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅱ』秋田県文化財調査報告書第166集 1988		縄文前期後半の竪穴住居跡を切る例1
45	館野	協和町	1			秋田県教育委員会『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅱ』秋田県文化財調査報告書第166集 1988		
46	半仙	協和町	3		5	秋田県教育委員会『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅲ』秋田県文化財調査報告書第180集 1989		
47	上野台C	西仙北町	1			秋田県教育委員会『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅲ』秋田県文化財調査報告書第180集 1989		
48	大畑潜沢Ⅲ	南外村	2		1	本書		
49	石神	大森市	6			秋田県教育委員会『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅵ』秋田県文化財調査報告書第191集 1990		
50	下田	大曲町			1	秋田県教育委員会『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅳ』秋田県文化財調査報告書第189集 1990		
51	オホン清水	横手市	2		4	横手市教育委員会『オホン清水～第3次遺跡発掘調査報告書～』1984		
52	富ヶ沢A窯跡	横手市			6			1990年調査 逆茂木残存例あり
53	下岩ノ沢	仁賀保町	1			仁賀保町教育委員会『下岩ノ沢遺跡発掘調査報告書』1986		

第1表 秋田県内陥し穴検出遺跡一覧表

本遺跡付近では南東約1kmの大曲市石神遺跡（第8図・第1表48、以下地図番号のみ略記する）で6基検出されている。石神遺跡例はいずれもその長軸両端の壁が大きく末広がりになっており、本遺跡例とはその縦断面形態を異にしている。このことは、両者は時期を異にすることによるか、あるいは別の系譜に属する集団によって設置されたことによるか（またはその両者の要因によるか）と思われる。現在のところ本遺跡周辺には石神遺跡例以外には陥し穴の検出遺跡は認められない。

次に県内の陥し穴検出数を見ると、秋田市以南を県南部、それより北を県北部とに二分すると、県北部の検出数が全体の4/5以上を占め、その検出数に顕著な差が認められる。また、その配置は1基単独か、2・3基程度が並列する例がいずれの地域でも一般的であるが、小坂町はりま館遺跡（3）や鹿角市妻の神Ⅲ遺跡（9）などでは5基以上の陥し穴が並列している。

このような多数の陥し穴が並列する例は北海道（西南部）・東北地方北部で顕著であるが、東北地方南部ではほとんど認められないようである。このような陥し穴が多数並列する例では、今村啓爾氏に代表されるように一般に巻狩式の追い込み猟のような集団猟が行われた可能性が想定されている。一方、佐藤宏之氏はアイヌや北方狩猟民の民族例との対比から、（A型の）<sup>(11)</sup> 陥し穴猟はシカ類の生態に適応した（積極的）罠猟であったとして<sup>(12)</sup>

ここでは、600基以上の陥し穴が検出された青森県六ヶ所村発茶沢遺跡の配列を取り上げて、この問題について若干の検討を行いたい。

発茶沢遺跡の調査担当者の一人である福田友之氏は陥し穴は2列1単位として100基前後が1単位であったと想定している<sup>(15)</sup>。しかしながら、現状の陥し穴の分布から明瞭にそのような多数の陥し穴からなる単位を抽出することは困難である。現状の分布から等間隔で並列し、確実に同時設置された単位と認め得るものは数基程度からなる。このうちの典型的な例に昭和62年度調査の第2145～2150号陥し穴6基がある。さらに若干間隔が異なるが第2151・2152号陥し穴も先の陥し穴群に並列し、同時設置された可能性が強い<sup>(16)</sup>。これらの陥し穴の法量をみると開口部の長さは290～330cm前後、幅は50～80cm前後、深さ96～145cm前後で、比較的斉一性が強い。先の佐藤孝則氏の分析に基づけば第2151号については必ずしも確実ではないが、他の陥し穴は幅が34cm未満になる部位からの深さは80cm前後を越え、いずれもシカの陥し穴としての機能を果すものと考えることができる。

一方、その縦断面形は大きく3群にまとめることができる。発茶沢遺跡昭和62年度発掘調査の報告書の縦断面形（長軸断面形）<sup>(17)</sup> の分類に従うと第2146・2147・2149・2151号がB類（開口部から底部にかけて、ほぼ垂直に下がる形状のもの）、第2148・2150号がD類（開口部下位及び壁の中位で、外方へ袋状に広がる形状のもの）、第2145・2152号がI類（一方の壁がB類で、他方の壁がD類のもの）となろう。これらの各群相互の配列には規則性が認められず、各群が

機能別に配列されたとは想定し難い。このように縦断面形の相違は基本的に機能差を示さない  
と想定できることから、その配列から計画的に同時に設置されたと認定できる陥し穴群の縦断  
断面形の相違は、各類の陥し穴設置者ごとの陥し穴掘削の癖の相違を示すものと推定する。この  
ことから、これらの陥し穴群の設置は3群の異なる設置者（その陥し穴掘削に要する相当の労  
働量から複数の人間からなる集団と考える）の共同作業によってなされたものと想定する。<sup>(18)</sup>

発茶沢遺跡例と同様に5・6基前後の陥し穴が等間隔に並列し、それらの陥し穴を主にその  
縦断面形から群別することができる例に、秋田県内では小坂町はりま館遺跡（3）、鹿角市妻の  
神Ⅲ遺跡（9）、同北の林Ⅰ遺跡（15）などがある。はりま館遺跡では昭和57年の調査で、ほぼ  
一列に並列する6基の陥し穴（SKT23～28）が検出されている。ここでも、その縦断面  
形からSKT23と24、SKT25と27、SKT26と28との3群に群別できる。同様に妻の神Ⅲ遺跡では並列する6基の陥し穴SK（T）07～12が3群（07と08、09と  
12、10と11）に別れ、北の林Ⅰ遺跡では並列する5基の陥し穴SK（T）001、002、  
009～011を3群（001と002、009、010と011）に群別することができる。

一方、単独で立地する例や本遺跡例のような2・3基の陥し穴が並列する例は秋田県内外で  
広域にわたって認められる。ただし、その縦断面形などの細かな形態についてみると、秋田県  
南部においては本遺跡例や河辺町松木台Ⅲ遺跡（38）SKT169～171、大曲市石神遺跡  
（48）SKT01・02などのように各遺跡の並列例ごとにその斉一性は比較的明瞭である。  
これに対し、秋田県北部（さらに東北地方北部）では、斉一な形態を有する並列例も存在す  
る一方で、例えば小坂町はりま館遺跡（昭和57年度調査）SKT095・096、同遺跡（昭  
和63年度調査）AⅢ区SKT48・51、同遺跡（同）D区SKT150・151、あるいは  
先の青森県発茶沢遺跡（昭和54・55年度調査）第112・113号<sup>(19)</sup>などのように異なった形態  
（縦断面形）の陥し穴が2・3基並列する例も少なからず認めることができる。

このような2・3基並列する陥し穴群の細かな形態差の有無からは、先の議論を踏まえると、  
県南部においては、陥し穴は基本的に1単位の集団で設置、利用されたと想定されるのに対し、  
県北部（さらに東北地方北部）では1単位の集団のみではなく、複数単位の集団によっても設  
置、利用されたものと想定される。さらに県北部（東北地方北部）では、既述のように陥し穴  
の分布が濃密であることから、複数単位の集団の共同労働によって陥し穴が設置、利用され  
ることはかなり普遍的であったものと想定する。ただし、これらの陥し穴群を利用した狩猟法そ  
のものが、畏猟であったのか巻狩的な集団猟であったのかを現在の資料から帰納することは困  
難である。しかしながら、その多数の検出例から狩猟活動の体系の中で重要な位置を占めてい  
たとみられる陥し穴群の設置が、県北部（東北地方北部）において共同労働によってなされた  
とみられることは、陥し穴利用の存否は別として、当該地域に巻狩的な集団猟も実施された可

能性は高いと考える。少なくとも狩猟活動の体系中には複数単位の集団からなる共同労働が組み込まれていたものと想定できる。

一方、県南部の場合、現状では巻狩式の追い込み猟などの共同労働が行われた痕跡を認めることはできない。特に、本遺跡例は丘陵頂部に陥し穴が2基設置されたのみで、これらの陥し穴のみでは獲物の大量捕獲は期待できない。また、遺跡周辺は狭小な馬の背状の地形を呈することから、陥し穴を補助手段とした大規模な集団による追い込み猟の実施は効果的とは思われず、その存在は想定し難い。このことから、本遺跡例は1単位の集団が罾猟として陥し穴を設置、利用したことを示していると推定する。この1単位の集団は、後述するように当該地域では陥し穴の出現と前後して単独で立地する小規模の竪穴住居跡が出現することから、ここでは一応この小規模の竪穴住居跡に居住した集団（核家族か）を想定しておく。

上述した現状における陥し穴の分布密度と配置の南北差を認めるならば、以上の想定から、その背景には狩猟活動における共同労働の在り方に相違が存在した可能性を推定できよう。さらに、この相違は該期の狩猟活動のみにとどまらず、集団関係の在り方そのものの、換言すれば社会構造の相違と密接に関連するものと予想できよう。

ここで注意されることは、陥し穴の集中的な出現と相前後して北海道から東北地方北部にかけて環状列石に代表される当初から計画的に規格化された<sup>(20)</sup>と想定される集団墓が出現する事実である。県南部においても増田町八木遺跡<sup>(21)</sup>のように縄文時代後期前葉には集団墓が出現しているが、土坑墓同士の切り合いも激しく、現状では例えば鹿角市大湯環状列石と比較すると、その当初からの規格性は相対的に弱いものと想定する。

この集団墓に予想される南北の規格性の差は当時の社会構造の差を示すものと考えられ、この社会構造の差は、ここでみてきた陥し穴の分布から予想される社会構造の相違と対応する可能性が強いものと予想する。これらの社会構造のモデルをここで提出することはできないが、総体として県南部では、相対的に集団間の格差が小さく、かつその集団間の結び付きが弱く、その構成員に対する規制も相対的に弱いものであった<sup>(22)</sup>と想像する。

この社会構造の在り方は集落構造にも反映すると予想される。ここで縄文時代中期末～後期前葉の集落構造について検討する十分な準備はないが、本遺跡周辺の集落について概観しておく。

まず、本遺跡周辺では北に約2km離れた南外村小出Ⅰ遺跡で縄文時代中期末の、同小出Ⅲ遺跡<sup>(24)</sup>で縄文時代中期末～後期初頭の竪穴住居跡が各1棟が検出され、南に約1km離れた大曲市石神遺跡<sup>(25)</sup>で縄文時代後期前葉の竪穴住居跡1棟が検出されている。

これらの竪穴住居跡には現状で本遺跡例と確実に同時期と判断できる例はないが、いずれも周囲に同時期の竪穴住居跡が認められず、単独で存在している点が立地上の特徴となっている。

単独で立地する類例には縄文時代後期前葉に属する西仙北町上野台B遺跡例もある。<sup>(26)</sup>

次に、谷地薫氏による河辺町七曲台地域における縄文時代の集落動向の分析をみると、縄文時代中期末（大木10式期）には竪穴住居跡が小型化し、1遺跡における竪穴住居跡の数が増加する傾向を認めている。そして、縄文時代後期には竪穴住居跡が激減し、後期前葉に属するものが1棟存在するに過ぎないことが指摘されている。さらに秋田市御所野台地地域においても同様の傾向が認められるとしている。谷地氏はこの様相を全体から相対的に独立した小単位のグループが生成したものと評価するが、縄文時代中期末においては食糧獲得活動は共同行動によるものと想定している。しかし、上にみたように、該期に前後して単独の竪穴住居跡のみで構成される集落遺跡が新たに出現することから、食糧獲得活動においても、小単位のグループが生成したこと、換言すれば、該期（少なくとも現状で七曲台地域・御所野台地地域で複数の竪穴住居跡からなる集落が消失する縄文時代後期前葉）には労働単位が総体として小規模化する傾向が想定される。<sup>(28)</sup>

該期の集落動向とそこから推定される生業形態の在り方の実態については、集落の定住性の問題等なお検討を要するが、大勢として、このような労働単位の小規模化傾向を認めるならば、これに対応して、多角的、効率的な生業戦略が意図され、その一環として獲物を生け捕ることが可能な罾猟としての（A型）陥し穴罾が採用されたとする想定も可能であろう。<sup>(29)</sup>

以上みてきたように、本遺跡で検出された陥し穴は狩猟活動に関する一資料であるにとどまらず、秋田県南部における縄文時代中期末から後期前葉にかけての社会構造の一端を示唆する貴重な資料と評価することができる。

また、近年大規模な開発行為に伴って、従来の遺跡とは質的に異なる規模や性格を有するとみられる遺跡の発見が相次ぎ、注目を集めている。しかしながら、そのような遺跡の評価も、例えば本遺跡のような僅かな遺構・遺物が検出されるに過ぎない遺跡を含めた他の遺跡との比較検討を通じて、初めて可能となってくるものである。そのような比較資料としての意味においても、本遺跡の意義は決して小さくないものと言えよう。

#### 註

- 1 田村壮一「陥し穴状遺構の形態と時期について」『紀要』Ⅷ（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1987（昭和62年）
- 2 佐藤孝則「動物生態学からみた溝状ピットの機能」『北海道考古学』第22輯 1986（昭和61年）
- 3 大泰司紀之氏によれば縄文時代の本州のシカは現在のエゾシカとほぼ同じ大きさであったとされることから、佐藤氏による北海道の陥し穴の機能推定基準を東北地方の陥し穴に適用するこ

とは可能であろう。

大泰司紀之「シカ」『縄文文化の研究』2 生業 1983 (昭和58年)

- 4 註1文献
- 5 註1文献、森田知忠・遠藤香澄「Tピット論」『北海道の研究』第1巻考古篇I 1984 (昭和59年)
- 6 註1文献に岩手県の例が紹介されている。
- 7 註5文献
- 8 石神遺跡発掘調査報告書所載の秋田県内陥し穴検出遺跡一覧表による。  
秋田県教育委員会『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書VI』秋田県文化財調査報告書第191集 1990 (平成2年)
- 9 西本豊弘「狩猟・漁撈の場と遺跡」『季刊考古学』第7号 1984 (昭和59年)
- 10 今後、東北地方南部においても(A型)陥し穴の検出例は増加すると予想されるが、現在までの東北地方における発掘調査には極端な地域的偏りが存在するとは考えられないことから、(A型)陥し穴の分布の中心が北海道から東北地方北部にあることは動かないであろう。  
註5文献、福田友之「下北半島尾駈・鷹架沼周辺の溝状ピット群」『考古学論叢II』芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会 1989 (平成元年)
- 11 今村啓爾「陥穴(おとし穴)」『縄文文化の研究』2 生業 1983 (昭和58年)
- 12 佐藤宏之「陥し穴猟と縄文時代の狩猟社会」『考古学と民族誌』渡辺仁教授古希記念論文集刊行会 1989 (平成元年)
- 13 青森県教育委員会『発茶沢』青森県埋蔵文化財調査報告書第67集 1982 (昭和57年)
- 14 青森県教育委員会『発茶沢(1)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第120集 1989 (平成元年)
- 15 註13文献
- 16 註14文献
- 17 註14文献
- 18 ここでは、同時設置が確実と認められる陥し穴群のみを分析の対象としたが、調査範囲全体からの陥し穴の検出数から、本来はより多くの陥し穴が同時に設置された可能性は強い。よって、その群別はより増加することも予想され、3群別が、普遍的なものであったかは確実ではない。しかしながら、後述するように東北北部の陥し穴群の在り方が環状列石の出現と関連するとすれば、水野正好氏が湯環状列石(万座環状組石墓群)が3小群からなるとした分析と相通じる点がある。今後検討すべき課題と考える。  
水野正好「環状組石墓群の意味するもの」『信濃』第20巻第4号 1968 (昭和43年)
- 19 註13文献
- 20 秋元信夫「東北地方の配石遺構」『シンポジウム「縄文時代屋外配石の変遷—地域的特性とその画期—」山梨県考古学協会秋期大会要旨』山梨県考古学協会・山梨学院大学 1990 (平成2年)
- 21 秋田県教育委員会『八木遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第181集 1989 (平成元年)

- 22 文化財保護委員会『大湯町環状列石』1953（昭和28年）
- 23 大湯環状列石の昭和26・27年の発掘調査報告書において、後藤守一氏は該期に多少の階級差が生じてきた可能性を考慮している。現状では階級差あるいは階層差の有無は明らかでないが、ある程度恒常的な集団労働（例えば本文中でその存在の可能性を想定したような集団猟）における役割分担から階層差が生じたとする想定もできよう。

註22文献

- 24 秋田県教育委員会『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅷ』秋田県文化財調査報告書第206集 1991（平成3年）
- 25 註8文献
- 26 秋田県教育委員会『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅲ』秋田県文化財調査報告書第180集 1989（平成元年）
- 27 谷地薫「七曲台における縄文時代の居住形態について」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第5号 秋田県埋蔵文化財センター 1990（平成2年）
- 28 縄文時代後期前葉には規模の大きな集落が分化し、より小さな単位へと移行したとする想定は、駒坂台Ⅰ・Ⅱ遺跡の報告においても触れられている。
- 秋田県教育委員会『高速交通関連道路整備事業（和田御所野）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第195集 1990（平成2年）
- 29 縄文時代中期から後期（およびその平行時期）にかけての地球規模の気候変動期における社会の動向については、藤本強氏が世界各地の例を挙げ、その気候変動に対する人類の対応が多様であったことを指摘している。該期に想定される県南部の生業戦略の変化も、このような気候変動に伴う環境変化と対応する可能性はあろう。しかし、この環境変化はあくまでもその契機であって、（おそらく県北部とは異なって）社会そのものに既に労働単位の小規模化傾向が内在していたものと推定する。

藤本強「墓制成立の背景」『縄文文化の研究』9 縄文人の精神文化 1983（昭和58年）

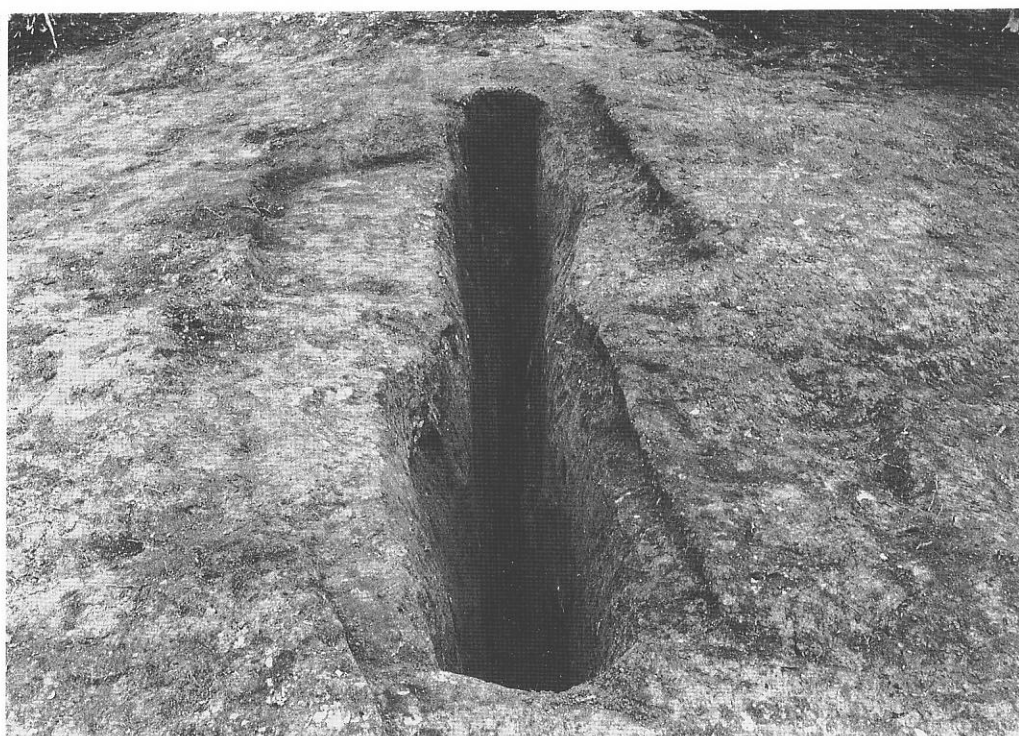


1 調査区全景 (東▷西)



2 丘陵南裾部調査風景 (北▷南)

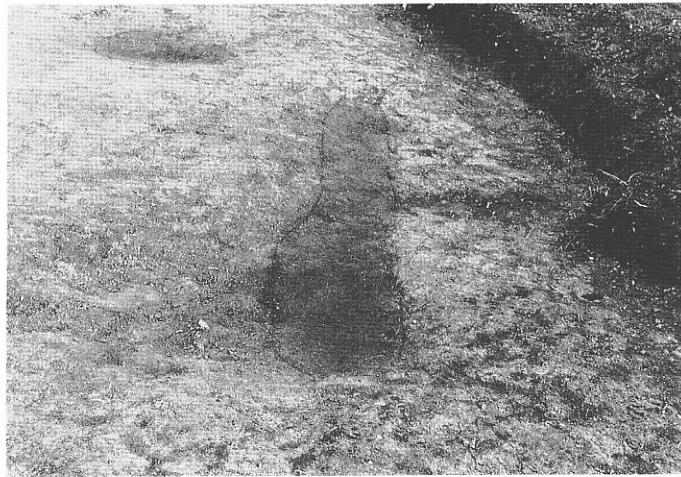




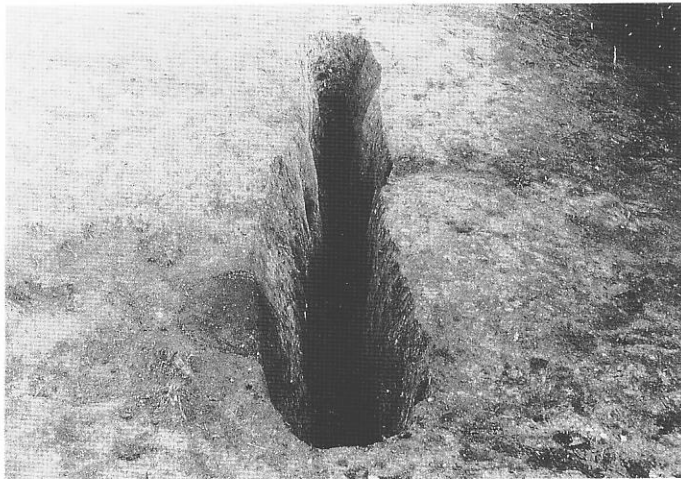
1 S K T 01完掘状況 (西▷東)



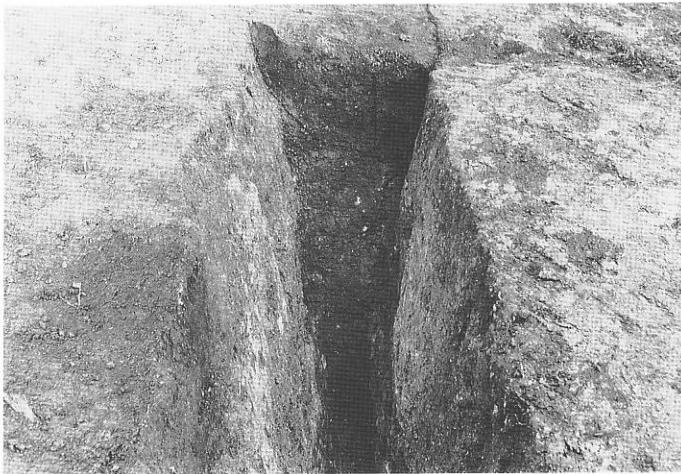
2 S K T 01土層断面 (西▷東)



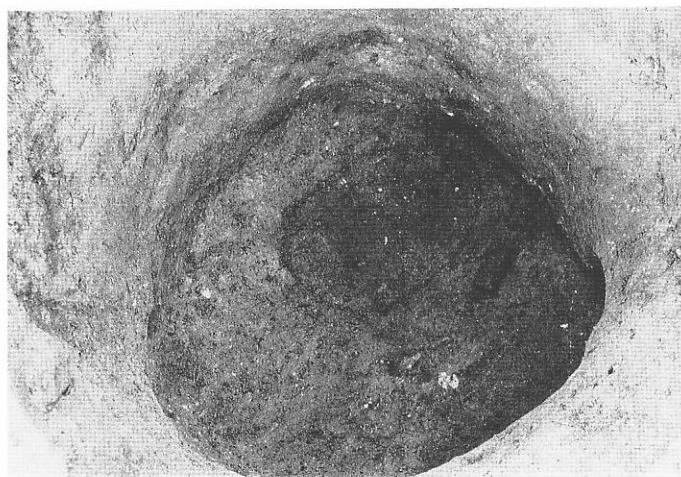
1 SKT02確認状況 (西▷東)



2 SKT02完掘状況 (西▷東)



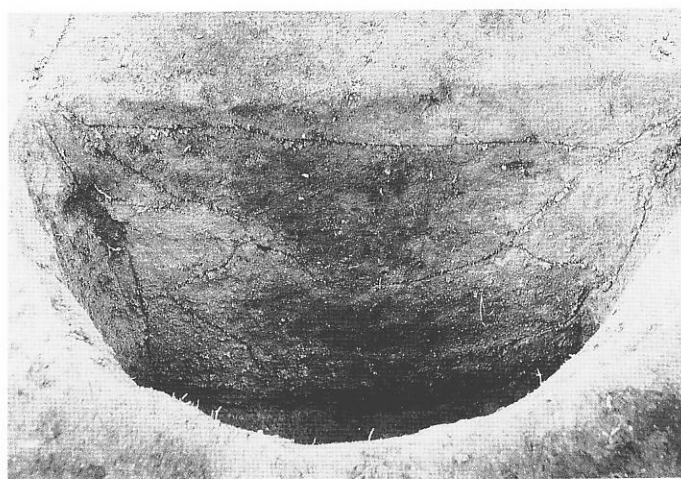
3 SKT02土層断面 (西▷東)



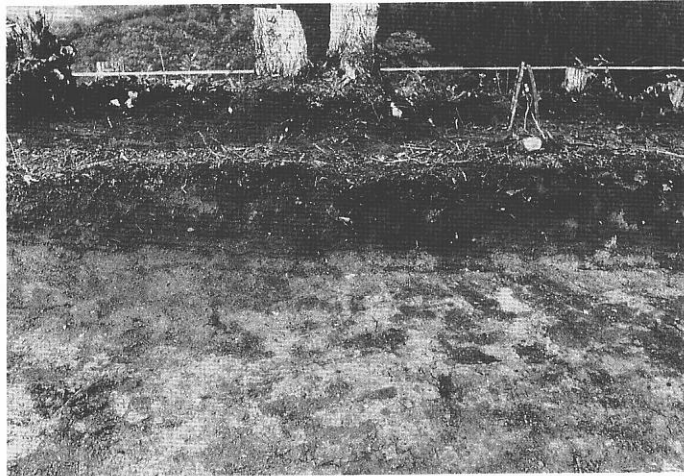
1 SKT03底面 (南▷北)



2 SKT03完掘状況 (南▷北)



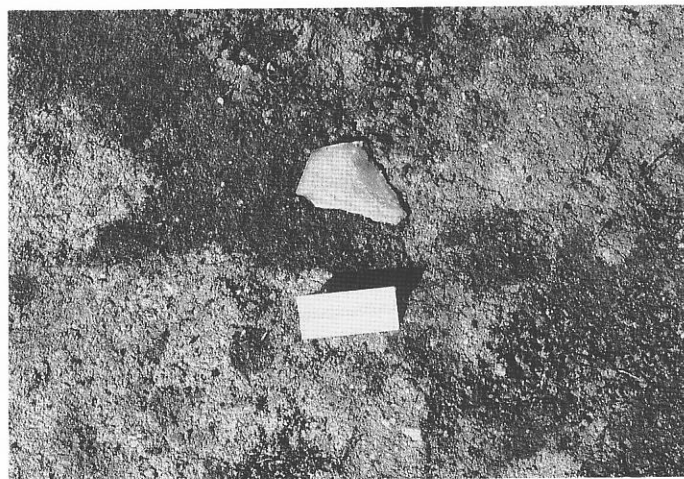
3 SKT03土層断面 (南▷北)



1 調査区(B-C間)土層 (南▷北)

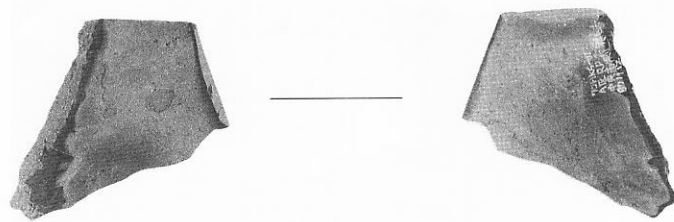


2 土器検出状況 (南西▷北東)



3 石器検出状況 (東▷西)





1 出土遺物（土器・石器）

あ と が き

発掘調査及び整理作業に関しては下記の方々の協力を得ました。(五十音順)

発掘調査：五十嵐運蔵 伊藤卯之松 伊藤運二 伊藤喜一郎 伊藤キヨノ 伊藤金一 伊藤サ  
ダ 伊藤順子 伊藤成子 伊藤長一郎 伊藤テル 伊藤智 伊藤昇 伊藤ハル 伊  
藤弘 伊藤フジエ 伊藤マツエ 伊藤ミツ 伊藤光子 伊藤裕子 伊藤禮子 加藤  
光一 加藤サクラ 加藤貞子 菊地アイ子 菊地みよ子 絹川忠治郎 工藤キン子  
小林正美 小松キワ子 今キミエ 今良治 今田寿夫 今野才子 今野佐治右工門  
今野俊一 今野時男 今野トク子 今野春彦 今野エシノ 斎藤善一 佐々木健  
佐々木伝右工門 佐々木花子 佐々木ミサ 佐々木陸之助 佐々木礼治 佐藤愛子  
佐藤健治朗 佐藤ケ子 佐藤精治 佐藤タミ子 佐藤テツ 佐藤豊太郎 佐藤フヨ  
佐東容子 佐渡哲美 鈴木慶一 鈴木善蔵 鈴木龍子 相馬昭夫 相馬キヨ 相馬  
謙 相馬紘平 相馬トム 高橋秀造 高橋政子 高橋トミヨ 高橋吉美 高橋儀見  
藤原キエ 藤原三重子 藤原ヨシ 藤原吉次 藤原与四郎 武藤勇 武藤留吉 八  
嶋テツヨ 八嶋ヨシ子

整理作業：泉谷昭子 伊藤昭彦 加藤悦子 小松郁子 小柳都 進藤玲子 鈴木孝子 高橋江  
美子 高橋京子 高橋フサ子 新田和子 森川たま子 藤倉寿枝 本間美紀子